

山形県埋蔵文化財調査報告書第14集

跡 跡 跡 跡 跡  
遺 遺 遺 遺 遺  
遺 遺 遺 遺 遺  
場 中 川 台 B  
郡 川 台

発掘調査報告書

山形県教育委員会



# 山形県文化財発掘調査報告書

——昭和50・51年度山形県営農林事業関係——

昭和53年3月

# 序

昭和50・51年度に行なわれた農林事業にかかる諸遺跡中、記録保存のための発掘調査が行われた4遺跡の調査報告書をまとめることができました。

西川町的場遺跡は農業構造改善事業、余目町上台遺跡・羽黒町村中遺跡は庄内スーパー農道、藤島町古郡B遺跡は藤島川改修、藤島町助川遺跡は県営圃場整備のそれぞれの事業とともになものであります。

緊急発掘調査を実施する埋蔵文化財のなかで、農林事業に関係する遺跡が年々増加しています。農業の近代化のために、基盤整備をはかり、時代の要請にこたえるという本県の重点施策から考えて、今後とも農林事業と埋蔵文化財の保存のための調整は、ますます重要な課題になってくるものと思います。

本報告書に示された遺跡と遺物は、悠久のむかしの祖先たちの生活と歴史をさぐる重要な資料ですが、なかんづく西川町的場遺跡は縄文時代晚期の良好な遺跡として、竪穴住居跡とともに当時のくらしをしのぶ数々の貴重な遺物を出土しました。幸い多くの調査関係者の熱意と農林関係各機関の助力によって、貴重な遺跡の調査と数多い資料の整理が終了し、ここに報告書を刊行することができました。

農林水産部の担当職員、地元教育委員会、調査関係の多くの方々に感謝するとともに、善意ある批判と暖かい援助を期待いたします。

昭和53年3月

山形県教育委員会

教育長 赤星武次郎

## 例　　言

1. 本報告書は、山形県教育委員会が昭和50年度・51年度に実施した、農林事業に係る的場・村中・古郡B・助川・上台の各遺跡の緊急発掘調査報告書である。、
2. 発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、西川町・羽黒町・藤島町・余目町の各教育委員会及び関係諸機関の協力を得て行われたものである。
3. 採図縮尺は、遺構については2分の1・3分の1とし、土器の実測図は3分の1を原則とし、拓影図はすべて3分の1とした。また、石器の実測図は石礫等（小形）を2分の1、凹石・石皿等（大形）を4分の1とし、それぞれにスケールを示した。
4. 採図中の記号は、遺構にS、遺構因子にE、遺物にRを冠してST—竪穴住居跡・SD—溝跡・SH—墳墓・SK—土壤・SP—ピット群・SX—性格不明遺構・ED—周溝・EL—炉・カマド・EP—ピット・EU—埋設土器・EY—床面・RN—自然遺物・RP—土製品・RQ—石製品・RW—木製品とした。
5. 本報告書を作成にあたっての分担執筆等は以下の通りである。

執筆：的場遺跡—佐藤庄一・野尻 侃・渋谷孝雄・茨木光裕

村中遺跡—名和達朗・尾形与典

古郡B遺跡—野尻 侃

助川遺跡—佐藤正俊

上台遺跡—佐藤庄一・名和達朗

編集：名和達朗・佐藤鎮雄・渋谷孝雄

なお、的場遺跡の実測図作成にあたっては、執筆者に加えて手塚 孝・佐藤正俊・佐藤鎮雄（土器）・阿部明彦（石器）が分担した。さらに奏 昭繁（置賜考古学会会員）・中嶋 寛（東南村山福祉事務所主事）・今泉信男・山口博之・矢口広道・荒井格・青木敏雄・会田容弘・東海林恵史・京谷彰子・信田由美子・沼沢美代子（山形大学生）の諸君の協力を得た。

# 目 次

## 的 場 遺 跡

I 調査の経過	
調査に至る経過	1
調査の経過	2
II 遺跡の概観	
遺跡の立地	5
遺跡の層序	7
遺構の分布	8
遺物の分布	10
遺物の分類	11
III 遺構と遺物	
1号住居跡	18
3号住居跡	28
4号住居跡	53
土壤剖	58
包含層出土遺物	70
IV ま と め	
出土遺物	90
遺 構	95

## 村 中 遺 跡

I 調査の経過	121
II 遺跡の概観	125
III 遺構と遺物	125
IV ま と め	127

## 古 郡 B 遺 跡

I 調査の経過	131
II 遺跡の概観	132
III 遺 構	133
IV ま と め	134

## 助 川 遺 跡

I 調査の経過	139
II 遺跡の概観	140
III 遺構と遺物	142
IV ま と め	142

## 上 台 遺 跡

I 調査の経過	145
II 遺跡の概観	147
III 遺構と遺物	149
IV ま と め	154

# 挿 図 目 次

第1図	的場遺跡 全体図	4
第2図	位置図	7
第3図	土層図	9
第4図	遺構配置図	19
第5図	1号住居跡	20
第6図	1号住居跡付近遺物分布図	20
第7図	1号住居跡出土土器・木製品	22

第8図	1号住居跡出土土器（1）	23
第9図	1号住居跡出土土器（2）	24
第10図	1・4号住居跡出土石器	26
第11図	1号住居跡・土壤群出土石製品	27
第12図	3号住居跡	29
第13図	3号住居跡内遺物分布図	33
第14図	3号住居跡埋設土器（1）	35
第15図	3号住居跡埋設土器（2）	37
第16図	3号住居跡出土土器	39
第17図	3号住居跡出土土器・土製品	41
第18図	3号住居跡出土土器（1）	43
第19図	3号住居跡出土土器（2）	44
第20図	3号住居跡出土土器（3）	45
第21図	3号住居跡出土土器（4）	46
第22図	3号住居跡出土土器（5）	47
第23図	3号住居跡出土土器（6）	48
第24図	3号住居跡出土石器（1）	49
第25図	3号住居跡出土石器（2）	50
第26図	3号住居跡出土石器（3）	51
第27図	3号住居跡出土石製品	52
第28図	4号住居跡	54
第29図	4号住居跡出土土器	56
第30図	4号住居跡・土壤出土遺物	57
第31図	5・6・8・10～13土壤	59
第32図	土壤出土土器（1）	61
第33図	6号土壤出土土器	63
第34図	土壤出土土器（2）	65
第35図	土壤出土土器（3）	67
第36図	土壤出土土器・土製品	69
第37図	包含層出土土器（1）	71
第38図	包含層出土土器（2）	73
第39図	包含層出土土器（3）	75

第40図	包含層出土土器（4）	77
第41図	包含層出土土器（5）	79
第42図	包含層出土土器（6）	81
第43図	包含層出土土製品・石製品	83
第44図	包含層出土土器（1）	84
第45図	包含層出土土器（2）	85
第46図	包含層出土土器（3）	86
第47図	各区出土磨製石器石斧	87
第48図	各区出土石器（1）	88
第49図	各区出土石器（2）	89
第50図	位置図（村中・古都B・助川遺跡）	120
第51図	村中遺跡 全体図	122
第52図	Fライン土層図	123
第53図	グリッド配置図	124
第54図	H-9～I-12区構造図	126
第55図	古都B遺跡 墳丘図	134
第56図	土層図	135
第57図	助川遺跡 全体図	138
第58図	土層図	141
第59図	位置図（上台遺跡）	144
第60図	上台遺跡 全体図	146
第61図	土層図	147
第62図	遺構配置図	148
第63図	2号住居跡	150
第64図	遺跡出土土器	152
第65図	遺跡出土土器・石器	154
付表1	の場遺跡調査行程表	3
付表2	寒河江川流域の縄文時代遺跡	6
付表3	石器分類概念表	17
付表4	遺構内出土土器分類表	68
付表5	の場遺跡の土器群別と土器型式編年対比表	98

付表6	住居跡集成表	99
付表7	出土土器遺構・層分類表	100
付表8	出土土製品・石製品・磨製石器計測表(1)	101
付表9	出土土製品・石製品・磨製石器計測表(2)	102
付表10	出土土製品・石製品・磨製石器計測表(3)	103
付表11	出土石器一覧表(1)	104
付表12	出土石器一覧表(2)	105
付表13	出土石器計測表(1)	106
付表14	出土石器計測表(2)	107
付表15	出土石器計測表(3)	108
付表16	出土石器計測表(4)	109
付表17	出土石器計測表(5)	110
付表18	出土石器計測表(6)	111
付表19	出土石器計測表(7)	112
付表20	出土石器計測表(8)	113
付表21	出土石器計測表(9)	114
付表22	出土石器計測表(10)	115
付表23	出土石器計測表(11)	116

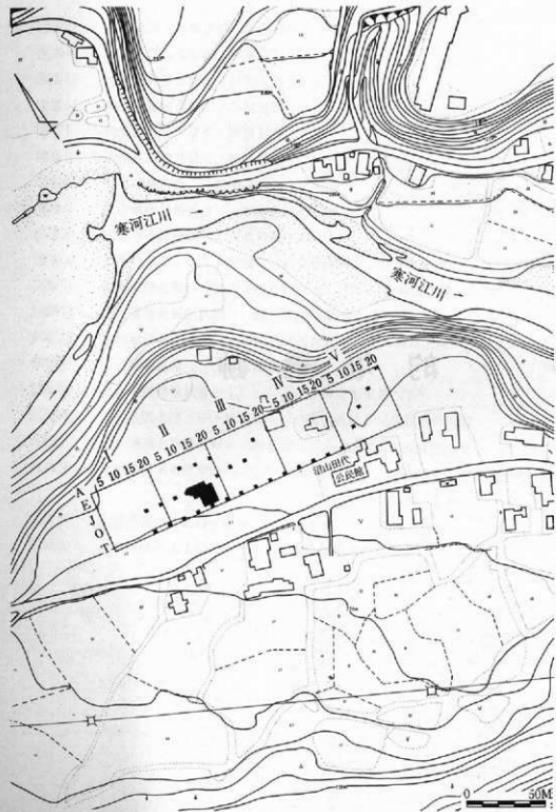
## 図版目次

- 図版1 的場遺跡II区近景　　的場遺跡III～V区近景  
 図版2 的場遺跡3号住居跡発掘風景　　的場遺跡遺構全景  
 図版3 的場遺跡1号住居跡全景　　的場遺跡1号住居跡壁・周溝  
 図版4 的場遺跡1号住居跡土器出土状況　　的場遺跡1号住居跡石器出土状況  
 図版5 的場遺跡土偶・印紋土器　　的場遺跡1号住居跡・6号土壤出土土器  
 図版6 的場遺跡1号住居跡覆土1層・周溝・ピット出土土器  
 図版7 的場遺跡1号住居跡出土打製石器  
 図版8 的場遺跡1号住居跡出土石製品

- 図版9 的場遺跡3号住居跡全景(1)　　的場遺跡3号住居跡全景(2)  
 図版10 的場遺跡土層(1)　　的場遺跡3号住居跡土層(2)  
 図版11 的場遺跡3号住居跡内1号炉跡　　的場遺跡3号住居跡内2号炉跡  
 図版12 的場遺跡3号住居跡裡設土器出土状況　　的場遺跡3号住居跡2号埋設土器  
 図版13 的場遺跡3号住居跡1・2号埋設土器  
 図版14 的場遺跡3号住居跡土器出土状況　　的場遺跡3号住居跡石冠出土状況  
 図版15 的場遺跡3号住居跡出土土器  
 図版16 的場遺跡3号住居跡覆土1層出土土器(1)  
 図版17 的場遺跡3号住居跡覆土1層出土土器(2)  
 図版18 的場遺跡3号住居跡覆土2・3・4層出土土器  
 図版19 的場遺跡3号住居跡周溝出土土器  
 図版20 的場遺跡3号住居跡覆土4層・床面・1号炉跡出土土器  
 図版21 的場遺跡3号住居跡E P 1～3・5・7～10出土土器  
 図版22 的場遺跡3号住居跡出土遺物  
 図版23 的場遺跡3号住居跡出土打製石器(1)  
 図版24 的場遺跡3号住居跡出土打製石器(2)  
 図版25 的場遺跡3号住居跡出土磨製石器(1)  
 図版26 的場遺跡3号住居跡出土磨製石器(2)  
 図版27 的場遺跡4号住居跡全景　　的場遺跡岩版出土状況  
 図版28 的場遺跡4号住居跡覆土2層・包含層I層出土土器  
 図版29 的場遺跡4号住居跡出土打製石器  
 図版30 的場遺跡4号住居跡・包含層出土土製品・石製品  
 図版31 的場遺跡4号土壇近景　　的場遺跡8号土壇遺物出土状況  
 図版32 的場遺跡8号土壇土偶出土状況　　的場遺跡11号土壇全景  
 図版33 的場遺跡1・2号・3・4号・5号土壇出土土器  
 図版34 的場遺跡6号・8号土壤出土土器  
 図版35 的場遺跡10号・11号・12・14号・13号土壤出土土器  
 図版36 的場遺跡土壇群出土打製石器  
 図版37 的場遺跡6号・8号土壤出土遺物  
 図版38 的場遺跡包含層II層出土土器(1)  
 図版39 的場遺跡包含層II層出土土器(2)  
 図版40 的場遺跡包含層II層・同III層出土土器(1)

## 的場遺跡

- 図版41 的場遺跡包含層Ⅱ層・同Ⅲ層出土土器（2）  
図版42 的場遺跡包含層出土打製石器（1）  
図版43 的場遺跡包含層出土打製石器（2）  
図版44 的場遺跡包含層出土打製石器（3）  
図版45 的場遺跡包含層出土磨製石器（1）  
図版46 的場遺跡包含層出土磨製石器（2）  
図版47 村中遺跡遠景 村中遺跡調査状況  
図版48 村中遺跡発掘風景 村中遺跡Pt群  
図版49 古郡B遺跡遠景 古郡B遺跡近景  
図版50 古郡B遺跡トレーナー配置 古郡B遺跡3トレーナー土層  
図版51 助川遺跡近景 助川遺跡B地点50・110G付近発掘全景  
図版52 助川遺跡発掘区状況 助川遺跡発掘区状況  
図版53 助川遺跡B地点50-120G発掘区付近 助川遺跡土層セクション  
図版54 上台遺跡遠景 上台遺跡調査状況  
図版55 上台遺跡発掘風景（1） 上台遺跡発掘風景（2）  
図版56 上台遺跡土層（10-40北壁） 上台遺跡6号溝状遺構土層  
図版57 上台遺跡1号落ち込み遺跡全景 上台遺跡2号住居跡全景  
図版58 上台遺跡2号住居跡内土器出土状況（1） 上台遺跡2号住居跡内土器出土  
状況（2）  
図版59 上台遺跡出土土器・石器  
図版60 上台遺跡出土土器（1） 上台遺跡出土土器（2）



第1図 的場遺跡 全体図

## I 調査の経緯

### 調査に至る経過

的場遺跡は、山形県西村山郡西川町大字沼山字田代に所在する。寒河江川中流右岸の河岸段丘上に位置し、地目は水田・畑・宅地などになっている。この地域から縄文時代の土器や石器が出土することは、地元の人々によって古くから知られていたようであるが、正式に埋蔵文化財包蔵地として確認されたのは昭和37年のことになる。

昭和37年11月12日、山形県遺跡地名表作成の一環として、犬飼安太郎・相田俊雄の両氏が当地域を分布調査し、本遺跡を「松原遺跡」として認定している。このときの報告にもとづく遺跡台帳には、田代地区荒木昭二氏が耕作等により発見した縄文式土器を収録しており、縄文時代中期の集落跡と記している（註1）。

昭和49年秋、西川町田代地区が農業構造改善事業の施行が計られ、県農林部から教育委員会に照会があり、協議の結果昭和50年度に緊急発掘調査を実施することになった。昭和50年4月18日、教育庁文化課佐藤鎮雄技師が現地確認を行い、試掘調査の結果、多量の縄文時代後・晩期の遺物を採集した。これにより本遺跡は縄文時代後・晩期の集落跡も存在することが予測されたわけである。なお本遺跡の名称については、地元の人々に再度問い合わせたところ、俗称として矢印などの弓を射る場所「まとば」と呼ばれていることがわかり、「的場遺跡」として変更登録することとした。「松原」という名称は、「まとば」を「まつば」、「まつばら」として誤訛したため出てきたとみられる。

発掘調査は、山形県教育委員会が主体となり、西川町教育委員会の協力を得て、昭和50年8月6日から同9月11までの述べ28日間にわたって実施した。調査員には県教育庁文化課の佐藤庄一・野尻 優が当たり、このほか荒木利見氏（当時西川町立大井沢小学校教諭）小向裕明氏（当時山形大学農学部学生）等に多大な応援を得た。また調査期間が夏休み中であったために作業員として県立寒河江高校西川分校をはじめ地元の高校生・大学の方々24名に協力を得た。

なお発掘調査終了後、西川町教育委員会および地元の方々の御努力によって、発掘した住居跡はペントナイト・砂を埋め戻しの上保存、未発掘区についても地表下10~20cmの削平だけ大部分が保存されることになった。関係名位の温かい御配慮に対してお礼を申し上げる。

（註1） 山形県教育委員会1963 「山形県遺跡地名表」

### 調査の経過（第1図・表1）

発掘調査は、対象区域を農業構造改善事業予定地内に限定し、東西に長く40×40mの大発掘区を5つ（I～V区）設定した（第1図）。事業予定期地区南側の水田は、やや湿地となっており、4月の確認調査の段階でもほとんど遺物が認められなかっただので、調査区域からは除外している。

大発掘区は、2×2m単位のグリッドによって南北・東西各々20等分され、計400の枠目をなす。グリッド番号は、大発掘区毎にX軸（東南）を西から1・2………19・20、Y軸（南北）を北からA・B………S・Tと名付けた。各グリッド名称はたとえばII-15Mグリッドのように呼ぶことにする。Y軸の方向はN-8°15'40"-Eである。

検出した遺構の名称は、発掘中は1号住居跡・1号土壙・1号炉のように呼んでいたが整理の段階で山形県文化課が現在一般に使用している遺構記号を用いることにした。これは本遺構をS・本遺構の各因子をEとした上で、遺構の性格を簡略化して付したもので、的場遺跡の主な遺跡記号は下記のようである。

S T（整穴式住居跡）・S K（土壙）・S X（性格不明）

E D（周溝）・E L（炉）・E P（ピット）・E U（埋設土器）・E Y（床面）

本遺構と遺構因子は組合せて、S T 3-E L 1（3号住居跡1号炉）のように呼称する。

遺物記号は、第1次をRとした上でつぎのように遺物の性格を簡略化して付している。

R N（自然遺物）・R P（土製品）・R Q（石製品）・R W（木製品）である。

調査の経過を、行程図（表1）を参照しながら述べる。調査は最初発掘区南端T列に添って2×2mのグリッドを10mおきに坪振りし、遺跡の範囲確認を試みた。V区については圃場整備区域に合せて斜め方向に発掘している。またI～III区についてM・LないしK列も10mおきに1グリッド坪振りしている。範囲確認の坪振りは8月7日から13日までに27グリッド行なった。その結果、II区に遺物が集中して認められたので、以後はII区を中心調査を実施した。II区の拡張および包含層の振り下げ作業は、お盆あけから8月25日まで行ない、ベルト・コンベアーも使用しながら約180m<sup>2</sup>を実施した。最終発掘面積は、約350m<sup>2</sup>である。

遺構の中でもっとも早く発見されたのは、坪振りの際II-15Lで検出された落ち込み遺構（S X 2）で、初めは住居跡の可能性も考えたが、その後も乏しく性格不明のものである。8月18日頃からS T 1・3のプランが見えはじめる。折からの猛暑で昼過ぎは一時現場作業を休止して屋内で遺物の洗浄を行なう。II区では縄文時代後期中葉から晩期終までの土器が出土するが、とくに大洞A式併行期の文様が多いようである。

S T 1は南側の輪郭を検出したが、北側が遊園地の堀にかかるため拡張を断念する。

S T 3は初め北西隅の輪郭を検出し、それを追ってグリッドを拡張した。遺構検出面から深いこと、住居跡の大きさが10m前後と大規模なためS T 3の全体プランを検出できたのは8月28日になる。S T 3はプラン確認と平行して、中央に十字の断面観察用ベルトを残しながら、順次覆土を振り下げている。この段階でS T 3の北西部にもう一つ住居跡（S T 4）が検出された。またS T 1南側の土壙群も、プランの確認と一部精査を行なっている。

8月30日に現地説明会を実施し、地元の方々や関係者など約200名の参加を得た。9月に入ってからは、各遺構の床面やピットの精査および図面作成を行なった。図面作成は当初予定の9月6日までに終らず、10・11日の2日間延長している。写真撮影は随時必要に応じて行なっているが、9月5・6日には遺構の最終撮影を実施した。

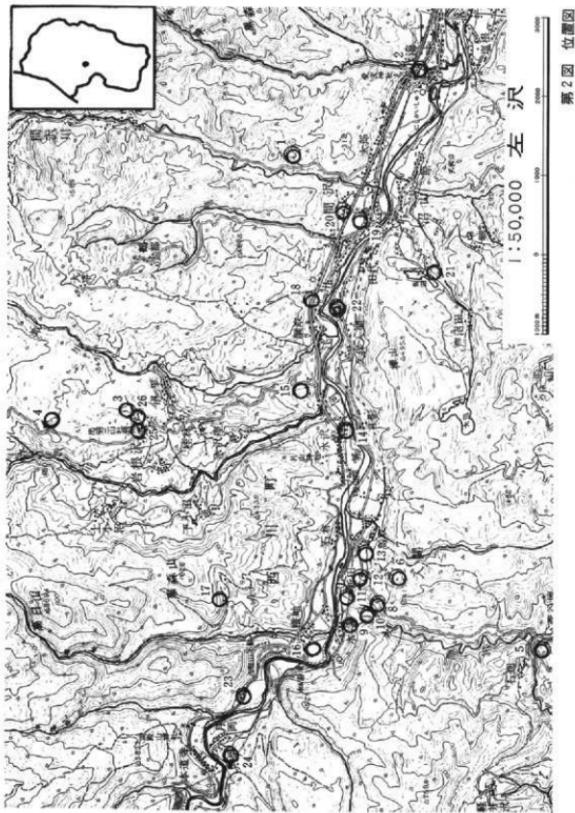
なお発掘終了の9月18日、西川町建設課の重機を借りて、ペントナイト・砂を敷いたのち埋戻しを行なった。

この間発掘作業に従事した作業員は、高校生と大学生を主体として1日平均10名、述べ約280名である。災天下のきなかの力強い御助力に心から感謝を申し上げたい。

的場遺跡調査行程表

表 1

調査内容	8月								9月																						
	6	7	8	9	11	12	13	17	18	19	20	21	22	23	25	26	27	28	29	30	1	2	3	4	5	6	10	11	12		
グリッド・造り方設定	→	→	→	→																	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑		
坪振り	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑		
包含層振り下げ	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→	→		
S T 1精査																															
S T 3精査																															
S T 4精査																															
土壙群精査																															
断面図・平面図測図																						→	→	→	→	→	→	→	→	→	
写真撮影	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	↑	
備考	器材搬入	現地説明会																													
貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	貰金支払い	
資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出	資材搬出



- 4 -

## II 遺跡の概観

### 遺跡の立地（第2図・図版1）

山形県のほぼ中央に南北に連なる朝日山地がある。標高1,979mの月山は朝日山地の北端にあり、カルデラ火山特有の景観をなしている。月山火山の噴火によって朝日山地の1,000m以上の縦線はさらに北に延びて出羽丘陵と接し、庄内と村山という山形県の二大地域を作り出した。月山火山のまわり特に内陸側は日本でも有数の豪雪地帯で、春4月でも山麓の民家は雪に埋もれているほどである。

朝日山地の東北斜面の各峰々に源を発する寒河江川は、山地に添って北流し、月山沢付近で湯殿山方面から流れ出る大越川と合流し、流れを東方に変える。中流域では西川町の本導寺、間沢、睦合等と谷合を蛇行し、寒河江市白岩付近で下流域に至る。下流域では河北町・寒河江市一帯に広い扇状地をなし、河北町溝延付近で最上川と合流する。寒河江川中流域の両岸には、狭い河岸段丘や、支川との合流点に出来た小扇状地が点在し、繩文時代中期以降現在に至る集落が形成されている。

的場遺跡は、この寒河江川中流右岸に位置し、張り出した小河岸段丘の上位面に立地する。標高218m前後で、河床との比高は約20mを測る。西川町間沢部落の西方1.2kmにあり、沼山田代公会堂の北裏一帯に広がる。田代部落のほぼ中央を東西に通る県道小山・沼山線の北側は、東西350m、南北120mのゆるやかな舌状平坦地となっており、遺跡はその中央北寄りに位置する。地目は現在畠地・水田・宅地などで、とくに畠地に遺物が多く散布する。所在地は山形県西川町大字沼山字田代、所有者は荒木昭二氏他数名である。

つぎに的場遺跡付近の歴史的環境について触れる。月山をとりまく山岳地域のうち月山と湯殿山、羽黒山が組み合わされて、古来出羽三山と称されてきている。西川町の寒河江川中流域は、出羽三山信仰の登拝者の道筋や宿坊として振わったところである。もちろん三山信仰以前にも、この地に原始・古代の人々が生活していたことは当然である。寒河江川流域には、上流は標高600m前後の弓張平遺跡群から、下流は標高90mの不動木遺跡まで46ヶ所の遺跡が分布する。時期的にも旧石器時代末葉から奈良・平安時代まで各期にわたる。ここでは的場遺跡と関連をもつ繩文時代の遺跡について少し詳しく述べる。寒河江川流域で現在確認されている繩文時代の遺跡は全部で32ヶ所である（第2図）。このうち表面採集品などによって遺跡の時期がある程度知り得る遺跡は18ヶ所で、内訳は繩文時代前期1、中期13、後期3、晚期3となる（表2）。立地的には寒河江川に支流が合流する河口付近が多い。ただし、後・晚期の遺跡は、月岡遺跡や的場遺跡など見はらしの良い舌状の段丘上に立地する傾向がうかがえる。

寒河江川流域の縄文時代遺跡

表 2

番号	遺跡名	所在地	地目	立地	種別	時期	文献
1	柴倉	西川町潮味柴倉	畠	山麓台地	集落跡	縄文	
2	東浦	・海味東浦311	畠	段丘	・	縄文中期	
3	龍神沼	岩根沢上の平	畠	台地	・	縄文	出羽三山・葉山1975
4	スゴウ	・スゴウ	畠	・	・	・	
5	落合	入間落合734	畠	段丘	・	縄文中期	寒河江工業高校1968
6	新田A	・新田	畠	・	・	縄文	
7	新田B	・	畠	・	・	・	
8	お仲間林	・	畠	・	・	縄文中期	
9	上野A	・上野	畠	・	・	縄文	
10	上野B	・	畠	・	・	・	
11	松の木平	・松の木平	畠	・	・	・	宇野修平1971
12	兵助新田	・兵助新田	水田	・	・	・	
13	大平	・大平原野	畠	・	・	・	
14	水沢	水沢下	畠・宅地	・	・	縄文中期	寒河江工業高校1968
15	山居	・山居	畠	台地	・	・	出羽三山・葉山1975
16	横崎	・	縦立	畠	段丘	・	・
17	黒森山	・黒森1559	荒地	山腹	・	・	
18	サッテロ	間沢サッテロ	畠・宅地	段丘	・	・	
19	金畠	・金畠248	・	・	・	縄文	
20	イカヅキ	・東326	宅地	・	・	縄文後・晩期	出羽三山・葉山1975
21	長沼	沼山立目	畠	山麓	・	縄文	
22	的場	・田代	畠・宅地	段丘	・	縄文中～晩期	
23	清水小屋	本道寺清水小屋	畠	・	・	縄文後期	
24	月岡	月岡西の平	畠・宅地	・	・	縄文晩期	
25	宝田	岩根沢上の平	・	台地	・	縄文中期	
26	薬師森	・	・	・	・	縄文	出羽三山・葉山1975
27	石田	聯合吹上	畠	段丘	・	縄文	
28	熊野	・熊野	宅地・水田	・	・	縄文中期	寒河江工業高校1968
29	弓張平B	志津弓張平	畠・宅地	山腹	・	縄文前期	山形県教委1977
30	弓張平I	・	畠・林	・	・	縄文	・
31	谷沢	寒河江市谷沢谷谷沢	畠・水田	段丘	・	縄文中期	
32	日和田	・日和田	47	学校敷地	平地	・	

遺跡の層序 (第3図)

本遺跡は寒河江川中流石岸、やや張り出した河岸段丘上に立地する。遺跡はこの段丘上の南北のゆるやかな舌状平坦部にあり、調査区は事業予定地内に、東西に長く設置したため、層序は台地中央部よりやや端部によって観察した。ただし、Ⅱ区においてはすぐに遺構と合うため、遺構の掘り込み面までの層序と、遺構の覆土を遺跡全体の基準にしている。層序は基本的に4つの地層に分けられる。

I層 純土 小砂利が多くふくみ、ボソボソしている粒子の細い黒色土である。

厚さ18~32cmである。

II層 褐色土層 举起の石が混り、若干の炭化粒子・黄色粒子を含み、やわらかい。厚さ15~28cmで、耕作により擾乱遺物を含む。

III層 黑褐色土層 炭化粒子を多く含み、やや粘着性がある。細礫を含む。厚さ11~15cmである。遺構の掘り込みが初まる。

IV層 黄褐色土層 砂質性で小砾や河原石を含み、遺物は含んでいない。

遺構内の覆土は

①褐色土で炭化粒子を多く含み粘着性がある。

②炭化・赤色粒子を多く含み、粘着性があり、小礫を含む。

③暗褐色を呈し、赤色粒子を多く含み粘着性が強い。ところどころに黄色ブロックが混じる。

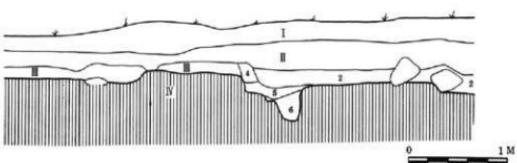
④黄色ブロックが多く含み、Ⅲ層との漸移層である。

⑤IV層と②層がまじり合った様な層で、炭化物が多い。

⑥炭化物・赤色粒子を多く含み、ネバネバしている。

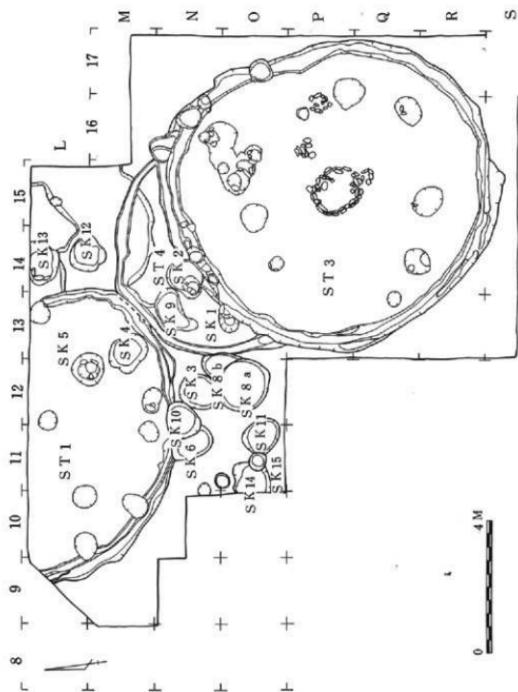
II-15-M

II-15-N



第3図 土層図

第4図 遺構記載図



#### 遺構の分布（第4図・図版2）

調査は農業構造改善事業予定地内に20m×20mの発掘区を東西に5区（I～V区）設定し、各区内に10m毎に遺構・遺物の分布を調査するため4～6ヶ所の2m四方のグリットを振り（第1図）、土層の観察、包含層の有無等を調査した。その結果I区東側からIII区西側にかけて遺物の散布が認められ、とくにII区東南部では遺物が集中しており、遺構の掘込みも一部確認が出来た。このため調査はII区を集中して行なった。調査グリット名で9～17-L～Sの51グリット（186m<sup>2</sup>）である。

この地区で検出した遺構は、ST 1・3・4の3棟の竪穴住居跡とSK 1～15の計15基の土壙、それにST 3内に設けられた埋設土器3個体などである。各遺構はかなりの重複関係が認められる。

遺構は地表面下40～50cmの深さのⅢ層（黒褐色土）上面で掘り込みが確認され、Ⅳ層を深く掘り込んでいるため、比較的検出が容易であった。

精査地区における遺構の分布状態は、調査区の北西部に1号住居跡、南東部に3号住居跡、その中间に4号住居跡という配置を示す。発掘調査段階の重複関係から4号住居跡は1・3号住居跡によって切られていることが確認された。1号住居跡は北半分が避面地になつているため末調査に終つたが、検出長径8.5mを測る楕円形のものである。明確な炉は検出できなかつたが、床面東側に一部焼土がみられた。3号住居跡は直徑9.4～10.2mのはば円形の大型のもので、住居内に石組が2基と埋設土器3基を有する。4号住居跡は、3号住居跡によって切れているため、北西部しか残っていないが、3号住居跡に一部残っている周溝の痕跡も考慮すると、直徑約6.9mの円形のプランを示すものと推定される。炉は検出できなかつた。住居跡の時期は3棟とも縄文時代晩期後半頃である。

土壙は調査区北西部、1号住居跡の南東部にSK 1～16まで16基集中して検出された。なお調査の過程でSK 7としたものがSK 6に含まれることになったため欠番となり、逆にSK 8が2つの重複を持つことが判明したため、SK 8 a・8 bの2つに細分した。土壙は長径1m前後で円形ないし楕円形のプランを示し、底面が平坦なものが多い。時代は縄文時代後期中葉から晩期末葉まで多様である。

精査区以外の遺構の分布は、ほとんどが坪堀か段階で終つたため明らかでない。II-10T・V-150で1m前後の長い溝、V-20Aで直徑70cm前後の落ち込みが検出されている。いずれも内部に金属工具によって加工された木質遺物や、ガラス製品を出土しており、時期的にかなり後世のものと推定される。

## 遺物の分布

最初に坪掘りグリッドの所見を主にして遺跡全体における遺物の分布について述べる。調査は農業構造改善事業予定地区のうち、遺物散布のまったく見られない西側と低湿地の南側を除く約1600m<sup>2</sup>を対象とした。20m四方の東西に長い5区（I～V区）の大発掘の中で、I区は2m四方の坪掘りグリッドを3つ設定している。いずれも耕土中から土器片が1・2点出土しただけで、地山までの土層からは遺物はまったく発見できなかった。II区の坪掘り区11個のうち5T区からは耕土中から土器が18片出土したが、下層からは発見されていない。したがって遺物包含層がこれより西側に延びないものと推定される。なおこの他のII区の坪掘り区からはII・III層も含めいずれも50片以上の土器が出土している。III区の坪掘り区7個のうち5K区からII層中より土器が292片出土したが、その他の区は4～16片程度である。IV区の坪掘り区4個はI・II層合わせて土器が11～28片出土している。V区の坪掘り区6個のうち5O区はII・III層中から土器が72片出土したが、その他の区はまったく認められないか数片程度である。なおV-10J・20A区の遺物には縄文時代中期中葉の土器が數片混っている。

これらのことから工事予定地区における遺物の純粋な包含層は、II区を中心とし一部Ⅲ区北側に広がる長径約40mの舌状地をなすものと推定される。Ⅲ～V区は低地に一部流入したものと考えられる。また本遺跡の北東約100mの畠地には表面に縄文時代中期の土器片が散布することから、同時代の別の遺跡の存在が予測される。

つぎにII区9～17L～S区の精査地区における遺物の分布について述べる。各グリッドの層位毎の遺物の分布を見ると、I層の耕作土中では精査地区的南半に遺物が多く認められた。これは耕作による低地への土の移動のためと考えられる。包含層II層中では精査地区的北西部に遺物が集中して認められた。これは地山が浅い1号住居跡や土塙群の上面が一部遺構覆土に入り始めたためと考えられる。包含層III層中では4号住居跡および3号住居跡の北西部に遺物が集中して認められた。これはこの地区が一部遺構覆土中に入り始めたことを示している。包含層IV層中では3号住居跡西側に遺物が集中して認められた。これをこの地区が水平レベルでは最後の段階で一部遺構覆土中に入り始めたことを示している。

精査地区はほとんどのグリッドが遺構にかかったため、包含層II～III層の一部は遺構の覆土になる。各遺構の覆土の内容については次章で説明する。包含層の内容についても次章で説明するが、精査地域が遺構の密集地に当たったため、各遺構の覆土が複雑に重複していくことと地形面の変化から、必ずしも遺物包含層における分層的な調査結果は導きえていない。

## 遺物の分類

本調査によって検出された遺物の総数は破片数にして約30,000点である。Ⅲ章で遺構と遺物について述べるに先立ち、遺物の分類基準について触れる。

遺物は土器、石器、土製品、石製品の4つに大別する。土器、石器も広義には各々土製品や石製品の内に含まれるが、ここでは土器・石器の概念を狹義の器（うわ）ものないし利器として把握し、それ以外のものは土製品および石製品として扱うこととする。

### 土器の分類

土器については、整理段階でできるだけ層位的序列を重視する分析を試みたが、発掘区域が遺構の密集する地点を主とすることになったため、垂直方向の重複が著しく明確な区分は導き得なかった。ここでは主たる文様および文様の施文手法を中心にして12の土器群に大別し、さらに各土器群を施文手法や器形等によって以下のように小類に細分する。

#### I群土器

花弁状の大きな波状口縁をもち、内側に肥厚した口縁部の外側に連続して刻みを加える土器を主とする土器群。本群土器は文様や器形によってさらに3類に細分される。

a類 L<sub>1</sub>～L<sub>8</sub>の細い縄文原体を横位・縦位に回転させて羽状としたものを地文とし、これに太い沈線によって区画された磨消繩文を頭部文様および体部文様常に有するもの。器形は口縁部が外反し、頸部でしまる深鉢ないし臺形土器である。

b類 刻目による直線的な文様帶を口縁部ないし頸部にもち、これに無文帶ないしは、L<sub>1</sub>～L<sub>8</sub>の磨消繩文帯が組み合わさるもの。器形は深鉢や鉢形土器などがある。

c類 沈線による格子目文ないし綾杉文を、頭部や体部上半に有するもの。器形は深鉢形土器がある。

#### II群土器

波状口縁に突起をもち、初源的な入組文ないし弧線連結文を主とする土器群。貼瘤は多用されず、口縁の突起部やモチーフの起・終点に限られる。本群土器は3類に細分される。

a類 太い沈線によって区切られた初源的な入組磨消繩文ないし弧線連結磨消繩文を口縁部ないし体部上半に有するもの。器形は臺形ないし注口土器がある。

b類 2条の平行沈線による初源的な入組文ないし弧線連結文を口頭部ないし体部に有するもの。器形は注口土器、鉢形土器がある。

c類 曲線的な細い刷手目を口頭部から体部全体に有するもの。器形は平縁で口縁部が直立する深鉢形土器がある。

#### 第四群土器

磨消手法による弧線連結文および入組文を主とし、貼瘤を伴なう土器群。刻目や三又状跡刻を有する入組文はまだみられない。本群土器はさらに2類に細分される。

a類 太い沈線によって区切られた入組磨消繩文ないし弧底削消繩文を口頭部ないし体部下半に有するもの。

b類 太い沈線によって区切られた直線的な磨消繩文を口頭部に有するもの。器形は深鉢ないし壺形土器がある。2個1対の貼瘤がよくみられる。

#### 第五群土器

先端の細い鉢状工具による刻目手法を特徴とする入組文および弧線連結文を主とする土器群。貼瘤に縦や横の刻目を有するものもみられる。本群土器は2類に細分される。

a類 比較的間隔をおいた刺突による刻目手法をもつ入組文ないし弧線連結文を有するもの。器形は平縁ないし平縁に突起をもつ深鉢形土器がある。

b類 比較的間隔の狭い刺突による刻目手法をもつ入組を有する。

#### 第六群土器

磨消繩文ないし刻目手法による入組文のうち、三叉状跡刻をもつものを主とする土器群。本群土器はさらに3類に細分される。

a類 先端の角張る鉢状工具を器面に直角にあてて刻む刻目文を有するもの。

b類 磨消繩文による入組文に、三叉状跡刻と貼瘤を有するもの。

c類 磨消繩文による入組文に、眼鏡状の貼瘤突起を有するもの。

#### 第七群土器

定型的な三叉文を有するものを主とする土器群。本群土器は2類に細分される。

a類 磨消繩文による入組文と組み合わせり、いわゆる玉抱き三叉文を有するもの。

b類 磨消繩文を伴わざ沈線のみによる三叉文を有するもの。

#### 第八群土器

半齒状文を有するものを主とする土器群。本群土器はさらに2類に細分される。

a類 半齒状文を有するもの。器形には鉢形土器と注口土器がある。

b類 沈線によるK字状文等を有するもの。器形は楕円形土器と注口土器がある。

#### 第九群土器

第九群土器のK字状文が縦横にのびる複雑な磨消繩文を主とする土器群。これに口頭部に浮彫的な刻目を有する鉢・浅鉢形土器が伴なう。本群土器はさらに2類に細分される。

a類 2~3条の平行沈線により区画された口頭部文様帶に浮彫的な刻目文を有するものの。器形は口頭部のやや内寄する皿と口頭部が強く外反する鉢形土器がある。

b類 a類の口頭部文様帶と体部のK字状文が縦横にのびる複雑な雲形文とが組み合わされるもの。器形は口縁に二連小突起を有する碗ないし壺形土器がある。

#### 第十群土器

第Ⅹ群 b類の雲形文がやや直線化したものを作とする土器群。これに口頭部に平行沈線および連続刻目文を有する鉢・壺形土器等が伴なう。本群土器は2類に細分される。

a類 3~5条の平行沈線文および平行沈線の一部に連続刻目文を加えているもの。器形は、口頭部が強く外反する鉢・深鉢・壺形土器等がある。

b類 a類の口頭部文様帶に直線化した雲形文をもつ体部が組み合わさるもの。器形は皿・浅鉢・鉢・壺形土器等がある。

#### 第十一群土器

磨消繩文を有するI字文を主とする土器群。これに口縁部が研磨され頭部に平行沈線ないし眼鏡状の凸帯をもつ浅鉢・鉢・壺形土器が伴なう。本群土器は3類に細分される。

a類 磨消繩文を有するI字文を体部に施するもの。器形は鉢・壺形土器等がある。

b類 頭部に眼鏡状の凸帯を有するもの。体部には繩文が施される。器形は甕・壺形土器等がある。

c類 口縁部が研磨され頭部に平行沈線ないし斜繩文を有するもの。器形は鉢・深鉢・甕・壺形土器等がある。

#### 第十二群土器

浮彫手芸による直線的なI字文を主とする土器群。本群土器はさらに3類に細分される。

a類 浮彫による直線的なI字文を体部上半ないし体部全体に有するもの。器形は浅鉢・台浅鉢・鉢・壺形土器等がある。

b類 浮彫による直線的なI字文ないし平行沈線文を口頭部に限定して施すもの。体部には繩文ないし研磨が施される。器形は鉢・大形浅鉢・甕・壺形土器等がある。

c類 口縁部が研磨され体部に結節回転繩文ないし斜繩文を有するもの。口唇部に上方からの押圧による小波状文を持つものもある。器形は口縁部が外反する深鉢ないし壺形土器・壺形土器がある。

#### 第十三群土器

口頭部文様帶と体部文様帶が合体した変形I字文を主とする土器群。3類に細分される。

a類 変形I字文の起・終点部分に2個の折りによる瘤を有するもの。器形は浅鉢・高平鉢・鉢・壺形土器等がある。高环形土器にはしばしば大きな波状突起が伴なう。

b類 瘤をしたないやや扁平な変形I字文を有するもの。器形は浅鉢形土器がある。

c類 口唇部に上方からの押圧による繩文を有するもの、器形は壺形土器が主である。

## 打製石器の分類

墳墓などの特殊な例を除き、石器時代の遺跡には完成された石器の他、石器製作の結果を示す多数の剥片・碎片・石核・未成品・失敗品が残されている。本遺跡も例外ではなくこれらの中は慣例的な器種名をもつて完成された石器の数をはるかに上まわる。このなかでも完成品と未完成品・失敗品を区別することは特に困難であることから、本遺跡ではまず剥片・碎片・石核を選別し、残った二次加工のある石器・加工痕ある剥片・使用痕ある剥片の観察、分類に重点を置いた。剥片・碎片については大きさによって分類したが、石核の分類は時間の都合上割愛せざるを得なかった。

本遺跡出土の二次加工ある石器・加工痕・使用痕ある剥片は、概ね10種に分けられる（付表3）。このなかには両面加工石器（Ⅵ）のように、現段階では、独立した器種として積極的に認定できないものもあるが、大部分は慣例的な器種名をもつものである。これらは形態的な特徴によって、各々が以下のように類別できる。

### I 石鎌

a類 茎が全長の $\frac{1}{2}$ 以上で大型。b類 茎が全長の $\frac{1}{2}$ 以下で大型。c類 全体の形が菱形に近く厚みがある。d類 全長が2.5cm以下で重さ1g以下小型。e類 茎部が不明瞭で細身。f類 茎部が不明瞭で幅が広い。g類 無茎。x類 未完成品或は失敗品。

### II 石錐

a類 断面菱形で棒状のもの。b類 有茎で石鎌と似るが全体的に厚味があり先端部磨耗が著しい。c類 断面菱形の刺突部が細く長く突き出しつまみをもつ。d類 小型の縱長剥片に周辺加工を施したもの。  
e類 つまみ部から三角形状に突出した刺突部をもつ。f類 刺突部とつまみ部の境が不明瞭で先端が断面三角形。x類 未完成品或は失敗品。

### III 石匙

a類 つまみに対して刃部を平行にもついわゆる縦形石匙。b類 つまみに対して刃部を直角にもついわゆる横形石匙。c類 つまみを中心に刃部が弧を描くもの。x類 未完成品或いは失敗品。

### IV 石筆

a類 先端部両面にfluting状の剥離が施され先端部側面觀は両刃状になる。b類 先端部片面に急角度のfluting状の剥離が施されエンドスクレーパーに類似する。c類 先端部にfluting状の剥離がなく粗い二次加工面が残るもの。d類 先端部両面とも一次剥離面で構成されるもの。e類 先端部の二次加工がほぼ直角に施され鋒をを感じさせるもの。x類 未完成品或いは失敗品。

## V 両面加工尖頭石器

二次加工が両面に及ぶもののなかで少なくとも一端が尖頭部を形成すると認められるもの的一群。両面全体が二次加工面で覆われるものはないわゆる石槍にくらべ粗い印象を受ける。Vbを除けばさらに加工が加えられたとしても従来知られている器種にはなり得ない。a類 加工が剥片周辺全体に及ぶもの。b類 加工が一端にしか認められないもの。x類 未完成品或は失敗品。

## VI 両面加工石器

この一群のなかには、加工が進めば石鎌など従来知られている器種になり得るものもあり、前述したように新器種として独立させるには現段階では無理があるかも知れない。しかしアスファルトが付着した例（第24図9）から完成品があることも確実であろう。a類 横長剥片を素材としバルブを剥取しているもの。b類 縱長剥片を素材としたバルブを両側縁から剥取しているもの。c類 ぶ厚い剥片の両面を粗く加工しているもの。

## VIISクレーパー

a類 いわゆるラウンドスクレーパー。b類 剥片の一部に急角度の二次加工を施したもの。c類 剥片の一側縁に角度の小さい二次加工を施したもの。d類 剥片の二側縁に角度の小さい二次加工を施したもの。e類 扱りのあるノッチドスクレーパー

## VII 打製石斧

本遺跡では1点のみ出土。

## IX 加工痕ある剥片

剥片の一部に二次加工を施したもので、加工の部位に背面性がなく連続しない。

## X 使用痕ある剥片

剥片の側縁に連続する刃こぼれが認められるもの。

## XI 剥片・碎片

剥片・碎片は目的的剥片になり得るか否かを日安に類別した。a類 約10×5cm以上。この類に入る石器として僅c類の一部がある。b類 約10~5×5~3cmで最大厚2cm以上。この石器に見合う石器はほとんどない。c類 約10~5×5~3cmで最大厚2cm以下。本遺跡の石器のうち石鎌・石錐を除くものの素材。d類 約5~3×3~2cmで厚さ1.5cm以上。これ大きさに見合う石器はほとんどない。e類 約5~3×3~2cmで厚さ1.5cm以下。石鎌・石錐等小型の石器の目的的剥片。f類 約3×2cm以下。Idの素材となるが大半は剥片といえる。

### 磨製石器の分類

今回の調査で得られた石製品の種類は非常に多い。広義的には、磨製石器も石製品として理解されるが、ここでは利器としての磨製石斧・凹石・磨石等につき、類形的に分類、把握しその概要を提示する。

#### XII 磨製石斧

磨製石斧は、完形品が少なくその全様を知り得るものは少ないが、基部や刃部の形態および断面形により次の4類に分類される。

- a類 基部・刃部が平坦で定角形をなすものを一括してa類とする。断面形状は面取りが鋭く隅の角張りが強く長楕円形を呈する。
- b類 基部・刃部が丸みをもちa類に比べて基部の隔がせまく鋭くなる。断面形状は隅が丸みをもち中央部で凸状にふくらむもので、面取りの顕著なもの(b:類)とややあいまいなもの(b:類)に細分できる。
- c類 基部は丸みをもつが、b類に比べて幅が広く、断面形状は面取りがなく長円形を呈するものである。
- d類 小形の磨製石斧で、基部・刃部が丸みをもち定角形を呈する。a～c類とは意図した使用目的が異なるものでd類として分類する。

#### XIII 磨石

磨石は、円形や楕円形を呈する自然礫で、礫中の平坦面と縁辺に磨面を持つものである。形状や磨面の位置等により5類に分類できる。

- a類 径6cm内外の礫を用い、形状は楕円形を呈する。磨面を礫の平坦面と縁辺にもつ。
- b類 径10cm内外の球形を呈し、磨面を球形の接地面1面にのみもつものである。
- c類 形状は、偏平な長楕円形隅丸状の方形を呈するもので、礫中の平坦面一面のみ磨面をもつものと、両平坦面二面に磨面をもつものがある。
- d類 形状は、円柱状を呈し断面は円形を呈する。磨面を両端部及び縁辺にもつものである。
- e類 e類は径10cm内外の楕円形を呈する礫を利用している。c類に比べて断面形状は凸状にふくらみ、磨面を縁辺にもつものである。縁辺に敲打痕をもつものも含まれる。

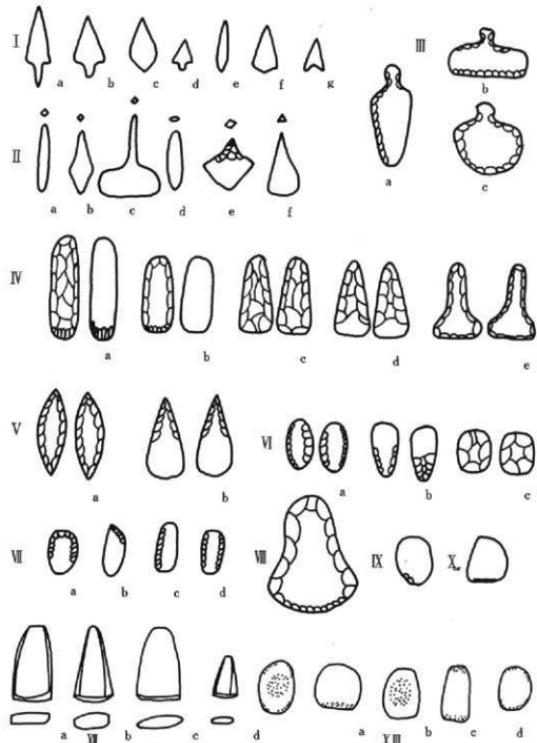
#### XIV 凹石

凹石は、楕円形・円形状の自然礫に、1個あるいは複数個の凹みを有するものである。

今回の調査では、出土数量が少なく個々については後述する。

石器分類概念表

表 - 3



### III 遺構と遺物

第1号住居跡 (ST 1) (第5~11図、図版3~8)

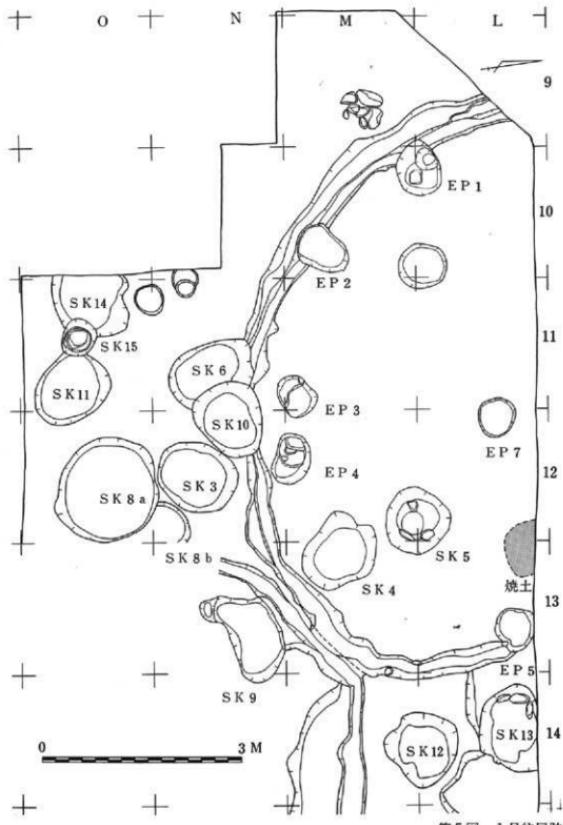
II区9~13-L~Nグリッドを第Ⅲ層黒褐色土層まで掘り下げたところ落ち込みがあらわれたので、黒褐色土層面でこの落ちこみの範囲を明らかにした。その結果この落ち込みは概約35cmの周溝をもつ住居跡であることを確認したが、北側は児童遊閑地になっているため調査が出来ず、南部の9~13-L~Nグリッドの計13グリッドを調査した。先の事情のため全体のプランは調査出来なかつたが、ほぼ椭円形を呈すると思われる。検出された東西最大径は8.5m、南北4.4mを測る。深さは耕作土上面から床面である第Ⅳ層黄褐色土層までは約72cmであるが、その上約15cmの黒褐色土層(第Ⅲ層)上面から掘り込まれる。

住居跡の壁は直重に近く、床面から溝底までは約18cmを測り、かなり深い周溝である。床面は中央に向かって少しづつ低くなり、壁直下よりの差は約10cmほどである。床面のうちでも壁より50~70cm以上内側の部分は壁付近に比べるとやや固く踏みしめられているが、余り固いものではない。壁、床面とも目立った凸凹は見られない。

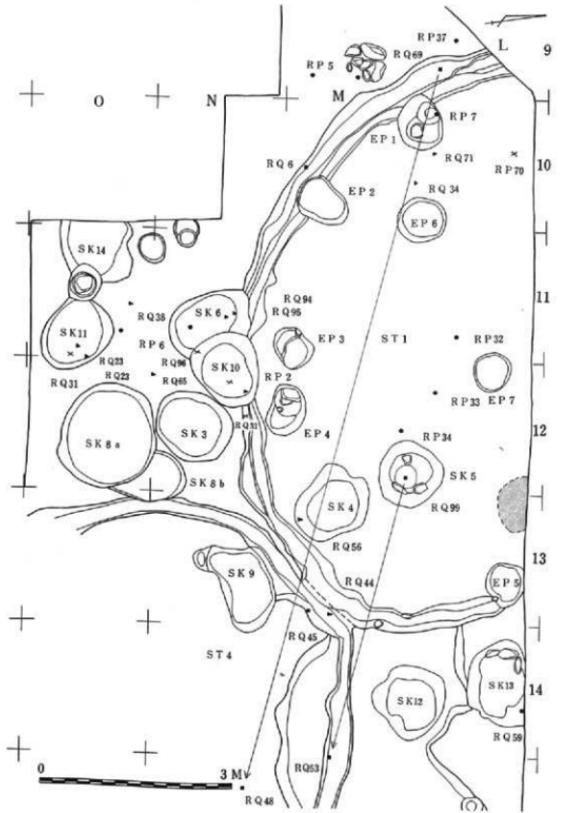
柱穴と思われるビットは全部で7個(P<sub>1.1</sub>~P<sub>1.7</sub>)あり、周溝際に5個、床面内部に2個あり、周溝際の西側3個(P<sub>1.1</sub>~P<sub>1.3</sub>)はほぼ120cm間隔でならぶが、ほかは規則性をもっていない。SK4・5は形状や出土遺物から本住居跡よりも古い時期のものと思われる。

それぞれのビットの直径は約60~80cm、深さは約25~35cmを測る。すべてのビットが直重な掘り方で、主柱穴の様相を示しており、補助的なビットは確認出来なかつた。またビット内からは若干の土器・石器片が出土している。12・13-Lグリッドにかけて床面に焼土を確認したが、掘り込みなどがなく炉とは断定出来ない。3号住居跡からは石組炉が検出されていることを考えあわせると、本住居跡の炉は北側の未掘区域に存在することも考えられる。

土層は表土Ⅰ層、堀大の石を含む褐色土Ⅱ層、細繊や炭化粒子を多く含む黒褐色Ⅲ層、炭化粒子を多く含む粘着性のある覆土①層、炭化粒子・赤色粒子を含み、粘着性の強い覆土②層、やや暗い暗褐色土覆土③層、黄色ブロックを多く含み、周溝間に堆積している覆土④層の順に堆積している。表土から床面までの深さは約50cm、遺構検出から床面までの深さは約20cmである。覆土の大半はやや暗い色調で、壁に近い部分ではⅤ層の黄褐色土層の漸移層と思われる黄褐色粒子やブロックがみられた。これらのうち遺物包含層はⅡ層からであり、Ⅲ層上面から住居跡の掘り込みが始まり覆土①~③層までは遺物が含まれている。



第5図 1号住居跡



第6図 I号住居跡付近遺物分布図

-20-

本住居跡内出土土器の総数は2031片である。内訳は、覆土1層 953片、同2層 256片、内3層93片、同溝内 156片、床面 138片、ピット内 435片である。

覆土1層からは第I～第VI群土器が各々少數づつ出土している(第8図1～23)。1は第I群土器b類(以下Ib類と略称)、5はVIa類、3はVIa類、2・4はIVb類、6～9はVIa類、10はVIb類、11・12はVIIa類、13・14はVIIb類、15はVIIa類、17はVIIa類、16・20はVIIb類、19はVIIb類、18はVIIc類、21はVIIb類、22・23はVIIb類である。本層は相当に混在しているとみられる。

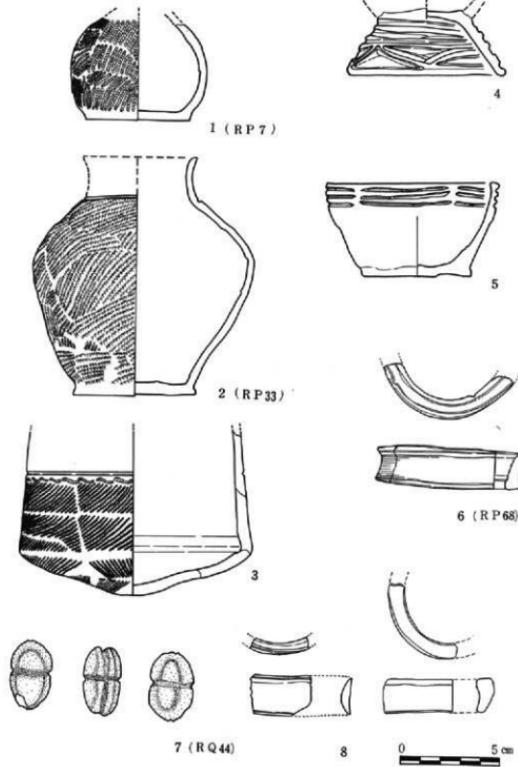
覆土2・3層は堆積が薄く曲線的な重なりを示すので、土器については一括して述べる。本層では1層に比べ各群の混在は少ないが、第V群～第X群土器がみられる(第8図24～36)。24はVIa類、25はVIb類、26～29はVIa類、30～32はVIa類、33・34はVIIb類、35・36はX群ないしXI群に伴う粗製深鉢である。EP3付近の覆土2層よりVII群土器や石棒・両頭石斧等がまとまって出土している。第7図3は本住居東端覆土2層より出土した橢形土器で、VIIa類に伴うとみられる。第7図1・2・4は覆土3層出土の完形土器である。4はVIa類で、高杯に近い台付浅鉢の台部である。3条の平行沈線下に四単位のエ字文を施している。1は大きな底径をもつ平底の小形壺で、VII群土器に伴う器形とみられる。2は体部上半に最大径を有し、口頭部の直立する小形壺で、体部にL字の斜構文を施している。X～VII群土器に含まれられるものである。

第9図1～22は周溝内および床面より出土している。I群(1～3)・VII群(6・7)・VIII群(8)土器も存在するが小片であり、主体をなすのはXI群(13・14・16・17)・VII群(15・18・20・22)土器である。第7図5の浅鉢は、床面より出土し、3条の平行沈線文を6単位のI字文風に施しており、VII群土器の仲間とみられる。

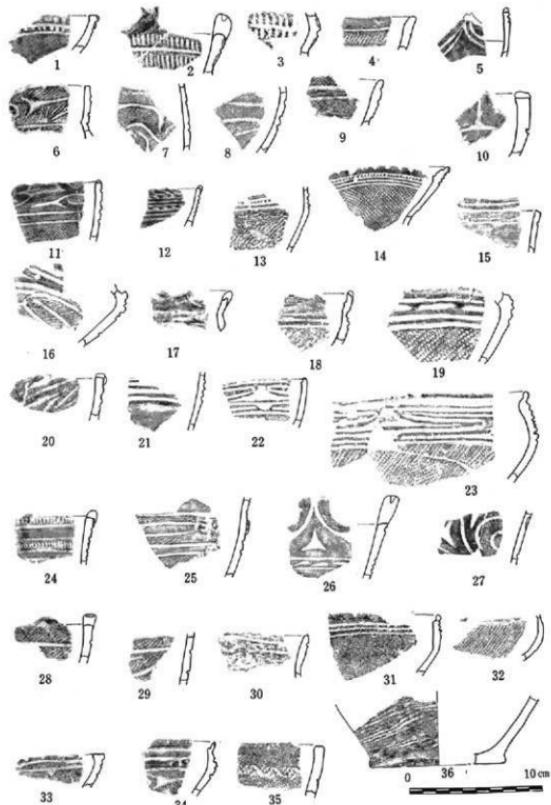
23～37は、本住居跡の柱穴より出土し、I群(1・26)・II群(24・25・27～29)・VII群(34～36)・XI群(37)土器等があり、覆土1層同様に遺物の混入が著しい。

これらの土器群のうち本住居跡に伴うことが明確なものはない。本住居跡の時期をもともよく反映しているとみられるのは床面・周溝内出土の土器群である。中でも主体を占めるものはXI群・VII群土器であり、この傾向は覆土最下層(覆土3層)でも同様である。また新しい時期の遺物に古い時期の遺物が混じることはあっても、その逆が成立しない層位学の原則も考慮するならば、本住居跡の時期はXI群・VII群土器の時期と把握される。XI群・VII群土器は、IV章で後述するように、縄文時代晚期大洞A・A'式土器に併存する時期のものとみられる。

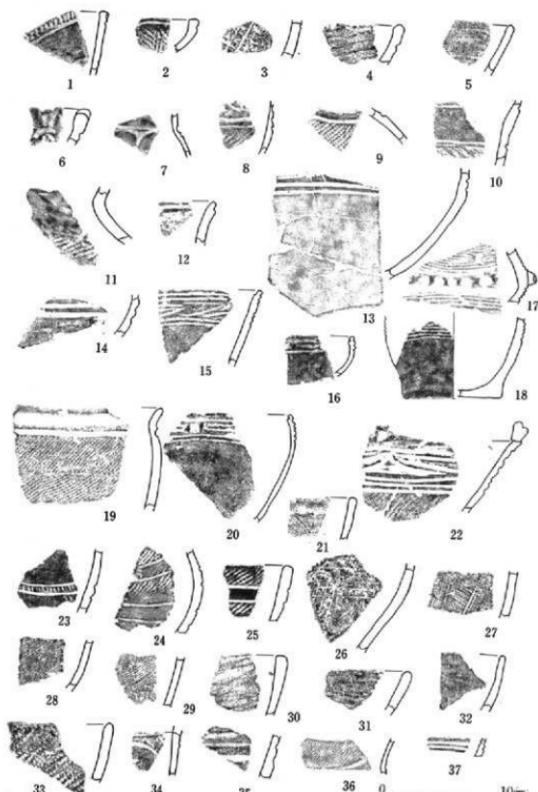
本住居跡出土の土製品(第7図6～9)のうち9は覆土1層出土の土鍬である。径3.3×2.1cm、重量14gを測り、小形品である。形状は楕円形を呈し、その両軸にそって幅3mm



第7図 1号住居跡出土土器・木製品



第8図 1号住居跡出土土器(1)



第9図 1号住居跡出土土器(2)

の凹部が全周する。第7図6～8は、EP1 覆土出土の耳栓である。総数3個出土している。8は全体の5分の1程度の破片で、推定径約7cm程度である。断面形は扁平で、中中部で屈曲して「く」の字状を呈する。6は床面より出土し、覆土1層出土のものと接合した。全体の3分の1ほどの破片である。推定径は約7cm程度で、表面をていねいに研磨している。

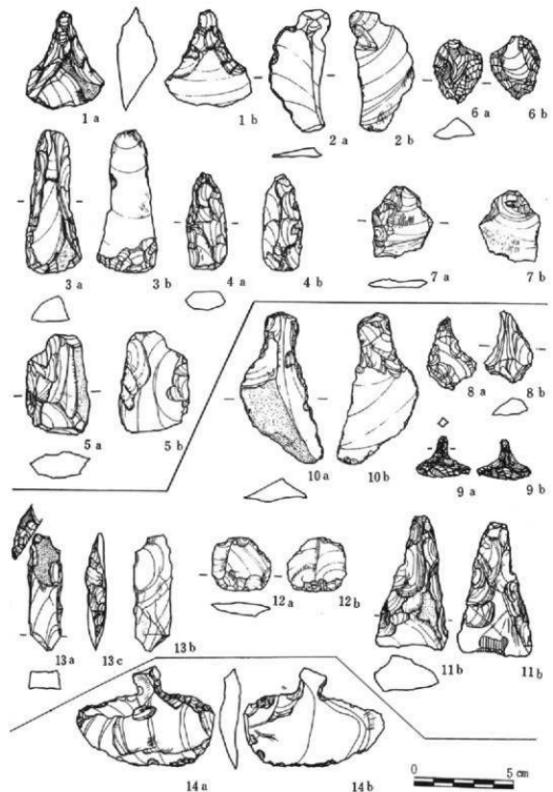
本住居跡出土の打製石器（第10図上段）の内訳は第11表のとおりである。そのうち二次加工のある石器は総数28点で、その大部分は覆土1層から出土している。

1はⅡc類の未完成品であるとみられる。2はa面左側縁に細い二次加工があるのみで、素材の形をほとんど変えていない。b面左側縁には連続した細い剝離痕が認められる。3はⅣa類の石窓で、素材の剥離面から急角度の二次加工を施した両側縁をもち、先端は表・裏面からフルーティング様の剝離が施され両刃状となっている。4はⅣc類で、完全な両面加工となっているが、先端部加工はない。5はⅥa類で、b面左側縁にも大きな剝離面があり、未完成品ともみられる。6はⅧa類で、表・裏面ともほぼ全周に及ぶ典型的なラウンドスクレーパーである。7はa面左側縁を刃部とするⅩ類のサイドスクレーパーである。

図示できなかったが、この他にもVb類2点・VIa類2点・Vb類2点・VIc類1点・VIIa類1点・VIIb類2点・VIIc類1点・VIIe類1点・VII類7点・X類1点が出土している。

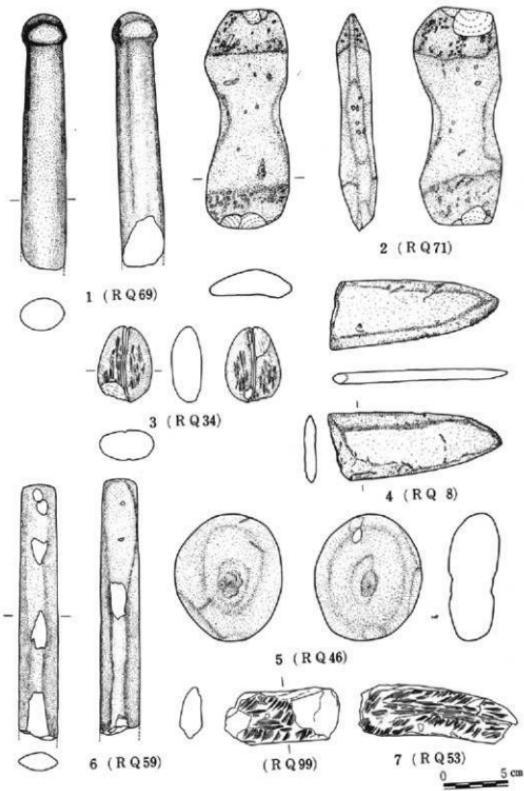
磨製石器は2点のみ出土している。第11図2は、両頭石斧で、全長16.4cm、刃部幅6.5cmを測る。断面は長楕円形を呈し扁平である。刃部は画面からていねいに敲打を行い、基部両縁も敲打により整形している。刃部には打撃による大きな剝離がある。第48図6は覆土2層出土の磨石である。前述した分類によればa類として把握される。材質は、安山岩で、重量260gを計る。

その他石製品は3点出土している。第11図1は有頭の石棒である。断面が梢円形を呈し、最大径3.2×2.4cmを測る。表面に複数の擦痕があり、体部縁辺・頭部の頂端部に敲打痕がある。その上をていねいに磨いて整形している。材質は、泥岩で、後述するST3-F1出土の石棒と同一個体である。第11図4・第11図7はいずれも片刃の石刀である。4は、覆土1層出土で、背部・刃部とも先端で弯曲が著しい。刃部先端に刻みを有し、背部・刃部縁辺に横位の擦痕が走り、平担部をていねいに磨いている。刃部に刃こぼれ状の使用痕は認められない。材質は泥岩である。7はEP5の覆土より出土している。片刃で、背部に若干のそりをもつ。表面に斜位の擦痕があるが、つくりは稚である。刃部に刃こぼれ状の痕跡は認められない。材質は粘板岩で節理が走り、表面の離脱が著しい。また後述するST4-F1出土の石刀と同一個体で接合した。



第10図 1・4・3号住居跡出土石器

-26-



第11図 1号住居跡・土壤群石製品

-27-

### 3号住居跡 (S T 3) (第12~27図・図版 9~26)

II区13~17-N~Sグリッド第III層(黒褐色土層)上面で確認された竪穴式住居跡である。地山(第IV層-黄褐色砂質土層)を深く掘り込んでいるため壁・周溝等の検出は容易であった。本住居跡の床面はS T 4の周溝の一部を埋め込んでつくっており、本住居跡の北側でS T 4を切っていることがわかった。

平面プランは南北にやや長い略円形を呈する。大きさは南北10.2m×東西 9.4m、深さは32cmを測る。覆土は4層に大別される。覆土①層は、粘質の明褐色土層で、厚さ15cm前後である。多量の炭化粒子と若干量の赤色粒子を含む。北側の一部を除いて住居跡のほぼ全体を覆っている。覆土②層は、粘質の褐色土層で、厚さ10~13cmである。多量の炭化粒子・赤色粒子を含む。覆土③層は、粘性の強い暗褐色土層で、厚さ5~8cmである。住居の西側ではやや厚く堆積している。赤色粒子を含む、周壁際では黄色ブロックが混じる。覆土④層は、粘質の暗黄褐色土層で、厚さ5cm前後である。地山との漸移層である。

壁は南側でやや緩やかな立ち上がりを示すが、全体的にはほぼ垂直に近い立ち上がりを示す。壁高は13~28cmを測る。周溝は、南西側で2列に分かれ、外側のは壁柱穴とみられる小穴群、内側は溝状の形態を示す。同溝の幅は35~53cm、深さは床面下45~50cmを測り、相当深いものである。床面は全体的に平坦であるが、中央で12cm程の凹みを示す。周溝付近を除いて地山を固く叩きしめており、とくに貼床はみとめられなかった。

柱穴は20個(E P 1-E P 20)あり、主柱穴的様相を呈するのはE P 1~5・7の6個である。同溝の中にあるE P 10~16は補助的なものとみられる。主柱穴的様相を呈するピットは、直径1m前後の不整円形を示し、深さ60~110cmを測る。各ピットとも最深部を中央寄りにもち、内側に傾斜している。周溝内のピットは、径40~60cm、深さ40~50cmを測る。円形のほぼ垂直な掘り込みを示している。

炉は、石組炉で2基(E L 1~2)検出した。E L 1は住居内ほぼ中央に位置する。平面形は1.6m×1.3mの横円形を呈する。掌大から35cm位の細長い横円形の河原石を用い、南側に20cm程度の河原石を方形に組んだ張出し部を有する。深さは、中央部で25cmを測り、中央部がやや高くなっている。覆土は4層に区分される。①層は多量の木炭を含む黒褐色微砂層。②層は焼土・木炭を含む明褐色微砂質土層。③層は赤褐色土層で、炉内中央部に集中して堆積している焼土である。④層は少量の木炭を含む暗褐色微砂層で、張り出し部に堆積している。E L 2は住居北側にあり、直径60cmの円形石組炉である。

住居の北西部13~14-Pライン上で、埋設土器が2基(E U 1~2)検出されている。床面を約10cm掘り込み、体部下半を欠いた變形土器および鉢・浅鉢形土器を2~3個組み合わせて埋置している(第14・15図)。埋設土器の上面は床面より20~30cmの高さを有し、

1) 上面で確認された竪穴式住居跡である  
とみているため壁・周溝等の検出は容  
を埋め込んでつくりており、本住居跡

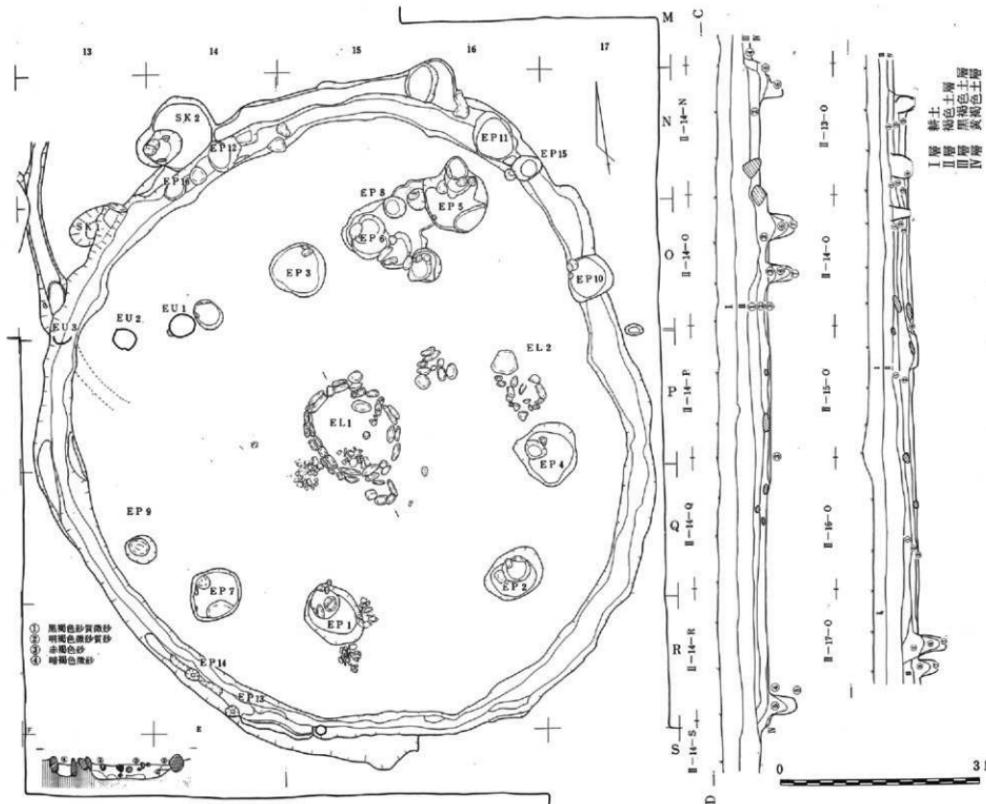
きさは南北10.2m×東西9.4m、深さ  
は、粘質の明褐色土層で、厚さ15cm前  
む。北側の一部を除いて住居跡のはば  
、厚さ10~13cmである。多量の炭化粒  
色土層で、厚さ5~8cmである。住居  
・周壁際では黄色ブロックが混じる。  
である。地山との漸移層である。

体的にはば垂直に近い立ち上がりを  
2列に分かれ、外側のは壁柱穴とみら  
35~53cm、深さは床面下45~50cmを  
あるが、中央で12cm程の凹みを示す。  
に貼床はみとめられなかった。

柱を呈するのはEP 1~5・7の6個と  
みられる。主柱穴の様相を呈するビ  
110cmを測る。各ビットとも最深部を  
ットは、径40~60cm、深さ40~50cm

L 1は住居内ほぼ中央に位置する。平  
面位の細長い楕円形の河原石を用い、  
有する。深さは、中央部で25cmを測  
分される。①層は多量の木炭を含む  
砂質土層。③層は赤褐色土層で、炉  
留は少量の木炭を含む暗褐色微砂層で、  
り、直徑60cmの円形石組炉である。

が2基(EU 1~2)検出されている。  
および鉢・浅鉢形土器を2~3個組み  
上面は床面より20~30cmの高さを有し、



第12図 3号住居跡

口縁部が良好に進行する。E U 1は南側を河原石により補強されている。また、13-P ラインの周溝中にも、本部下半の欠けた菱形土器が一個斜めに輸出されている。これらは、ほぼ一直線上に並び、いづれも本部下半を欠いている等を考え合わせると、共通の目的をもって埋設されたものとみられる。土層観察の結果、上面からの掘り込みがみられず、土器の型式も S T 3 の時期と共通する。したがって本住居跡に伴う施設と考えられる。

本住居跡出土の土器の総数9537片である。内訳は覆土1層4019、2層1485、3層 743、4層1690片である。

覆土1層からはI群～XI群土器まで各群の土器が出土している(第18図・図版16・17)。1・2はIa類、3はIb類、4・5はIIa類、6はIIb類、7～10・12はIVa類、11・13はIVb類、14～16はVa類、17～18はVb類、21～25・29はVIa類、26はVIb類である。このほか器面全体に曲線的な刷毛目文(28)、粗い刷毛目文(19)、および研磨(20・27)を施しているものもある。本層で主体を占めるのはIX～XI群土器で、30～36はIXb類、38～40はXa類37・42・44はXb類、41・43・45・46はXIa類に属する。第17図2も覆土1層から出土したもので、口縁部に4個の小二連突起を有する鉢形土器である。体部に直線的なI字文が8單位づつ3段に施されている。XIa類に属する。

覆土2層からはIV群～XI群土器までの土器が出土している(第19図1～5)。1はIVb類、2・3はVIa類、4・5は菱形土器の一帶でXIc類に属する。第16図5・6も本層から出土したもので、5は菱形土器の頭部から体部上半、6は本部下半である。口頭部が内側にすばり、頭部に1条の沈線、体部にL型とR型2本の繩文原体を交互に用いて羽状繩文を施している。内面も比較的よく磨かれている。XIc類に属するとみられる。

覆土3層からIII群土器～XI群土器まで出土しているが、XI・XII群土器が主体を占める(第19図6～27、図版18)。7はIIIb類、8はIVa類、9はVIa類に属する。7は横方向に粘土貼付による板状の突帯・縱方向に短い沈線を有する深鉢形土器の破片で、類別は不明である。10・11はXIa類の菱形土器、16も粗い磨消繩文を伴なうI字文を施しており、I字文間に斜方向の連結を有する。17は磨消手法を伴なない工字文でXIa類、13・21～23は頭部に眼鏡状の突帯を有するXIb類である。菱形土器は口唇部に1条の沈線を加えた波状口縁が特徴的である。19・20は平縁で口縁部に1条、頭部に4条の平行沈線を有する菱形土器である。XIc類の仲間に含めておきたい。12・18は平縁ないし波状口縁で、口頭部に3条の平行沈線を有する浅鉢形土器である。これもXIc類に属する。15は口唇部に刻目をもち、頭部に3条の平行沈線を有する鉢形土器である。XIc類に属するとみられる。24～26は口唇部に竪状工具による連續押圧波状文を有する菱形土器である。24・25は頭部に結節回転繩文、26は2条の幅広い平行沈線が施されている。24・25はXIc類、26はXIc類の中間的様相をもつ。

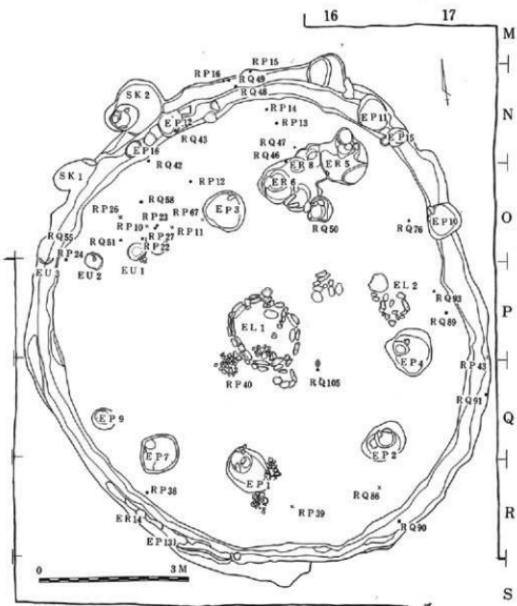
27は深鉢形土器の底部で一条交互式の網代痕が施されている。

第16図2~4・第17図1・2(図版15)も覆土3層から出土したものである。第20図1は口縁部に小波状突起と4個の中波状突起をもつ小形の台付浅鉢である。口縁部外面に2条、内側に1条の平行沈線を有し、体部はR<sub>1</sub>~R<sub>4</sub>横文が施されている。Xe類に属する。3は口縁部に1個の中突起をもつ小形の鉢形土器である。頸部が研磨され、体部に粗いL<sub>1</sub>~L<sub>4</sub>横文が施されている。底部は0.6cm位のあげ底となっている。第16図2は口縁部が欠損しているが、体部がほぼ直立する小形の深鉢形土器である。体部に粗いL<sub>1</sub>~L<sub>4</sub>横文が施され、底部周辺には横文が施されない。番面内側に炭化物が付着している。3は体部上半を欠損する壺形土器で、底部がやや突出したあげ底風になっている。体部全面にL<sub>1</sub>~L<sub>4</sub>横文が施されている。4は半縁で体部下半が欠損する大形の浅鉢形土器である。頸部に1条の沈線、体部に一部結節を有するL<sub>1</sub>~L<sub>4</sub>横文が施されている。これらの土器の時期を明確に位置付けることは困難であるが、器形などからXないしⅪ群土器に属するとも見られる。

覆土4層からはI群土器~Ⅺ群土器まで出土しているが、Ⅸ~Ⅺ群土器が主体を占める(第20・21図、図版18~20)。第20図1はIb類、2・6・7・14はⅢa類、3~5・13はⅢb類、8~11はⅣa類、12はⅣb類、19・23~28はⅥa類、20はⅥb類、26はⅦa類、25・31はⅧa類、24・27~29はⅧb類に属する。15~17は燃糸文を施し21・22は器面全体が研磨されている。I~Ⅺ群土器は量的に少なく、各群毎の顯著な増減は認められない。

30~38~44はⅤb類、32~35~45~50はⅤa類、第21図1・2・6はXa類、23~30~Xはa類、7~22・24・25・35はXe類に属する。Ⅴa類とXe類はともに数条の平行沈線をもつ鉢ないし深鉢形土器を主とするものがあるが、Ⅴa類の口縁部形態は直立ないし内傾するものが多く、Xe類はやや内弯した体部が口縁部で急に外反するものが多い。3・4は磨消横文の手法を伴わない工字文が体部に施されている鉢形土器で、工字文が後述するⅪ群土器のような完成度を示さず、浮彫手法よりはむしろ沈線を主体とするものである。時期的にはⅩ群土器に併行するものと思われる。26~29は浮彫的な工字文でⅩa類。31~34はⅩb類に属する。32~33~34はXe類に近い器形であるが、頭部が長く伸びて壺形土器に近い器形をとることからⅪ群土器に入る。37~39は平行沈線をもたない變ないし壺形土器でⅪc類に属する。40はⅪb類の浅鉢形土器の底部周辺で、底部との境界に1条の沈線を有している。

第22図(図版19)は周溝内から出土した土器である。I~Ⅺ群土器も小数存在するが、主体はⅤ~Ⅺ群土器が占める。1はIb類、2・3はⅢa類、5はⅤa類、6~9はⅤb類に属する。10~12は器面全体が研磨され、口縁部がやや肥厚する大形の深鉢形土器である。Ⅴ群土器に属すると見られる。14~15はⅪb類、13・16~23・35Ⅺa類である、Ⅺa類の鉢ない



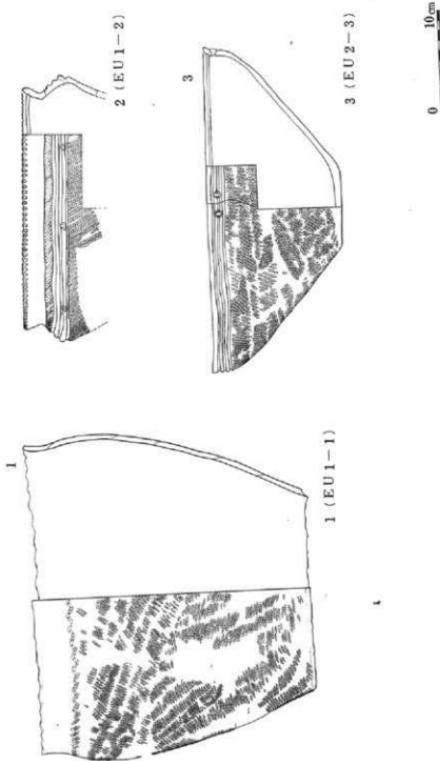
し深鉢形土器の口縁部は短く急激に外反する傾向を示す。このような特徴は26・27・29の大形の深鉢形土器にもみられる。24・25・28はXIc類の鉢ないし甕、28・31は同類の壺形土器である。30は施文手法はXIc類に類似するが、器形は口縁部が直立した深鉢形土器である。口縁の小波状突起も浅いものでもしろIVないしX群土器に伴なうとみられる。34は鉢ないし壺形土器の口縁部片で、体部上半に縱方向の沈線によって長方形の浮彫文様を重ねているものである。34に該当する小類は設定しなかったが、他遺跡での併出関係からXI群土器に属するものとみられる。36はXIa類の浅鉢の体部下半である。33は羣b類に属する浅鉢形土器で1片のみ出土した。ST 3の下限時期を考える点で重大な意味を持つものであるが、後述するようにST 3の時期は床面や埋設土器の資料から羣土器まで下ることは考えられず、何らかの擾乱によるものと考えられる。

第23図25～43(図版20)は床面から出土した土器である。X・XI群土器がほとんどである。25・28はXa31～35・40・41はXIc類、29・30・43はXIa類、39・42はXIc類に属する。

43は器面に赤色顔料の塗彩がみられる。第16図1(RP10・図版15)はST 3南端の壁直下から出土した小形の壺形土器である。口縁部が欠損しているが、体部がやや扁平で底部に4個の貼瘤状の脚を有する。現存する体部の上端はあたかも二次的整形を施している如く直線的で平滑である。文様は体部に5單位2段の磨消繩文を伴なう工字文を有する。

つぎにST 3のピット内および炉内出土の土器について述べる。EP1からはIIb類、XIa類が出土している。EP 2からは口縁部がほぼ直立し羽状繩文をもつ深鉢形土器、XIc類の壺形土器が出土している。EP 3からはIVa類、XIc類、XIa類、XIb類、XIe類、口縁部に幅広い範状工具による削きをもつ大形の鉢形土器が出土している。EP 5からはIIa類(第23図3・4・6)、XIe類(1・2)の浅鉢ないし鉢形土器が出土している。EP 9からはVb類(7～11)の鉢ないし深鉢形土器が出土している。EP 10からはIVa類(12)、XIc類(14～16)の深鉢ないし壺形土器が出土している。EL 1の覆土内からはIb類(17)、Ic類(20)、IIIa類(19・23)、IIb類(18)、XIb類(21)、XIc類(24)などが出土している。

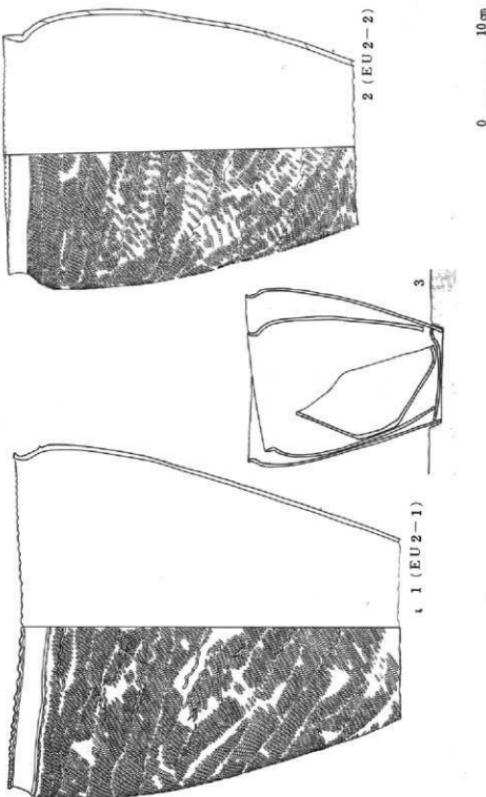
埋設土器は3個出土している(EU 1～3)。EU 1は床面を10cmほど円形に掘りくぼめた掘り方に底部付近を壊した大形の壺形土器(第14図1・図版13)を埋め、周囲を河原石で固めたものである(図版12)。壺形土器の口径は31cm、現在器高は28cmを測る。口唇部に範状工具の押圧による小波状突起を有し、体部にL字形の結節回転繩文が施されている。なおEU 1の内部から口唇部に棒状工具による刺突文、口縁部に平行沈線と連続割目文をもつ大形の鉢形土器(第14図2)が発見された。EU 2は、床面を10cmほど掘りくぼめた掘り方に2個体の壺形土器(第15図1・2図版13)と大形の浅鉢形土器(第14図3)



第14図 3号住居跡埋設土器(1)

を組み合せて埋めたものである（第15図3模式図）。もっとも内側の浅鉢形土器は周囲の3分の1程度が欠損し、周囲の2個体の菱形土器も底部付近が欠損している。1は口径34cm、現在高38.5cmを測り、体部に筋節を伴なうL型繩文が施されている。3は口径24cm、高25.5cmを測り、体部にL型繩文が施されている。1～3は器面内外に多量の炭化物の付着がみられる。E U 3は底部付近を壊した菱形土器を1個体周溝内にやや斜めに埋設された状態で検出されたものである。風化が著しく復元ができなかつたが、体部にL型繩文が施されている。地層観察の結果E U 1～3とも上面から掘り込みは認められなかつた（第12図）。

以上S T 3出土土器について述べてきたが、つぎにS T 3の生活時期についてふれる。覆土1～4層および周溝内の土器で主体を占めるのはⅩ～Ⅺ群土器であり、S T 3の時期がこれらのいづれかに含まれることは確実とみられる。このうち遺構の時期をもっともよく反映しているとみられる床面直上出土の土器はⅩ・Ⅺ群土器である。それゆえⅪ群土器は除いても良さうである。しかし主柱穴であるE P 1とE P 5内の出土土器も考慮するとⅩa類とした磨消繩文手法による直線的な雲形文の一部はS T 3の生活時間に及ぶことを認めざるを得ない。Ⅹ～Ⅺ群土器のうちもっとも特徴的な土器は第16図1にみられるような磨消繩文手法を伴なう工字文の仲間（Ⅹa類）である。Ⅹa類は從来Ⅺ群土器とⅪ群土器の仲間的な様相を持つものとして理解されてきたが、研究者によってⅪ群土器に含めたりⅪ群土器の古い時期と考えたりまちまちであった。本書ではⅩa類およびこれに伴なう縫、深縫（妻）、菱形土器をまとめてⅩ群土器として一群を設定している。Ⅹ群土器の中でⅩa・Ⅹb類として磨消繩文手法を持たない工字文のうち、浮彫的な要素が少ないものはⅩ群土器に含めてもよいことは既に述べた。これによってS T 3の床面および周溝内出土の大半の土器はⅩ群土器と考えることが可能である。それにしてもⅪ群土器のうち浮彫的な工字文をもつ浅鉢や菱形土器および口唇部に窓状工具で押圧した小波状口縁と筋節回転繩文を特徴とする菱形土器などはⅪ群土器の特徴として考えなければならないであろう。後者の菱形土器（Ⅺc類）がS T 3と具体的な関連を持って表されているのがE U 1～3である。E U 1～3をS T 3の生活時期より1時期新しい（Ⅺ群土器の時期）と考えることも可能であるが、地層断面の観察結果およびE U 1内から出土した口頭部に刻目をもつ鉢形土器の存在は、むしろE U 1～3がS T 3と同時期であることをうかがわせる。Ⅹ～Ⅺ群土器は型式学的におおむねこの順序で変遷すると考えられるが、遺跡における住居跡の生活なし廃絶時期は必らずしも型式の終内に納まるものではなく、それらの過渡的様相を示すことも十分考えられる。ここではS T 3の時期をⅩ群土器を中心とする時期と把握しておきたい。Ⅹ群土器はⅣ章で後述するように繩文時代晚期大洞C<sub>2</sub>式後半併行期と考えられる。



第15図 3号住居跡埋設土器 (2)

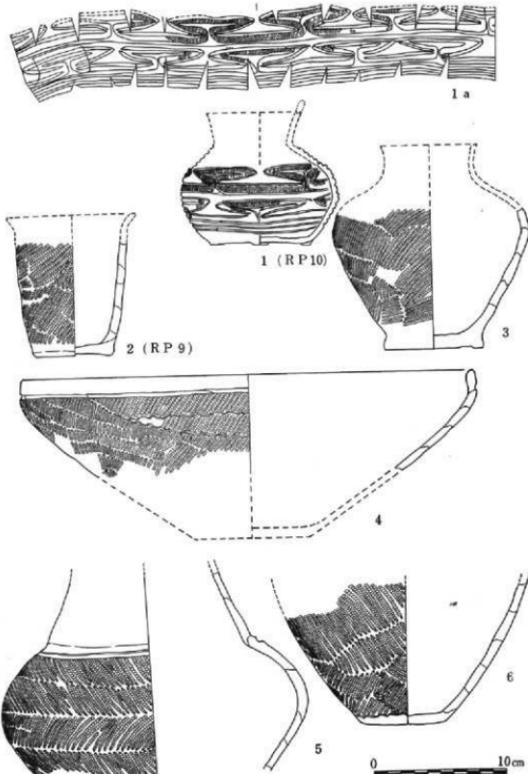
土製品は5点出土している（第17図4～8）。4～7は耳栓である。5は周溝出土である。全体の5分の1程度の破片で推定径は約7cmとみられる。断面は扁平で中央部分が「く」の字状に屈曲する。裏面はていねいに磨かれている。胎土に微細な砂粒を含み、焼成は良好である。4はST3の炉跡付近より出土した全体の6分の1程度の破片である。推定径6cm程度である。表面に朱が塗られた形跡を認める。胎土に微細な砂粒を含み焼成は良好である。8は覆土1層出土の土偶である。1点のみの出土である。肩部の破片で腕部は欠損しており、中央に乳房状の突起を有する。この突起の上に一条、横位の刺突が施されている。胎土に粗い砂粒を多量に含む。

本住居跡出土の打製石器（第24～26図・第10図4）の内訳は表11に示した。そのうち二次加工のある石器は、覆土1層から56点、覆土2層から55点、床面から3点、周溝から2点、柱穴から6点検出されている。

第24図・第10図14は覆土1層出土である。1・2はそれぞれIa類・Ie類に含まれる石鎌である。13・15はIIIa類の石匙である。13は横長剣片を素材としてa面左側縁に背の低い二次加工を施して刃部をしている。15は縦長剣片を素材とし、a面左側縁を刃部としている。a面右側縁はバルブ除去の調整剣離と一次剣離面で構成されている。14は縦長剣片を素材とするIIIb類で、13・10と同様背の低い鋸い刃部をもつ。第15図14は縦長剣片を素材とするIIIc類の石匙で、つまり部分以外目立った二次加工はない。3～5はIV類とした石鎌である。4は両側縁に急角度の二次加工が施され、先端が両刃状になるIVa類、3・5は共に先端が大きな剣離面で覆われるIVc類の石鎌である。6～7はそれぞれVa類・Vx類とした両面加工の尖頭器状石器である。6は先端・基部とも欠損している。7は先端部だけの資料である。両者とも二次加工が全面に及んでいないが、鋸い先端部をもっていることから石槍としての機能を想定できる。8・9はVIa類とした両面加工石器である。9は、より入念な二次加工のある側縁にアスファルトが付着しており、刃部に対応する側縁と考えられる。この側縁は断面図で示したように薄く鋸いものとなっており、表・裏面とも小さな二次加工が施されている。8は横長剣片のバルブを除去するという点において9と共通するが、対応する側縁は二次加工ではなく、刃部を形成しているとは考えられない。10は管a類としたラウンドスクレーパー、11は管d類とした両側縁に刃部をもつスクレーパーである。

図示できなかったが、この他にVIa類1点、VIb類1点、VIc類7点、VIIb類1点、VIIc類2点、VIc類7点、VIx類17点、X類5点出土している。

第25図上段は覆土2層出土のものである。7はIIx類としたもので、先端部両側から急角度の二次加工となっており、この部分の断面は三角形を呈している。石鎌の失敗品とみら



第16図 3号住居跡出土土器

れる。1、2はそれぞれIVb類、IVa類の石範である。1の両側縁は基部から先端に向って両面に入念な二次加工が施されているが、先端部は片面にラフな加工が認められるのみで、IVd類をすべきかもしれない。3、4は共にVx類とした両面加工尖頭器の未成品である。4aは先端部に自然面を残したままであるが、鋭さを感じさせる。第29図7はVb類とした石器である。b面基部が左右両側縁から二次加工をうけてパルプが除去されている。concaveした先端部は、図で表われていないが、直角に立ち上がる一次刺離面があり、刃部とはなっていない。5、6は共に急角度の刃部をもつVb類のスクレーパーである。

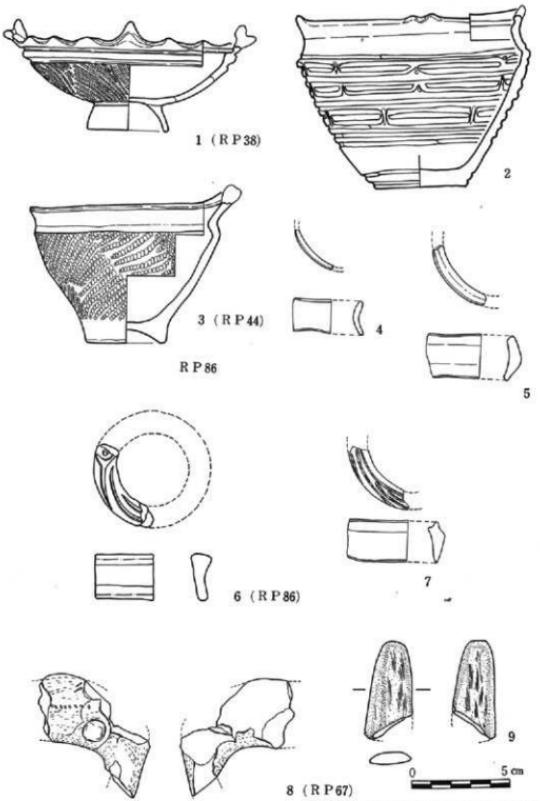
図示できなかったが、この他にVx類2点、Vla類1点、Vlb類1点、Vlb類1点、Vlc類1点、Vld類3点、Vle類15、Vf類20点、X類5点が出土している。

第25図下段・第24図12は床面直上・周溝・柱穴出土のものである。第24図12はVle類とした石匙で、弧を描く刃部に急角度の二次加工を施している。11は典型的なVla類の石範である。10はVla類、8はVlb類、9はVle類のスクレーパーである。12は本遺跡唯一の打製石斧である。分離形を呈し、両刃の刃部をもつ。

第26図は接合資料である。覆土2・3層で検出された刺片4点からなるもので、他に接合しない同一母岩の刺片が1点確認された（6）。本遺跡には、このほかにも多数の接合資料があるとみられるが、整理期間の関係で未整理状態にある。

磨製石器は14点出土している（第27図5、第49図1～8・10）。本調査で検出され遺構中ではもっとも多く出土し、種類も豊富である。内訳は石錐1点、磨石6点、凹石3点、石冠3点である。

第27図5は覆土3層出土の石錐である。梢円形を呈する自然礫を使用し、中央部軸方向を敲打し、凹刻したものである。重量202gで材質は安山岩である。第49図2・4・7・8・10は磨石である。前述の分類によれば4はa類として握持される。材質は砂岩で、表面に亀裂が入っており、大変もろく火熱を受けた跡がある。8はb類で、材質は花崗岩で、球形を呈し、表面の磨擦痕はあるまいにせり少しこれが少ないものと考えられる。2・10は、梢円形を呈し、両平担面に磨面を有し断面は扁平でc類である。材質は花崗岩である。10は縁の一端に敲打痕があり、朱の付着が認められる。縁中の平担面に著しい磨擦痕をもち、縁辺にも磨面をもっている。これらはいずれも覆土1層出土である。7は周溝より出土したもので、d類である。形状は円柱状で断面はほぼ円形を呈する、頭部、端部は平担で磨面としている。第49図3・5・6は凹石である。いずれも表面に1～数個の凹みを有する。形状は梢円形を呈し、断面は扁平である。5は磨石c類の再利用品である。梢円形を呈する礫の平担面に磨面がある。第49図1は覆土1層出土の石皿である。破片である。梢円形を呈する自然礫の一面を磨いて凹面をつくりだしている。縁辺にふちがあり、



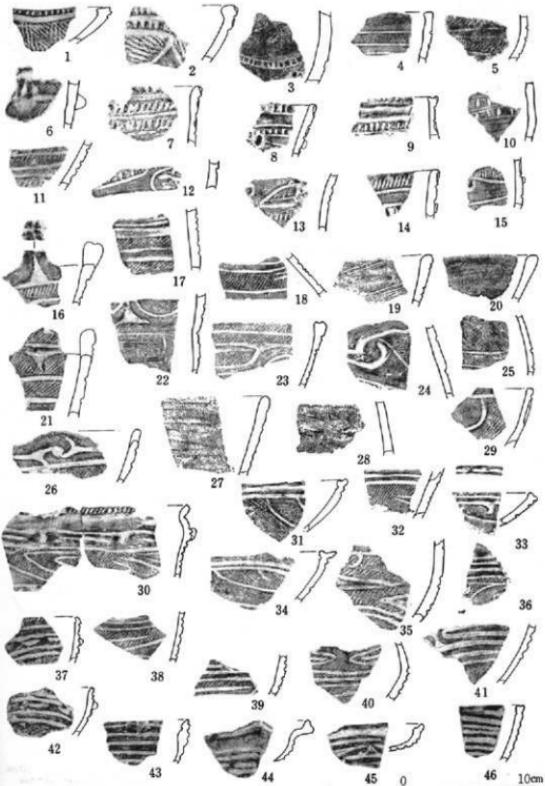
第17図 3号住居跡出土土器・土製品

磨面に小さな敲打痕が無数についている。朱の付着が認められる。材質は安山岩である。前述した磨石にもその縁辺に朱の付着したものがあり、セットをなすものと考えられる。

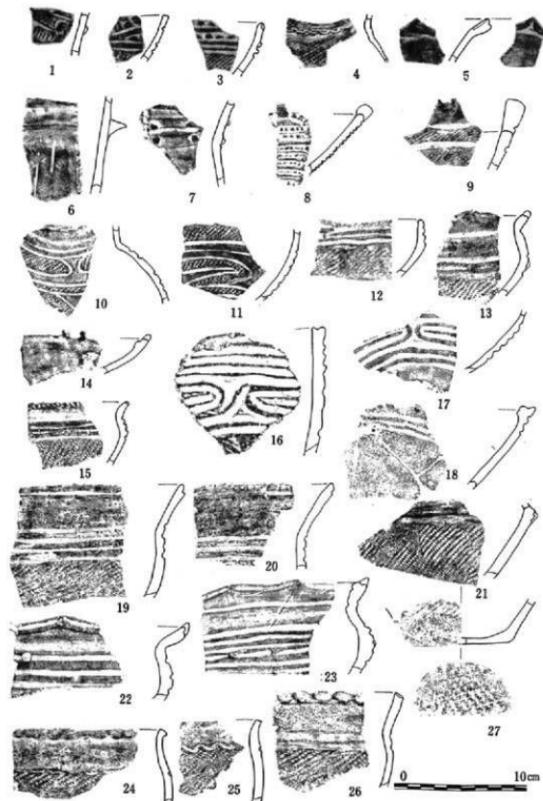
第27図6～8は覆土4層出土の石冠である。6は底面径10.2cm、角張った長梢円形を呈する。握りは側身で中央部に凸帯をめぐらす。表面はていねいに磨かれている。底面はゆるやかに滴曲し、中央部に小さな敲打痕が無数についている。8は円錐を敲打し、幅1.5cm程度の溝をめぐらして握りをしている。底面は平坦で、微細な擦痕が走り、中央部に敲打痕を有する。材質は花崗岩で底面は平坦である。7は部体を敲打して成形し、底面とその縁辺および握りを磨いている。握りに幅3mm程度のあさい凹刻があり1周する。底面には、ゆるい滴曲があり、敲打痕がある。

石製品は5点出土している（第27図1～4・7・第17図9）。第27図1は覆土1層出土の石棒である。1点のみ出土している。径3.1cmを測り、断面は円形である。表面に縦位の擦痕があり、石質も同一で前述のST1出土のものと同個体とみられる。第27図3・7、第17図9は覆土1層出土の石刀である。3・7は背部を面取りしており、角張っている。刃部は丸くわきめ、片刀である。7は表面に斜位の擦痕が走り、3はていねいに磨かれている。

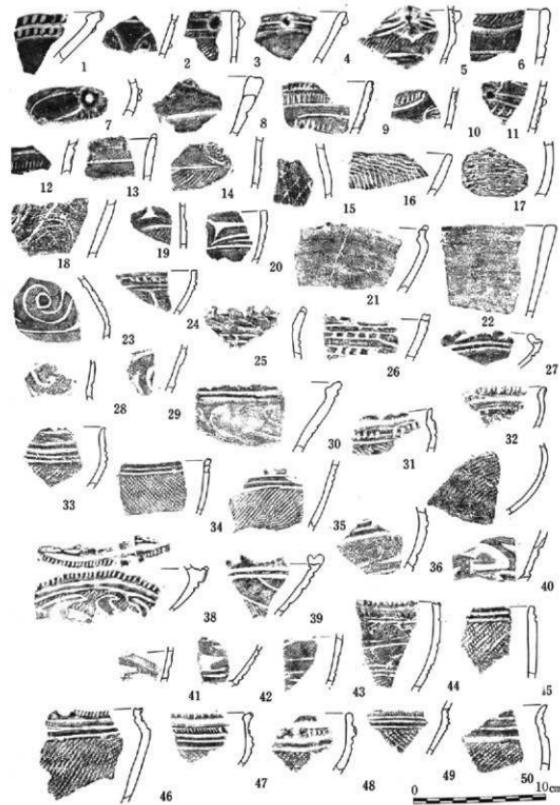
第27図2・4は円盤状石製品である。いずれも縁辺を敲打して成形し、平坦面を磨いている。2は覆土1層出土である。径5.4cmである。4はE.U.1出土である。径6.6cmを測り、平坦面を磨いている。いずれも断面は扁平で、石質は安山岩で、その縁辺を部分的に研磨しているところがある。



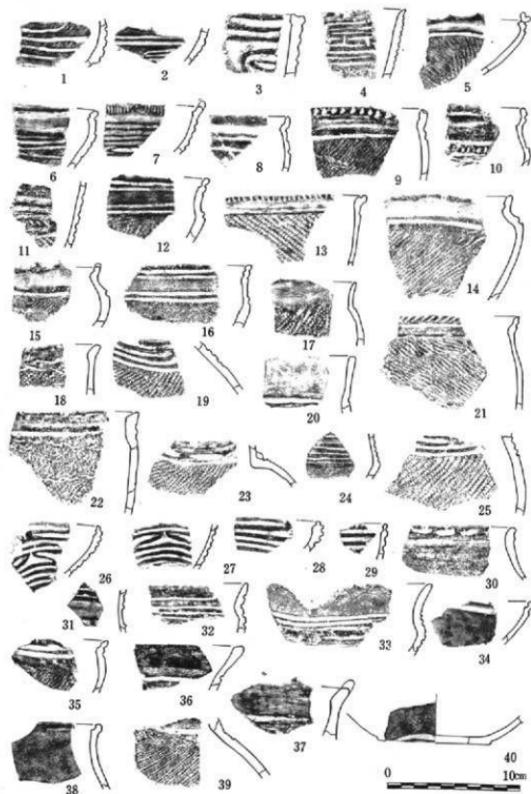
第18図 3号住居跡出土土器(1)



第19図 3号住居跡出土土器 (2)

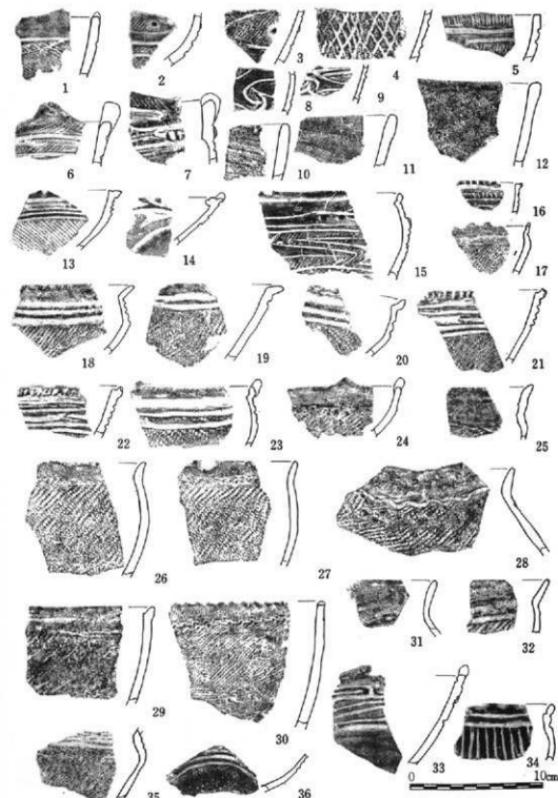


第20図 3号住居跡出土土器 (3)



第21図 3号住居跡出土土器 (4)

-46-

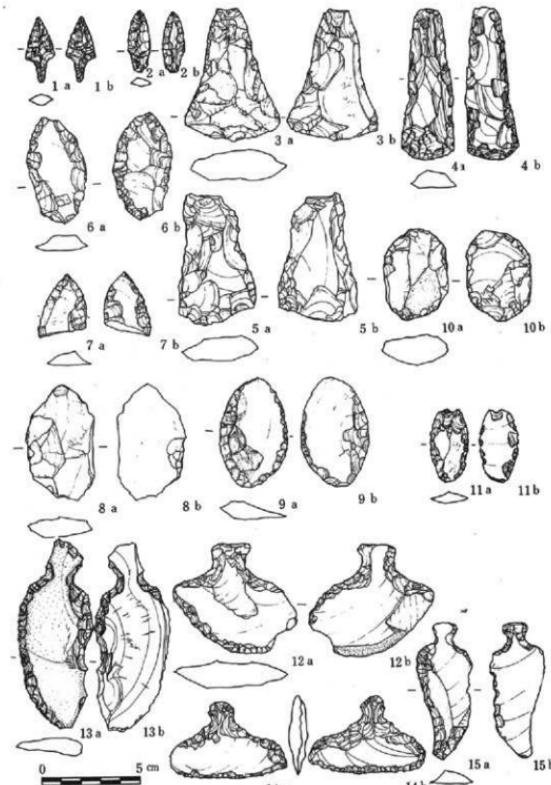


第22図 3号住居跡出土土器 (5)

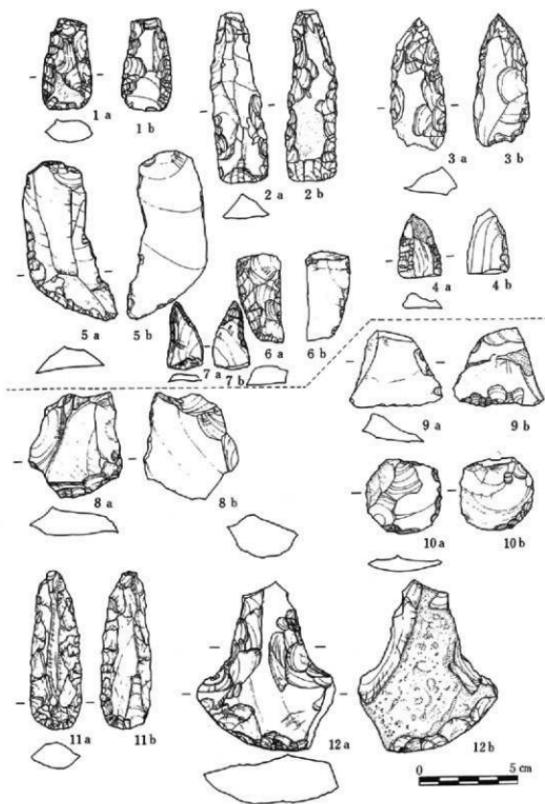
-47-



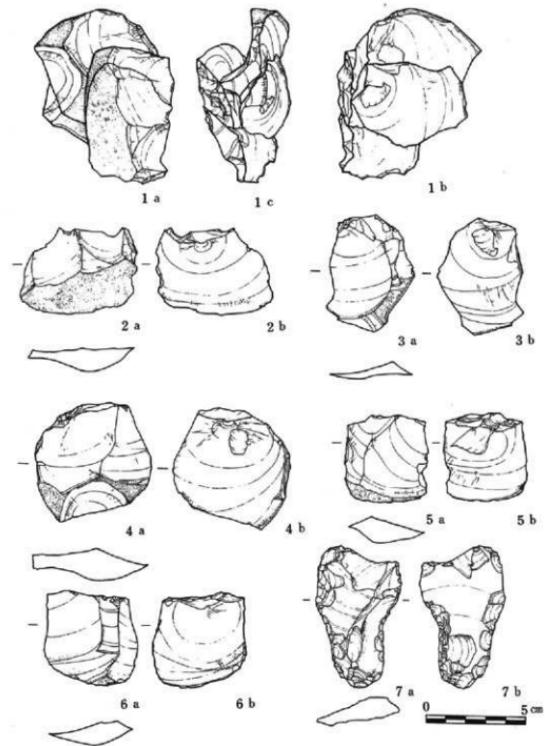
第23図 住居跡出土土器 (6)



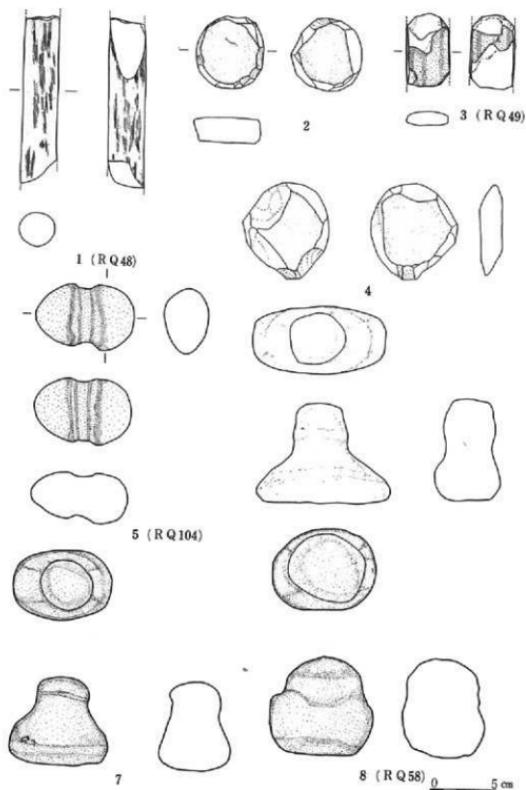
第24図 3号住居跡出土土器 (1)



第25図 3号住居跡出土石器 (2)



第26図 3号住居跡出土石器 (3)



第27図 3号住居跡出土石製品

#### 4号住居跡 (S T 4) (第28・29図・図版27~30)

II区13~15-M~N グリットの第III層(黒褐色土層)上面で確認された竪穴式住居跡である。地山(第IV層-黄褐色砂質土層-)を掘り込んでいるため壁・周溝等の検出は容易であった。3分の2は南側のST 3によって切られているが、周溝の一部をST 3の床面にわずかに確認できた。

平面形は径 6.9m の略円形を呈するものと推定され、覆土は2層に大別される。覆土①層は粘質の明褐色土層で、厚さ18cmである。多量の炭化粒子を含む。南側をST 3によって切られているが、本来は全体を覆っていたものとみられる。覆土②層は、粘質の暗褐色土層で、厚さ20cmである。地山との漸移層で、床面のところどころに堆積している。

壁はほぼ垂直に立ち上がり、壁高3~5cmを測る。周溝は幅25~43cm、深さ20cmの相当深いものである。周溝の一部がST 1の周溝と重複し、その先後関係は明確に把握できなかった。しかし、後述するとおり伴出土器からみてST 4はST 1より古いとみられる。

床面は、ほぼ平坦で、周溝付近を除き地山をやや叩きしめてつくっている。貼床はみとめられない。北東部に半月状の落ち込みを有するが、この性格は不明である。

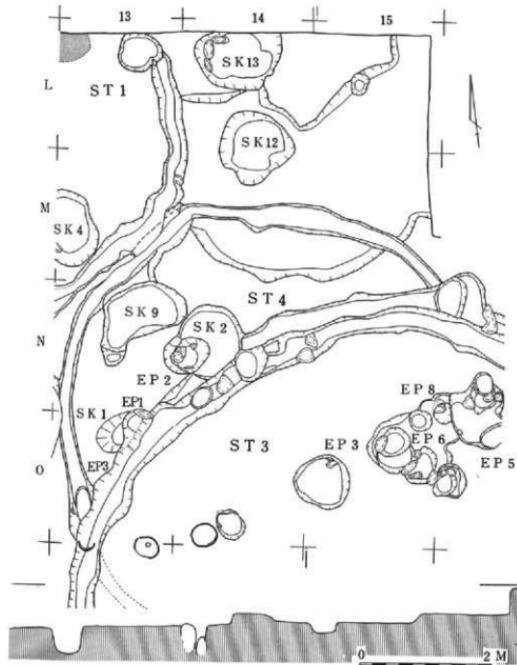
柱穴は3個(E P 1~3)検出され、周溝内に1個・SK 1・2と重複して2個在る。径30~70cmの円形を呈し、深さ40~70cmを測る。主柱穴はE P 1~2で、E P 2はもっとも深く住居内中央部へ向って傾斜している。E P 3は壁柱穴とみられ、垂直に掘り込まれている。SK 1・2・9は、形状や出土遺物からみて本住居跡より古い時期のものとみられる。したがって本住居跡はST 3・SK 1・2・9より新しく、ST 1より古い。

本住居跡から出土した土器の総数は、覆土内も含め1061片である。内訳は覆土1層 819片、同2層 109片、周溝内 114片、E P 1覆土6片、E P 2覆土5片、E P 3覆土8片である。つぎに各層位毎に土器の内容について述べる。

覆土1層からは第I群土器から第II群土器まで各群の土器が混在しているが、ここではIX~XI群土器頃の土器についてのみ触れる(第29図1~5、図版28)。2は口唇部と頸部に連續した刻目をもつ鉢形土器で、体部に直線化した雲形文をもつものと思われる。IXb類に属する。5は臺形土器の頸部に太い工字文を有するXa類である。3・4はXc類に属する。1は器面全体が横方向に研磨されている深鉢形土器である。

覆土2層もI~XI群土器まで各群の土器が混在するが、IX~XI群土器が量的に主体を占める(第29図6~24)。6・8はIb類、9・10はIIb類、7はVb類、15はIXa類、12・16~18はIXb類、19・21はXc類、23はXIb類に属する。このほか器面全体に撫糸文(13)や刷毛目文(11)、斜繩文(14・22)、および研磨(24)が施されている深鉢ないし臺形土器片がある。

周溝内から出土した土器のうち文様や器形の顕著な資料が25~31である。25がIIb類、26



第28図 4号住居跡

がVb類、31がIXa類に属する。27・28は器面が横方向に研磨されている深鉢でV群土器前後のものである。周溝内出土の土器で量的に主体を占めるのは、29のようなXe類ないし粗い斜縞文を有する深鉢形土器片である。EP 1～3内の土器は文様のわかるものではなく、斜縞文をもつ深鉢形土器がほとんどである。

これらの土器群のうちST 4の床面直上も含め確実に伴なう資料はない。比較的遺構の時期を反映していると考えられる周溝内や覆土2層の土器も、各群土器の混在があり、量的にIX～XI群土器が主体を占めることがうかがえるだけである。つぎに各遺構との重複関係よりみるとST 4はST 3によって切られているのでST 3の廃絶時期（X群土器期）よりも新しくなることはなく、またST 4のER 1・2が各々SK 1・2を切って作られていることからSK 1・2の時期（V群土器期）よりも古くなることもない。またSK 5の覆土1層出土の石刀（RQ99）が、ST 4周溝の石刀片と接合する。SK 5の時期はIX群土器期と考えられる。したがって、ST 4の時期は最大幅IX～X群の土器期の間になる。

以上のことよりST 4の時期はIX～X群土器期と把握しておきたい。IX・X群土器は後述するように純文時代晩期大洞C式の各々前半と後半に対比されるものである。

土製品としては、耳栓（第30図7）が覆土1層より1点出土している。全体の3分の1程の破片で推定径は約4cmである。今回の調査で出土した耳栓中では最も小形である。胎土に砂粒を多く含み焼成もあり。断面は扁平で、中央部で屈曲し「く」の字状を呈する。

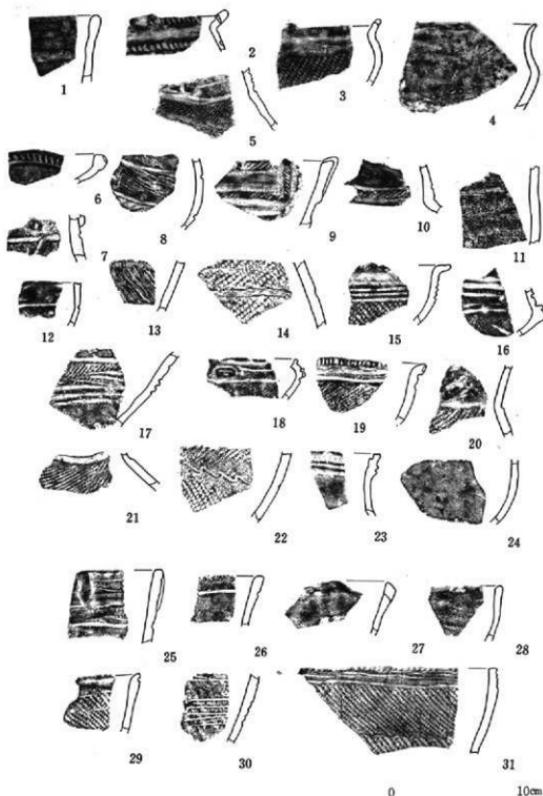
本遺構出土の打製石器群（第10図中段）の内訳は表11に示した。そのうち二次加工のある石器は総数16点で、10を除けばすべて覆土1層から出土している。

8は石鎚の未完成と思われる。9はIIc類の石鎚である。両面全体に二次加工が施され、突出部の断面は菱形を呈し、b面にみられるように折損している。10はつまみを作り出しただけのラフな石鎚で、b面右側縁に急角度の削離痕が認められる。11は先端部が両面とも一次削離面のままで細い刃部をもつIVd類の石器である。12はVIa類、13はVIb類に含まれられるスクレーパーである。

図示できなかつたが、この他にVIc類1点、IX類6点、X類1点が出土している。

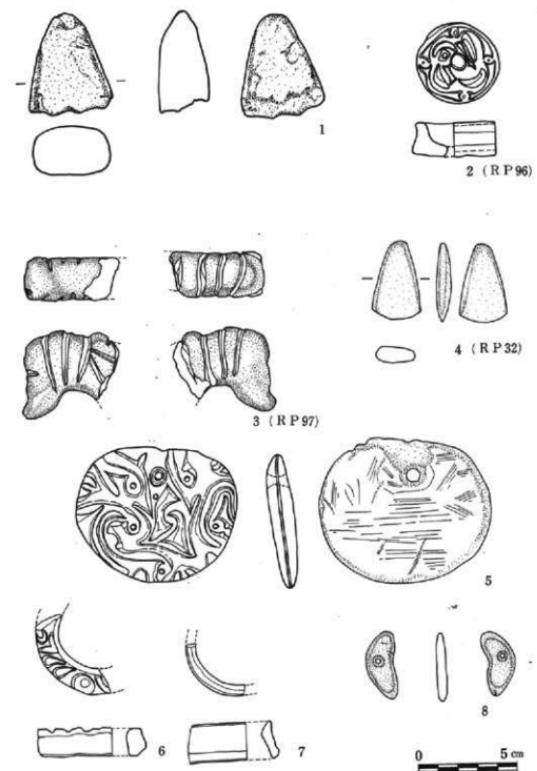
磨製石器としては磨石（第49図9）が、周溝より1点出土している。材質は花崗岩で、橢円形を呈する自然礫の両平頂面に磨面をもつもので、前述した分類によればC類として把握される。重量1440gである。

石製品として石刀（第11図7）が、覆土1層より出土している。前述したST 1・EP 5出土の石刀と同一個体で接合した。片刃でST 1出土の石刀の先端部にあたる。表面に横位の擦痕があり、裏面は背部、刀部付近に斜位の擦痕が走る。背部、刃部ともそりをもつ。



第29圖 4號住居跡出土土器

-56-



第30圖 4號住居跡・土壤出土遺物

-57-

### 土壌群 (第30~36回・図版31~37)

本遺跡において発見された土壌は14基である。15号土壌は覆土の状態から後世のものと判断されるので記述からは除外する。内訳は土壌が集中して発見されたII・12-N・O区で7基、14-L区で2基、ST 1と重複して2基、ST 4と重複して3基である。

#### 1号土壌 (SK 1)

13-0グリッド、ST 4の床面で確認した土壌で、ST 4の柱穴 (E P 1) およびST 3の周溝によって切られている。平面形は不整の楕円形を呈し、長径約90cm、短径約50cm、を測るが、下面は未掘のためその深さは不明である。覆土は明褐色微砂の單一層である。

土器は覆土1層から66片出土している (第32回図1~10・図版33)。21は器面全体が研磨されている浅鉢形土器で、口縁部内側がやや肥厚している。V群土器頃のものと思われる。3はⅣa類、5はⅤb類に属する。1・6は壺形土器、4・7~10は粗製の深鉢形土器である。これらの詳しい時期は不明であるが晩期のものと思われる。ST 1の時期は壺形土器を中心とするものと推定される。

石器は削片・鋸片・石核あわせて30点出土している。

#### 2号土壌 (SK 2)

14-Nグリッド、ST 4の床面で確認した土壌で、ST 4の柱穴 (E P 2) およびST 3の周溝によって一部切られている。平面形はほぼ円形で、直径約115cm、床面から壠底部まで25cmを測り、平担な壠底である。壁はほぼ垂直に壠底より立ち上がる。覆土は明褐色微砂の單一層で、炭化粒子を微量含んでいる。

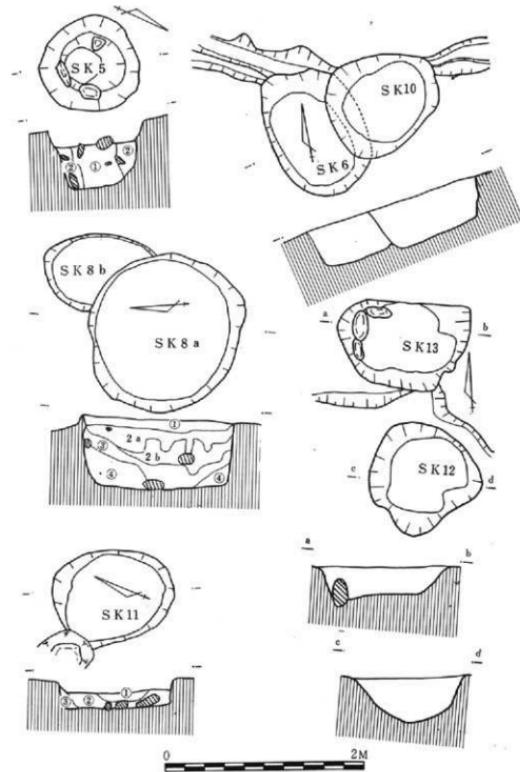
土器は覆土1層から16片出土している (第32回図11~14・図版33)。11はⅠa類、12・13はⅤb類、14はV群土器頃のものと思われる。このほか器面全体が研磨されたものおよび斜繩文をもつ粗製の深鉢形土器が出土している。断片的な資料であるが、SK 2の時期はV群土器を中心とするものと推定される。

石器は、削片・鋸片・石核あわせて15点出土している。

#### 3号土壌 (SK 3)

12-NグリッドでSK 9bとSK 10との間に検出された土壌で平面形がほぼ円形である。直径約120cm、を測り、壁はやや直立に立ち上がる。壠底は平担であるが、北側がやや凹んでいる。覆土は暗褐色微砂の單一層である。

土器は覆土1層から35片出土している (第32回図15~17・図版33)。15はⅡb類、16はⅣa類に属するものである。このほか器面全体が研磨された鉢ないし深鉢や、斜繩文を有する深鉢 (17)などの小片がある。断片的な資料であるが、SK 3の時期はⅣ群土器を中心とする



第31図 5・6・8・10~13土壤

ものと思われる。

石器は、F 1から剝片・碎片が7点、F 2から剝片・碎片・石核が21点出土している。

#### 4号土器（SK 4）（図版31）

12~13Mグリッドにあり ST 1の床面で確認した土器で、平面形は不整の円形を呈している。直径約115cmで、壁は西面ではゆるやかに、北東部ではほぼ垂直に立ち上がる。壇底は中央部が壁下より15cm程低くなりスリ鉢状を呈する。床面からの深さは約47cmである。覆土は1層で、暗褐色微砂層である。

土器は覆土1層から45片出土している（第32図18~24・図版33）。18はⅡ b類、19はⅥ a類23はⅠ a類、20・21はV群土器項に属するものである。このほか器面全体がよく研磨された浅鉢、細い斜縦文をもつ鉢、粗い斜縦文をもつ深鉢形土器（22・24）などがある。SK 4の時期はⅥ群土器を中心とするものと思われる。

石器は、剝片・碎片・石核があわせて25点出土している。

#### 5号土器（SK 5）（図版31）

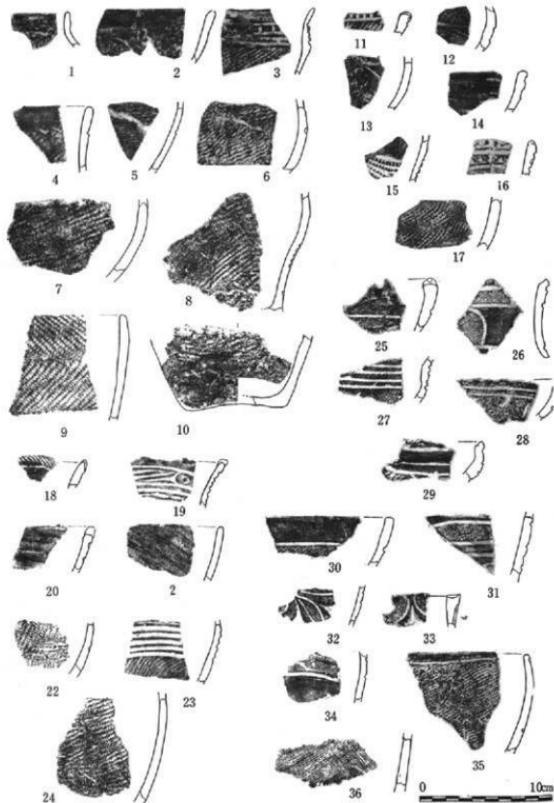
12~L・Mグリッドにあり、ST 1の床面から確認した土器である。平面形は円形で直径約1mである。壁はやや強い立ち上がりを示し、断面形は舟底状となる。床面から壇底までの深さは約91cmを測る。覆土は2層に分けられ、覆土1層は暗褐色微砂層で、木炭を若干含んでいる。覆土2層は木炭・赤色粒子を若干含む褐色微砂層で壇側に堆積する。

土器は覆土1層から105片出土している（図32図25~29・図版33）。25はV群、26はⅣ b類、27はⅣ a28・29はⅣ b類に属する。このほか比較的粗い斜縦文をもつ鉢ないし深鉢形土器の小片が多く出土している。SK 5の時期はⅣ群土器を中心とするものと思われる。

#### 6号・10号土器（SK 6・10）（図版31）

11Nグリッドにあり、ST 1の周溝と重複関係をもつ。SK 6は長径132cm、SK 10は長径118cmの共に構円形を示す。土層の堆積状態により、SK 6はSK 10・ST 1周溝に切かれていることがわかる。2つの土器とも立ち上がりは緩やかであり、SK 6の壇底は平坦でSK 10に切られている。深さはSK 10で45cm、SK 6で43cmである。覆土は共に1層でSK 6は暗褐色粘質微砂層でSK 10は多量の木炭・赤色粒子を含む暗褐色粘質砂層である。

SK 6は土器が523片土した（第33図・第34図1~11・図版34）。第34図1はⅠ a類、3はⅠ a類、4・5はⅡ a類、7・8はⅢ b類、2・10・11はⅥ a類に属する。第33図1・2とも覆土1層から出土し、1は5個の花弁状の大波状口縁をもち、頸部でしまる鉢形土器である。内側に肥厚した口唇部に連続刻目をもち、L<sup>1</sup><sub>4</sub>の細い原体を横・縦位に回転させた羽状縦文を施すⅠ a類の特徴をよく示す。2は平縁で頸部がややしまる小形の深鉢で口縁・頸部に窓状工具による刻目文、頸部に磨削縦文による5單位の弧線連続文、体部上半に5單位の入組



第32図 土器出土土器（1）

文を有する。貼瘤は頭部と体部の境にある刻目帯に2個1組で5単位施されている。施文手法からはⅣ群土器とV群土器の特徴が折衷したものであるが、貼瘤の位置や文様帶の幅等からV群土器に属すると考られる。SK6からはこのほかVc類や、口縁部内側が肥厚し器面全体が研磨された浅鉢、および深鉢形土器も出土している。SK6の時期はV群土器を中心とする頃と推定される。

SK10では覆土1層から土器片38片出土している（第35図1～9・図版35）。6はIc類、5はIVa類、3は縱に刻目のある貼瘤をもつV類、1・2・4はVa類、7～9は細い刷毛文をもつ仲間である。また器面全体が研磨された浅鉢、深鉢形土器も出土している。SK10の時期はVI群土器を中心とする頃と思われる。

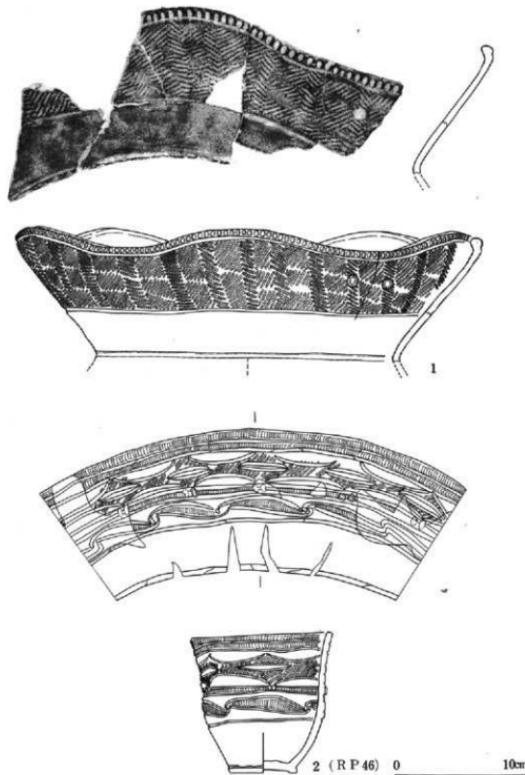
SK6からは、他に磨製石斧・磨石・円盤状石製品・耳栓・土偶が各1点出土している。第30図1は磨製石斧の基部のみの破片で、材質は流紋岩であり、形態は類として分類される。磨石（第48図1）は、重量640gで材質は花崗岩でe類として把握される。第36図4は径4.7cmの円盤状を呈する石製品で縁辺を敲打し整形して、平坦面は磨いてある。耳栓（第30図2）は丸形で、径4.1cm、表面は朱塗りされた形跡がある。土偶（第30図3）は、肩・腕部の半次度で覆土1層より出土し、表面は朱塗されている。SK10からは土製・石製品が出土していない。

またSK6の覆土2層より本遺跡で唯一のIIa類の石錐が出土し（第36図5）、b面突出部先端に光沢が認められる。覆土2層より刺片・碎片・石核があわせて129点出土している。SK10では、F2からIIb類の石錐が出土し（第36図8）、断面が三角形をなし、尖頂部は折損している。F1からは刺片・碎片が18点出土している。

#### 8a・8b号土壙（SK8a・8b）（第31図、図版31・32）

12-N・Oグリッド内で検出された土壙で、互いに重複関係にある。SK8aは径約1m 60cmの、円形を呈し、SK8bは長径1m 15cmの、横円形を呈す。SK8aの覆土は1層が、木炭を多く含む暗褐色微砂層、2層は木炭の粒子や赤色粒子を若干含んでいる暗褐色砂質微砂層、3層は赤色粒子や黄褐色ブロックをわずかに含む褐色砂質層、IV層は木炭や赤色粒子、地山のブロックを多く含む、V層は地山のブロックや、炭化粒子、赤色粒子を含む黒褐色微砂層である。深さは72cmを測り、構造は平坦である。また壁も垂直に立ち上がる。8bの覆土は1層で、炭化粒子や赤色粒子を多く含む褐色砂質土層である。壁はほぼ垂直で、底部も凸がない。深さは24cm、切り合い関係は、断面の観察により、8bが8aを切って作られている。

土器は覆土1層 106、2層 453、3層 67、4層 148の計774片が出土している。（第34図12・31・図版34）発掘段階でSK8aとSK8bの明確な地層区分ができるなかったので両者



第33図 6号土壙出土土器

の遺物を一括して述べる。12・16・17はI a類、13はI b類、14はI c類、18はII a類、28はII a類、21～26・29はIV a類、27はV b類、15・19・20・21はV c類、30はVI a類、31はVI b類に属する。このほか器面全体に直線的な刷毛目文ないし研磨が施されている粗製の深鉢形土器が総量の3分の2以上出土している。SK 8の出土土器はI～VI群土器まで多様であるが、覆土3・4層で主体を占めるのは、IV a類とV c類および前述の粗製深鉢形土器である。SK 8の時期はIV・V群土器を中心とする頃と把えておきたい。SK 8aはSK 8bを切って作られているが、両者の時期関係は不明である。

磨製石器、土製品関係は磨石2点・耳栓2点・土偶1点が出土している。磨石は、(図版37)では重量300g 覆土4層の出土でa類として分類され、縁辺に朱が付着している。(図版37)は重量470g c類として分類される。それぞれの材質は花崗岩である。耳栓(第36図)は、(2)では覆土4層より出土し推定径5cm程度である。(3)は推定径7cm程度で内外面共黒色処理を施し丁寧に整形している。土偶(第36図1)は肩・腕部の破片で表面は朱塗りされている。

打製石器は、土壙群の中では最も多くの出土量があり、その内訳は(表 )に示した。F<sub>4</sub>出土の石匙(第36図9)は二次加工面が片面全体におよび、刃部鋸ぐ他のVI a類とは製作技術が異なる。F<sub>4</sub>出土の石匙(第36図10)も唯一のIV e類で两侧線・先端ともプランティング様の調整がなされ、F<sub>4</sub>出土の石(12)はVI a類、F<sub>4</sub>出土の(11)はVI b類に含まれられる。これらの石器のうち、(9・10)は本遺跡の中でも特異な存在であり、他の遺構群出土のものとは年代差があると考えられる。

#### 9号土壙 (SK 9)

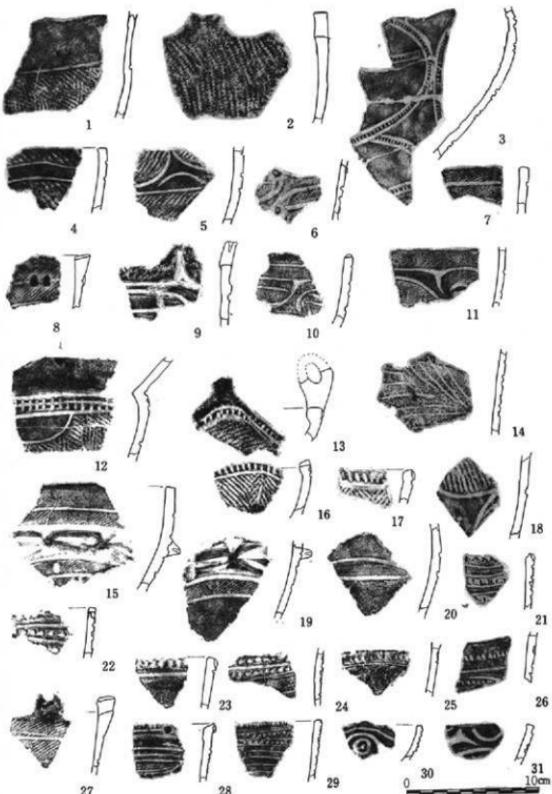
13-Nグリッド、ST 4の床面で確認した土壙である。形態は不整な楕円形を呈し、長径約1m 40cmを測る。據盤はほぼ垂直な立ち上がりを示すが、凹凸が激しい。底盤は平坦にしている。覆土は1層で、炭化粒子や赤色粒子を多く含み、やや粘性がある褐色砂質土層である。

土器は覆土1層から16片出土している(第32図30～36)。30・34はV c類、31～33はVI a類、35はVI群土器項に属するものである。このほか直線的な刷毛目文(36)や細い斜溝文をもつ深鉢形土器の片が出土している。限られた資料からではあるが、SK 9の時はVI群土器を中心とする頃と思われる。

F<sub>4</sub>からVI c類の両面加工の石器が出土している(第36図14)、上半が折損しており石匙の失敗品かも知れない。この他剥片・碎片が29点出土している。

#### 11号土壙 (SK 11) (第31図・図版32)

11-Nグリッドで検出された土壙で、西側をわずかに後後に掘り込まれている。形態は



第34図 土壙出土土器 (2)

やや円形を呈し、北側ではゆるやかな立ち上がりを示し、他は急な立ち上がりである。壇底は平坦で、深さは33cmを測る。覆土は3層あり、1層は炭黄褐色粘土層、2層は暗褐色微砂層で木炭の粒子が多量に含まれている。3層は明褐色微砂質砂層である。

土器は覆土1層から132片(第35図14~28・図版35)。覆土2層から12片(同17~21)出土している。14~21はI c類、15はII b類、25はII c類、16~17・20~24はVI a類、23~26はV b類、22はVI b類の橢形土器に属する。このほか器面全体が良好に研磨されている深鉢(14~19・27)や壺形土器および斜縞文の施されている深鉢形土器がみられる。深鉢形土器の口縁部は内側に肥厚しているものが多い。SK11の時期はIV群土器を中心とする頃と思われる。

石器はF<sub>1</sub>からF<sub>5</sub>類の石錐(第36図7)と剝片・碎片4点が出土している。F<sub>4</sub>には石器類は検出されなかった。

#### 12号土壙 (SK12) (第29図)

14~Lグリッドで検出された土壤で、形態は径約1m 13cm、不整の円形を呈している。立ち上りはやや垂直を示し、壇底は平坦である。深さは26cmを測り、覆土は1層の炭化粒子亦赤粒子を多量に含む黒褐色粘質砂層である。

土器は覆土1層から27片出土している(第35図10~13・図版35)。顯著な文様のある土器は認められない。細い刷毛目のある土器や器面体に斜縞文の施されている深鉢形土器がほとんどである。深鉢形土器は、口頭部がやや外反し頭部に結節回転縞文が施されている壺形土器(10~13)が多い。SK12の時期は明らかでないが、X~Ⅳ群土器頃であろう。

石器は剝片・碎片あわせて14点出土している。

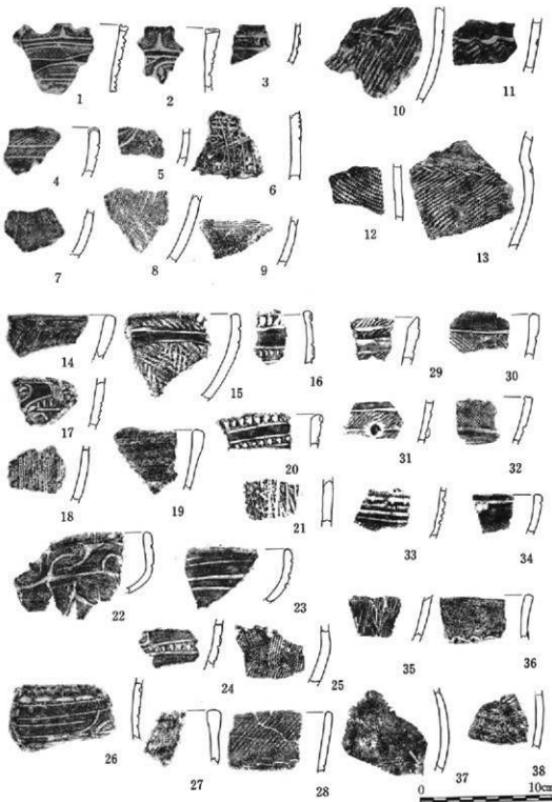
#### 13号土壙 (SK13) (第31図)

14~Lグリッド北側で発見された土壤で、一部分は未壠部分のK区にかかる。形態はほぼ円形を呈し、径約1.30cmを測る。北東部と南部はゆるやかな立ち上がりを示し、深さ54cmである。壇底部西側には、20~30cmの河原石を3個底部によせて検出している。中央部分は平坦で、覆土はSK12の2層と似ている。

土器は覆土1層から39片(第35図29~36・図版35)。覆土2層から48片(31~34)出土している。30はI b類、29・31・32・34はIII b類、33はIX a類に属する。35は捺糸文を施している。このほか器面全体に刷毛目文や比較的細い斜縞文、および研磨を施した深鉢形土器がある。SK13の時期は覆土2層の土器も考え合せ、III群土器を中心とする頃と思われる。

石器はF<sub>1</sub>から石錐の未成品(II x類)が出土している(第36図6)。圓縁は全体的にプランディング様の剥離が施されている。その他剝片・碎片が18点出土している。F<sub>2</sub>から碎片が1点出土している。

#### 14号土壙 (SK14)



第35図 土壙出土土器 (3)

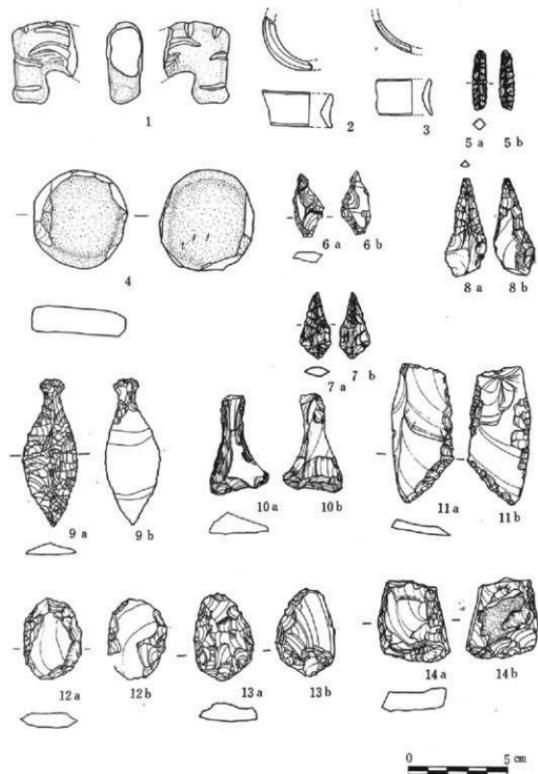
11-0グリッド西側で約3分の2程のプランを確認出来た。3分の1は10区にかかる。  
形態はほぼ円形で、径約115cmを有する。全体的にゆるやかな立ち上りを示し、深さ18cmである。  
壇底部は平坦で、覆土は粘土質の黒褐色粘土層である。

土器は覆土1層から5片出土したのみである（第35図37・38）。いずれも斜縞文が施された粗製の深鉢土器片で、時期は不明である。

遺構内出土土器分類表

表 4

分類	I	II	III	IV	V	VI	VII	VIII	IX	X	XI	XII	XIII
ST1													
ST2													
ST3													
ST4													
SK1													
SK2													
SK3					○	○							
SK4													
SK5													
SK6													
SK7													
SK8													
SK9													
SK10													
SK11													
SK12													
SK13					○								
SK14											?		



第36図 土壙出土石器・土製品

### 包含層出土遺物（第37～49図・図版38～46）

今回の精査区域の大部分が遺構の密集地域にあたっているが、なお遺構確認面の上層にあたる包含層・Ⅰ層および遺構の検出されなかつグリッドの地山までにいたる包含層・Ⅲ・Ⅳ層中の遺物も多く存在する。本節では包含層出土の遺物について、土器、土製品、石器、石製品の順に述べる。

#### 土 器（第37～42図、図版38・41）

包含層出土の土器は、Ⅰ層1187片、Ⅱ層4316片、Ⅲ層 1009片、Ⅳ層 198片の計6710片出土している。これらの4層は地層的には分離できるものの、土器の様相からは各土器群が混在したあり方を示す。ここでは包含層出土の土器をⅠ・Ⅱ層とⅢ・Ⅳ層の2つに分けて図示するが、各土器群の説明は一括して述べることにする。

##### 第Ⅰ群土器（第37図1～4・6・10・11・15～17）

1～3は肥厚した口縁部の外唇部に連続した刻目を有するものである。ゆるやかな波状口縁を呈する。体部にL「」の繩文原体を横位・縱位に回転させた羽状繩文をもつが、同じ繩文は4にもみられる。Ⅰa類と分類したものである。6・10・11はL「」ないしR「」の斜繩文が施されているもので、口唇部の刻目はあまりみられない。Ⅰb類に属する。4の頸部には次輪による格子目文がみられ、Ⅰa類とⅠc類が同一器形に用いられる例である。15～17は次輪による格子目文ないし横羽状文が施されているものでⅠc類である。

##### 第Ⅱ群土器（第37図8・9・13・35～41・43、第42図1～4）

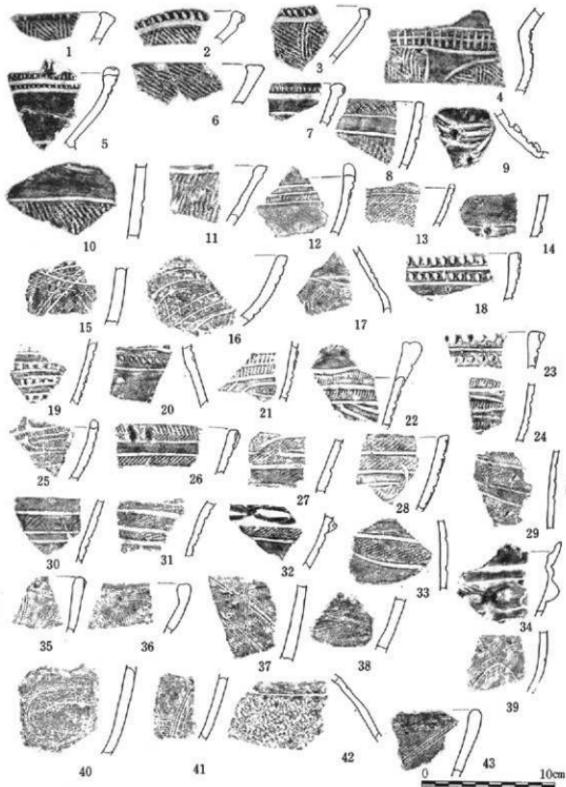
8・13は鉢ないし深鉢形土器の口縁部で、直線的な磨削文帯を有する。体部に初源的な入組文ないし弧線連結文が施されると考えられ、Ⅱa類に分類した。9は次輪による弧線連結文と貼瘤をもつ壺形土器で、Ⅱb類に属する。第37図35～41・43、第42図1～4は、曲線的な細い刷毛目文を器面全体に有するのでⅡc類である。器形は底部から全体まではほぼ直線的に立上る深鉢と、口縁部が外反し頸部でしまる深鉢との2種がある。

##### 第Ⅲ群土器（第37図14・第41図1）

包含層における本群土器の出土例は少なく、Ⅲa類が第41図1、Ⅲb類が第37図14にみられるだけである。SK 61好例（第34図5・8）がみられる。

##### 第Ⅳ群土器（第37図5・7・12・18～20・23・第41図3）

先端の細い棒状工具による刻目手法による入組文および弧線連結文を有するものである。比較的間隔をおいた刻目（第37図5・18・19・23、第41図3）をもつⅣa類と、間隔の狭い刻突による刻目（第37図7・20）をもつⅣb類とに分けられる。前者には円形の刻突文が多く、後者には綫長の刻突文が多い。文様は入組文が多いが、弧線連結文（第41-3）もみ



第37図 包含層出土土器（1）

られる。

#### 第V群土器 (第37図21・22・24~34、第41図2・4~16)

磨消繩ないし刻目手法による入組文のうち三叉状跡をもつものを主とする土器群である。第37図21・22・24~26、第41図2は、先端の角張る鎧状工具を器面に直角にあてて刻む刻目文でV<sub>a</sub>類に属する。刻目の間隔は密で、26のように貼瘤を伴なうものや、21・22のように磨消繩文手法と組み合さるものもある。文様は入組文が多いが、弧線連結文(24)もみられる。

第37図27~31、第41図4~16は、磨消繩文手法による入組文に三叉状跡を有するのでV<sub>b</sub>類である貼瘤が伴なうものが一般的であるが、包含層の資料には貼瘤がみられない。第41図4・5はV<sub>b</sub>類に横方向からの連続刺突を伴なうもので、V<sub>c</sub>類との中間形態である。第37図32~34は、磨消繩文による入組文に眼鏡状の突起を伴なうものでV<sub>c</sub>類に属する。文様の外側は良好に研磨されているものが多い。

#### 第VI群土器 (第38図1~9・11~12、第41図17~24)

三叉文をもつものを主とする土器群である。磨消繩文による入組文と組合わきて玉抱き三叉文を有するもの(第38図2・6、第41図17~19・21)およびそれらの一部と考えられる磨消手法による入組文(第38図1・7、第41図22)はVI<sub>a</sub>類に属する。磨消繩文を伴なわない沈線による三叉文を有するもの(第38図3~5・11、第41図20・21)はVI<sub>b</sub>類に属する。VI<sub>b</sub>類は器面全体に良好な研磨を有する。第38図8・9・12、第41図23~24は、器面全体がていねいに研磨されると一部に沈線を有するものであるが、この種の注口土器や鉢形土器はVI群土器に特有なものであり、VI<sub>b</sub>類に含ませて分類しておく。

#### 第VII群土器 (第38図10・13~17・19、第41図26~27)

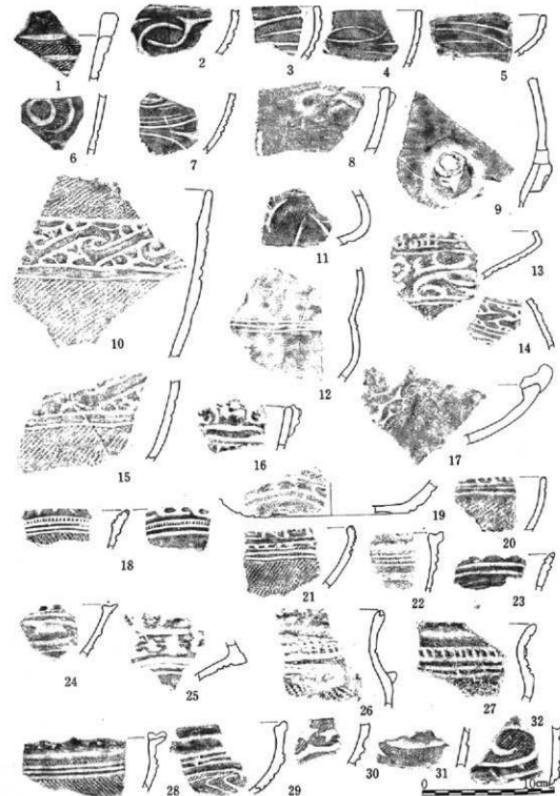
半衝状文をもつものを主とする土器群である。浮影手法による半衝状文を有するもの(第38図10・15、第41図26・27)はVII<sub>a</sub>類に属する。K字状文を有するもの(第38図14)やK字文等がのびて浮影的な磨消繩文をなすもの(第38図13・16・17・19)はVII<sub>b</sub>類に属する。VII群土器の器形には浅鉢・鉢・注口土器等があるが、その中でも器種の変化が多い。

#### 第VIII群土器 (第38図18~20~25・30~32、第41図28)

口唇部に半衝状文の影響を残す刻目文を有するもの(第38図18~20~22、第41図28)はVIII<sub>a</sub>類、K字状文等が縦横にのびて雲形文をなすもの(第38図23・24・30~32)はVIII<sub>b</sub>類に属する。口唇部に小二連突起なし小波状口縁が多用される。VIII群土器の器形には皿・浅鉢・鉢・注口土器(第38図25)などがある。

#### 第IX群土器 (第38図26~29、第41図31・33)

口頭部に3~5条の平行沈線文およびその一部に連結した刻目文を有するもの(第38図



第38図 包含層出土土器 (2)

26~28、第41図33)はⅣa類に属する。口唇部には小波状起ないし2連中突起を有する。体部に直線化した雲文を有するもの(第38図29、第41図31)はⅣb類に属する。第41図31は沈線によって文様が描かれているものである。Ⅳ群土器の器形には浅鉢・鉢・壺形土器(第41図31)などがある。

#### 第Ⅴ群土器(第39図1~17・28・29、第41図25・29・30・32)

包含層には磨消縦文をもつ工字文を有する土器Ⅴa類は発見されなかった。ST3の土器分折等を加味しながら、Ⅴa類に伴出する土器について述べる。頸部に眼鏡状の突窓を有するもの(第39図8・9、第41図29・32)はⅤb類に属する。第4図は口縁部が研磨され頸部に数条の平行沈線はないが口部に3条の削りがあり、Ⅴc類に含めた。Ⅴ群土器に属する器形には、Ⅴa類が欠けているものの鉢・甕・壺形土器などがある。

#### 第Ⅵ群土器(第39図18~20・23・26・27・30、第41図34、第42図24・25・27~29)

包含層には浮線による直線的な工字文を有するⅥa類は発見されなかった。2~3条の沈線による工字文を有するもの(第39図18・第41図34)はⅥb類に属する。平線で口縁部が長く研磨され、体部に結節転輪文ないし斜縦文を有するもの(第39図21~23・26・27・30)はⅥc類に属する。第39図20は口唇部に刻目をもち、長い口頸部が粗く研磨されている大形の鉢形土器でⅥ群土器に属する。器形は浅鉢・鉢・壺形土器などがある。

#### 第Ⅶ群土器(第39図19・24・25、第41図35・第42図26)

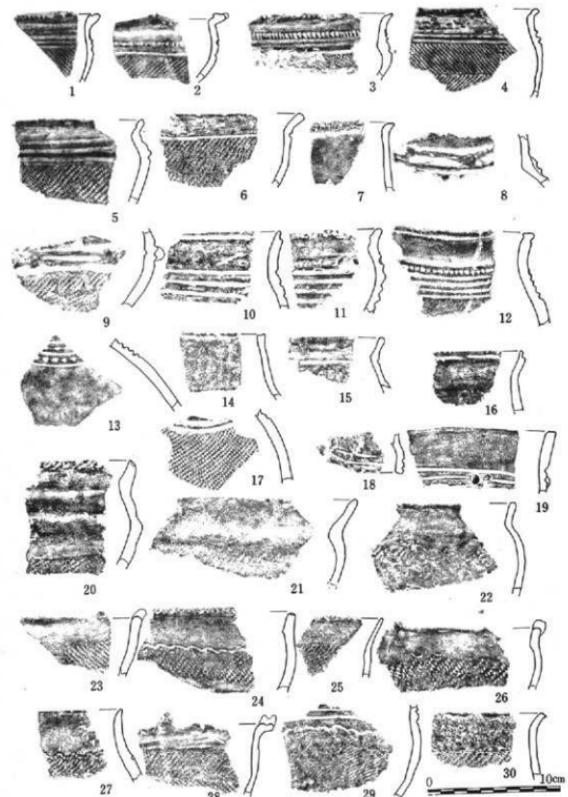
第39図19は折り手法による瘤をもつ変形工字文を有するものでⅦa類、第41図35は瘤をもたない「ギ」の字形の工字文でⅦb類に属する。第42図26は口唇部に撲状工具による押圧波状文、第39図24・25は口唇部に縞文を有する壺形土器でⅦc類に属する。Ⅶ群土器の器形には浅鉢・甕・壺形土器などがある。

#### その他の粗製土器(第40・42図)

最後に各類群への帰属が明らかでない粗製の鉢・深鉢(甕)・壺形土器について一括して述べる。

第40図1・2・20、第42図5~9は器面全体が研磨されている深鉢形土器である。第40図1・第42図5~6は口縁部が内側に肥厚していることからⅨないしⅩ群土器に伴出することが考えられるが、その他は他遺跡の例からみてⅣ~Ⅸ群土器までの幅をもつ。第40図3~5、第42図3は直線的な刷毛目文を有する深鉢形土器で、Ⅸ~Ⅹ群土器までの幅が考えられる。第40図6~8は撲糸文を有する深鉢形土器で、時期的な限定は不明である。

口縁部がほぼ直立し、器面全体に粗い斜縦文ないし羽状縦文を有する深鉢形土器はⅠ~Ⅹ群土器まで併出する。このうち第40図14の縱方向の羽状縦文をもつものはⅠ群土器に類似する。また第42図10~15にみられるような横方向に間隔をおいた斜縦文はⅠ~Ⅹ群土器



第39図 包含層出土土器(3)

によくみられる。第40図17~21は深鉢ないし壺形土器の底部である。17・18には木葉痕、20には一条文互式の網代痕が押捺されている。

#### 土製品

土製品としては、耳栓1点、土偶3点、土版1点が出土している。

#### 耳栓 (第43図2)

推定径約7cm程度、全体の5分の1ほどの破片である。胎土に砂粒が多く含み焼成はあるまい。頂端部は平坦で、表面は磨かれている。

#### 土 偶 (第43図3・5・8)

包含層より3点出土している。いずれもⅡ区の出土である。3は、脚部の破片でスタンプ状を呈する。表面に斜縦文を施し底面は平坦である。5は体部の破片で頸部、両脚部を欠損している。表面に幅2mm程の深い沈線をめぐらし背部は凸状に膨み、沈線で区画された部分に刺突を施している。8は肩部の破片である。表面に5条の平行沈線を施し、その沈線で区画された部分に1条の円形刺突が施されている。

#### 土 版 (第43図1)

表掲品である。形状は長方形を呈し断面は梢円形である。両端部に凸筋を持ち、文様は幅3mmほどの深い沈線で描かれている。胎土に砂粒が多く表面の剥離が著しい。

#### 石 器

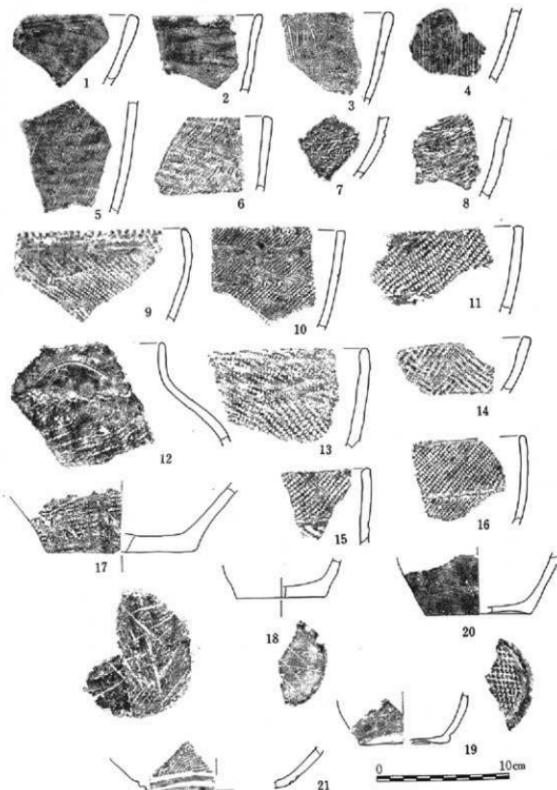
石器は総計184点出土している。打製石器は石劍20点、石錐15点、石匙15点、石籠20点、両面加工尖頭状石器14点、両面加工石器22点、スクレーパー33点加工痕ある剝片20点、使用痕ある剝片3点である。磨製石器は磨製石斧10点、磨石6点、四石4点、石鎌2点である。

#### 石 鎌 (第44図1~14)

1・2はⅠa類としたもので、1は本遺跡中最大の長さをもち、2は基部にアスファルトが付着している。3・4はⅠb類としたもので、3は丸味をもった先端部をもち、4は素材面を残し、基部が折損している。5・6はⅠc類としたもので両者ともぶ厚く仕上げられている。7・8はⅠd類とした小型の石鎌である。10は細身に仕上げられたⅠe類、11は剝片の周縁に二次加工を加えただけのものでⅠf類に含まれる。11・12は共に抉入の基部をもつⅠg類の無茎鎌である。13・14はⅠxと分類した石鎌の未成品である。

#### 石 锥 (第44図15~24)

15~17はⅡb類としたもので、形的には石鎌と類似するが剝突部断面が菱形を呈し、この部分に摩耗痕が認められる。18・19はⅡc類の石錐で18は基部、19は先端部が折損している。20・21はⅡd類としたもので柳葉形を呈し、先端部でも尖鋭さを感じさせない。20の先端部には摩耗痕と思われる光沢が認められる。22・23はⅡe類とした三角形状に突出する剝



第40図 包含層出土土器 (4)

突部をもつ石錐である。24はII f類としたもので、断面三角形の刺突部をもつ。

#### 石 錐 (第44図26~31)

26・27はIII a類としたもので、26はつまみ部のつくりだし以外目立った二次加工はみられない。27は周縁の表、裏面に二次加工が施されている。28は横長削片を素材とし、バルブ部をつまみに仕上げたIII b類の石器である。刃部は背の高い刺離となっている。裏面はつまみ部以外に二次加工はない。29~31はIII c類とした石匙である。3点とも刃部作出のための極だった二次加工はない。

#### 石 穴 (第45図)

1~2はIV a類で、先端部は表、裏両者からフルーティング状の刺離が施され、両刃の刃部となっている。両者とも周縁部加工が表、裏両面からなされており両面加工となっている。3~9は刃部から片刃となり、エンドスクレーパーに類似するIV b類の石鏝である。3b、4b、7a面9b面の刃部にみられる刺離面は使用による刃こぼれと思われる。12・14はIV c類で先端に刃部をなす刺離はない。10、11、13はIV d類で先端部は両面とも一次刺離面だけ構成される。

#### 両面加工頭状石器 (第46図1~4)

1、3は先端部が尖鉈という感じは受けないが、両側縁とも側面観がジグザグでスクレーパーとはならないことからV a類に分類した。2、4は未完成と考えられる。

#### 両面加工石器 (第46図5~8)

5~8はIV a類としたものである。5はバルブを除去したあと両側縁に両面から二次加工を施したものである。6はバルブ除去のあと両側縁に二次加工を施したもので、先端部に刃こぼれが認められ、この部分が刃部と思われる。7はa面左側縁が刃部となると思われる。8はバルブを除去したあと対峙する側縁に二次加工を施している。

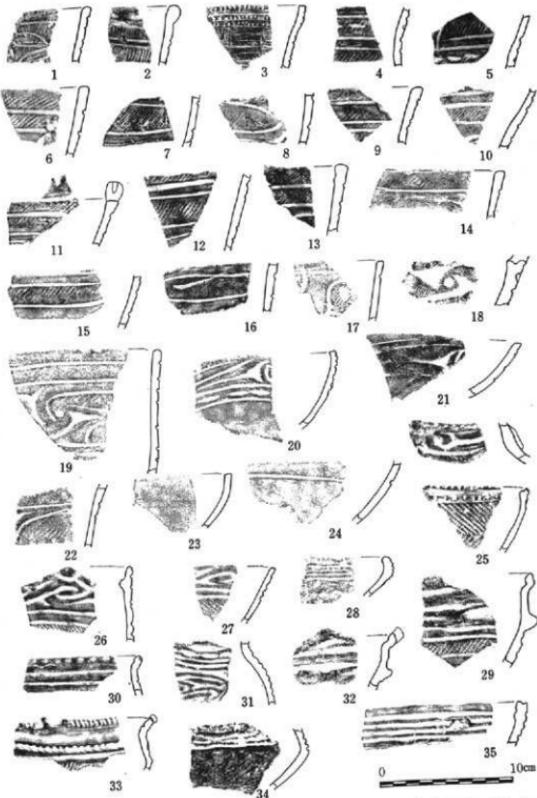
#### スクレーパー (第46図9~15)

9~11はV a類としたラウンドスクレーパーである。12はb面左下に背の高い二次加工による刃部をもつV b類のスクレーパーである。13はa面左側縁に連続した二次加工による刃部をもつV c類のスクレーパーである。14、15は抉りのある刃部をもつノッチドウスクレーパー (V e類) である。

以上の他にも図示できなかった多数の打製石器については巻末の計測表に示した。

#### 磨製石斧 (第47図1~3・5・6・8~11、第30図4)

包含層より11点出土している。大部分が破損品で完形は2点のみである。材質は花崗岩、粘板岩、硬質砂岩等である。前述したように形態的に4類に分類できる。a類 (1・2・6) は刃部、基部が平坦で定角形のものである。1・2は刃部の破片で全体の3分の1程



第41図 包含層出土土器 (5)

である。2に刃こぼれ状の使用痕がある。6は完形で、中央部で彫み縁辺の面取りはやや弱く、断面は若干丸みをもつ。3点ともⅡ区出土である。b類（3・5・8・9・10）としては5点がある。3はV区出土、他は全てⅡ区出土である。8は完形で刃部は丸みをもち定角形を呈する。傷が角張り面取りが強く断面は扁平である。他は全て基部の破片で全体の2分の1～3分の1のところで欠損している。3は縁辺の面取りが鋭く、5は断面中央で厚さを増し断面は梢円形を呈する。表面に浅い擦痕がある。c類としては11がある。基部の破片で縁辺に面取りがなく断面は長橢円形を呈する。d類（第4図）は小形の磨製石斧で全長3.9cm、刃長2.4cmで打貫は碧玉である。断面は角の張る定角形を呈し表面はていねいな研磨を行っている。

#### 磨石（第48図4・5、7～9、11）

前述したように形状、断面形、磨面の位置等により5類に分類した。材質は砂岩、安山岩、花崗岩等である。a類（5・8・9）は重量400～600g前後で、磨面を礫の平坦面と縁辺にもつものである。b類7は、重量755gで球状の安山岩の一端にのみ平坦な磨面をもつものである。c類は包含層より出土していない。d類4はⅢ区出土である。重量920gで大型である。頭部に敲打痕をもつ。e類として11がある。材質は花崗岩で梢円形を呈し磨面をその縁辺にもつものである。

#### 凹石（第48図3・10・13・第49図3）

梢円形を呈する自然礫の表面に凹みをもつもので、材質は砂岩、安山岩、凝灰岩等である。凹みは1個のもの（10）と数個を有するものがある。重量は300g前後のものが多く（第48図3）のみ490gと大型である。（第49図3）は頭部に敲打痕があり13は平坦面に磨面をもつ。磨石の再利用品である。

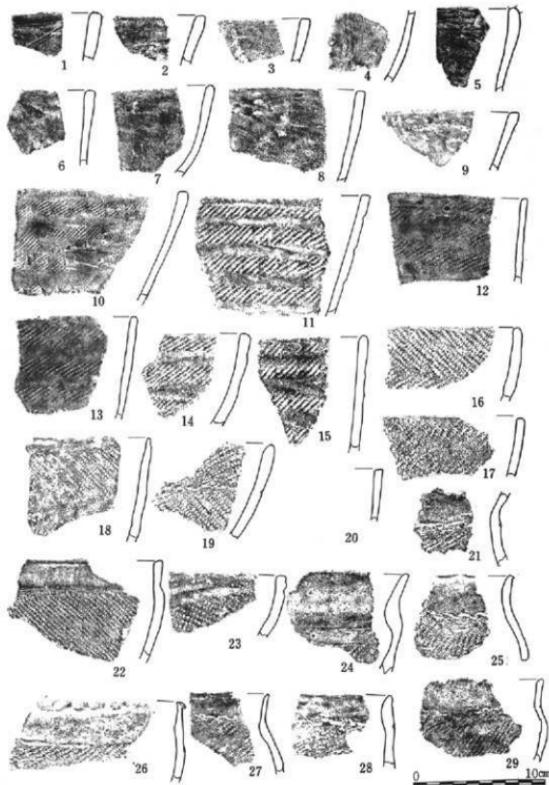
#### 石製品

石製品としては、石棒1点、石刀3点、独銛石1点、岩偶1点、岩版1点、石錐2点、石製身具1点、円整状石製品1点が出土している。

石棒（第47図7）はⅡ区Ⅰ層の出土である。径2.9cmを測り断面は梢円形を呈する。半欠損品で表面に軸位の微細な擦痕がありていねいな研磨を行なっている。

石刀（第47図4・12・13）は、3点出土している。（12）は先端部の破片である。材質は粘板岩で表面に斜位の擦痕がある。（4）は緑泥灰岩を使用し端部は平坦で断面は中央部で厚く梢円形を呈する。（13）は、材質は粘板岩である。縁辺の一端を面取りし、表面に横位の擦痕を残す。

独銛石（第47図14）はⅡ区Ⅱ層より出土したもので、刃部の一端のみの半欠損品である。刃部は扁平で、縁辺の一端を面取りし平坦である。



第42図 包含層出土器（6）

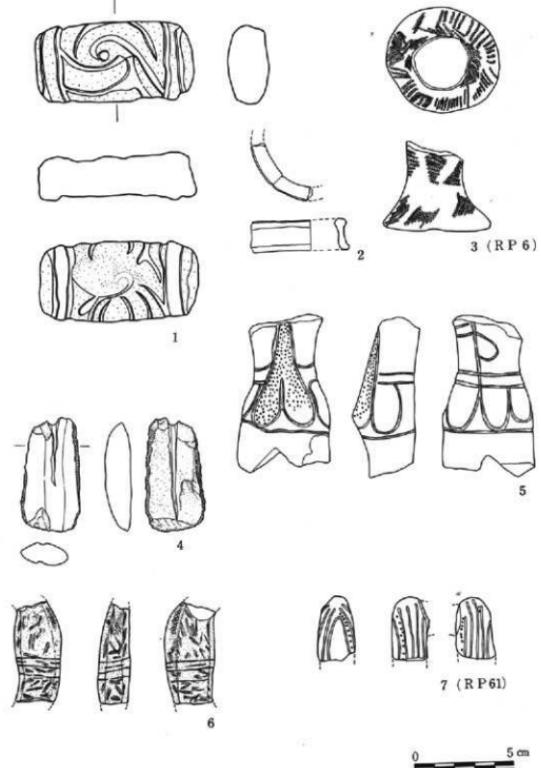
石偶（第43図6）は両端を欠損しており形態の全様は把握し得ないが、肩部の一端と推定され岩偶と思われる。形状は中央部でわずかに膨み、断面は角の張る楕円形を呈する。表面に二条の周回する線刻があり、その間に3本の断続する線刻をもつ。表面にこまい斜位の擦痕をもちていねいな研磨を行なっている。

岩版（第30図5）は、径8cmを測り楕円形を呈し、断面は扁平で縁辺に幅3mm程の深い凹刻がある。表面文様の凹部はていねいに研磨され朱塗りされた形跡がある。裏面は横位斜位の擦痕をもち、穿孔は両面より行なっている。II区の表探品である。

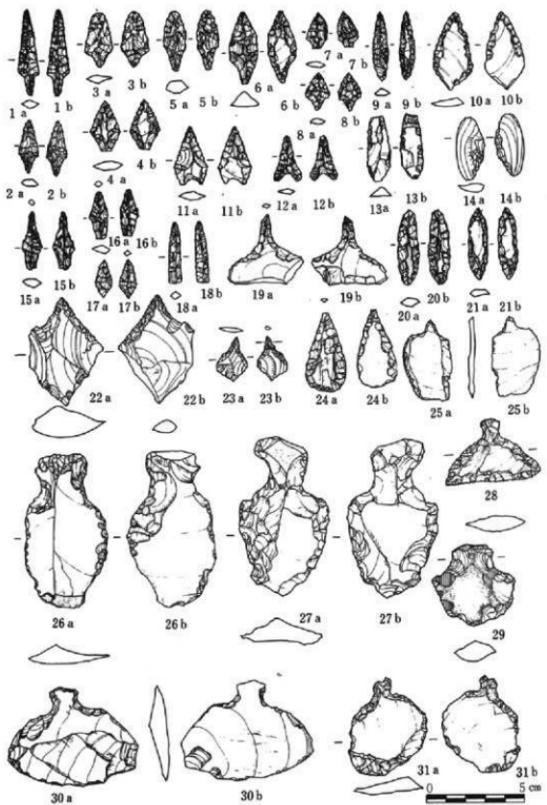
石錐（第11図3、第43図4）は2点、II区包含層より出土している。（3）は、楕円形を呈する礫で、長軸方向に凹刻をめぐらし重量70gである。表面に横位の擦痕を持つ。（4）は石刀の破片の再利用品である。材質は緑泥片岩で、長軸方向に凹刻をめぐらす。

石製装身具（第30図8）は勾玉状の石製品で、全長3.3cm、厚さ0.6cmを測り扁平な板状を呈し、縁辺は面取りされている。中央部に径4mm程の穿孔を有する。穿孔は両面より行なわれている。

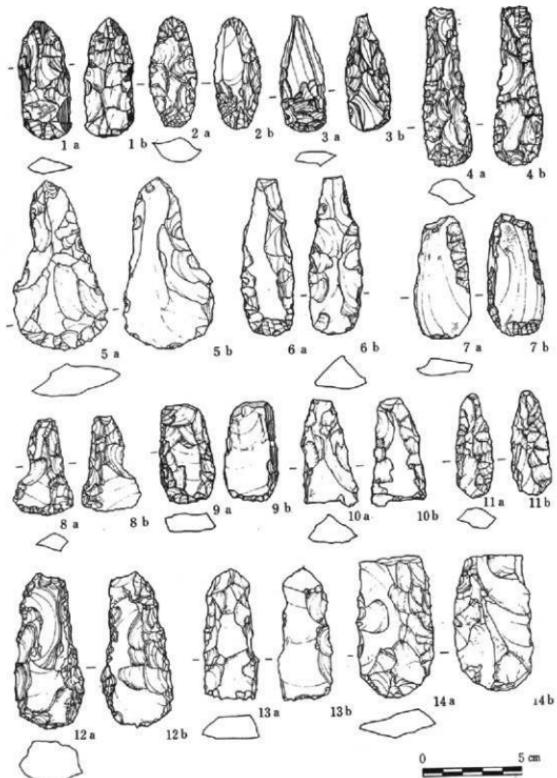
円盤状石製品（第48図12）は、II区より1点出土している。いずれも径6cm程の偏平な円盤状を呈し、縁辺を敲打していくて整形し平坦面を研磨している。



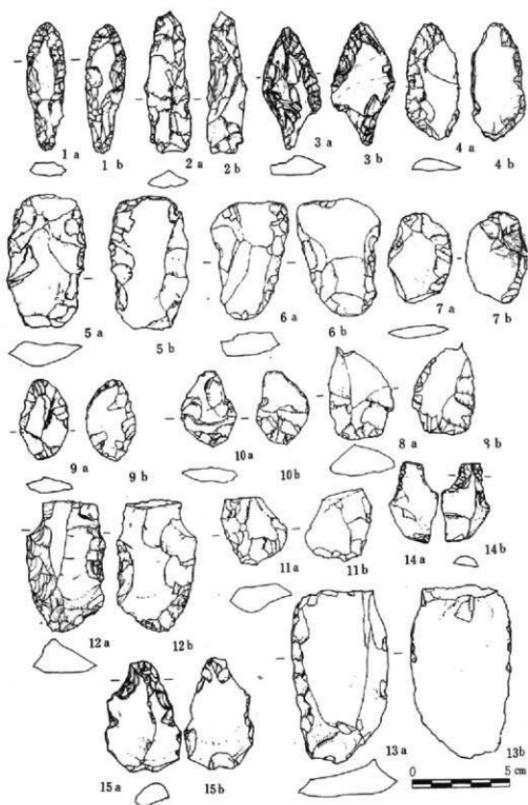
第43図 包含層出土土製品・石製品



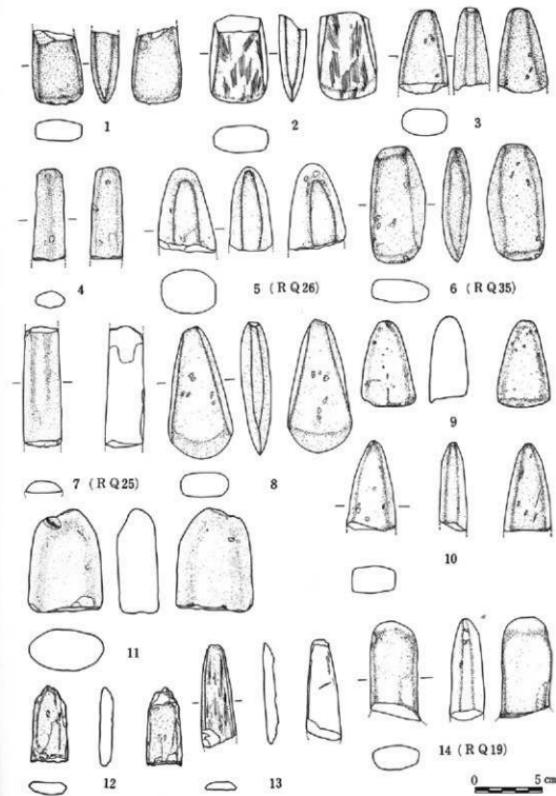
第44図 包含層出土石器 (1)



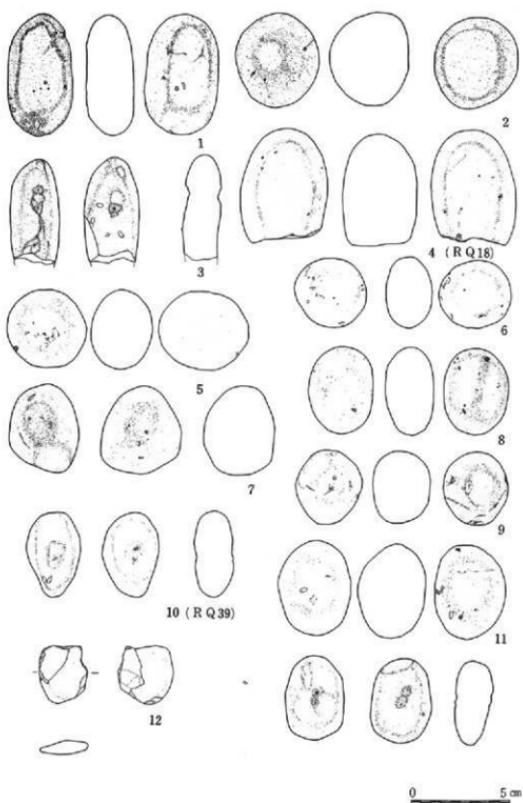
第45図 包含層出土石器 (2)



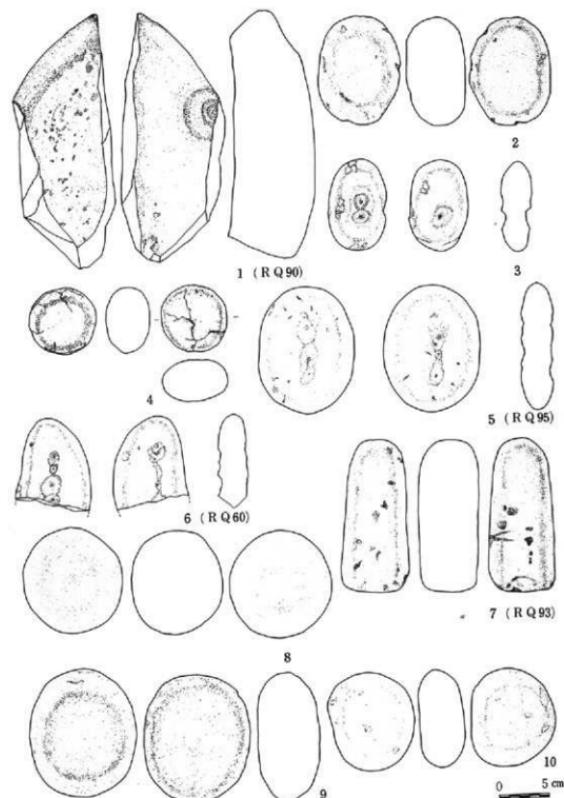
第46図 包含層出土石器 (3)



第47図 各区出土磨製石斧



第48図 各区出土石器 (1)



第49図 各区出土石器 (2)

## IV まとめ

### 出土遺物

#### a. 土器

本遺跡出土の土器は、以上のとおり12群29類に分類できた。各土器群は資料的に精査があり、必ずしもすべてを網羅しているとは言い難いが土器群における類別は、ほぼ同一土器型式における文様もしくは器形の組み合わせと考えられる。またI～IV群に分けられた土器群も土器型式の範囲内で大略この順序で変遷してきたものと把握される。これらの土器群について他遺跡との比較を行なってまとめておく。

〔第Ⅰ群土器〕 精査地域のはば全域・各層にわたって出土するが、とくにSK6・8の覆土内からまとまった資料が出土している。口部外側に刻目をもつ同じ繩文原体を横・縦位に回転させて羽状となしたIa類(第33図1)は、青森県十勝内遺跡・福島県寺脇貝塚など東北地方各地域に類例があり、繩文時代後期中葉、加曾利BII式併行期と把握されているが、加曾利BII式そのものというよりはむしろ東北地方南部で宝ヶ峰式ないし宮戸IIb式の名でよばれているものに属する。山形県内では遊佐町神矢遺跡の報告がある。羽状縞文が頭著でないIb類もIa類と同じ型式に入る。沈線による格子目文を有するIc類は、同一個体にIa類と共存して施文されている例(第34図12)からIa類と同じ型式に入るとみられるが、その一部はII～III群土器に伴う可能性もある。太い沈線による綾杉文(第34図14)は寺脇貝塚などに類例があり、宮戸IIb式には少なく加曾利BII式の主たるモチーフである。

〔第Ⅱ群土器〕 IIa・IIb類は資料的にきわめて少なく、SK6・8やST3の覆土下層などから出土している。磨消繩文手法による初歩的な入組文ないし弧線連結文をもつIIa類のうち、縦長の1個の貼瘤をもつものは関東地方の曾谷式に近いものであるが、IIa類の貼瘤は小円形のもの(第22図2・3)が多く、その内容は安孫子昭二氏論文(昭和44年)の貼瘤土器第1段階に類似する。

2条の平行沈線による貼瘤が多用された入組文ないし弧線連結文をもつIIb類のうち、みずばれ状の隆起縞文をもつものは(第37図9)は、東北南半で新地式と呼ばれているものである。IIa類とIIb類の量的な関係は不明である。曲線的な細い刷毛目文をもつIIc類は、I～III群に伴出するがとくにII群土器に多い。IIb類は県内で山形市大森遺跡に好例がある。

〔第Ⅲ群土器〕 IIIa類の磨消繩文手法を伴う入組文(第34図6)や弧線連結文(第20図2)は、東北南半では宮戸IIIa類ないし安孫子論文の第Ⅱ段階に比定できるものである。

IIIb類の貼瘤をもつ直線的な磨消繩文(第23図18)は、宮戸IIIa式にも類例があるが、関東地方の安行I式に近い様相を示す。その量的関係は不明である。IIIa・IIIb類はST3の覆土下層やSK6・13などから少數発見されている。県内では高畠町上平柳A遺跡から好資料が発見されている。

〔第Ⅳ群土器〕 IV群土器は先端の細い棒状工具の刻目による入組文ないし弧線連結文を特徴とするものである。刻目の間隔の比較的大きいIVa類(第18図12)と狭いIVb類(第18図13)に分れるが基本的には同じものである。縱や横に刻目をもつ貼瘤が多用されることから、東北南半では金剛寺式に属するものであるが、具体的な内容は安孫子論文の第Ⅲ段階により類似する。3号住居跡の覆土や土器群から多く出土している。

〔第V群土器〕 ほとんどの遺構内から出土しているが、とくにSK6・8からまとまった資料が出土している。先端の角張る鋸状工具による刻目文をもつVa類は磨消繩文手法による弧線連結文と組み合わさる例(第33図2)もあり、刻目文の中ではIV群土器に後続するものである。三叉状除刻を伴なう磨消手法の入組文Vb類(第34図10)は、東北地方南半のVb式に比定できる、Va類も含めた組合せは安孫子論文の貼瘤土器第Ⅳ段階により合致した内容を示す。

磨消繩文による入組文に眼鏡状の張瘤突起を伴なうものVa類(第34図15)は、東北地方よりは関東地方の安行II式に近似性をもつ。口縁部に連続した刻目をもつ貼瘤を有するもの(第23図7・8)も同様である。I～V群土器は繩文時代後期に位置付けられる。

〔第VI群土器〕 三叉文を主とする土器群で、ST1・3や土壙内から出土している。玉抱き三叉文などが磨消繩文とあわせて用いられるVIa類(第41図19)は繩文時代晚期大洞B式に相当するが、細分して大洞B<sub>1</sub>式とよばれている土器である。磨消繩文を伴なわない沈線のみによる三叉文等を有するVIb類は大洞B式のうち細分した場合のB<sub>1</sub>B式いづれにも存在するが、的場遺跡の場合は魚眼状文(第41図20)など古い様相をもつものが多い。

〔第VII群土器〕 羊齒状文を主とする土器群で、ST1・3・SK1や包含層中に少量認められる。羊齒伏文を有するVIIa類(第38図10)沈線によるK字文等を有するVIIb類(第38図14)二つとも大洞B-C式に比定される。

〔第VIII群土器〕 VIIa類のK字状文等が縦横にのびた磨消繩文手法による雲形文を主とする土器群で、1・3・4・SK1および包含層から少量化出土している。口縁部に2～3条の平行沈線と浮遊的な刻目をもつVIIa類(第38図21)、VIIa類の体部に雲形文をもつVIIb類(第38図24)両方とも大洞C<sub>1</sub>式に比定される。

〔第IX群土器〕 磨消繩文手法による直線化した雲形文を有する土器群で、ST1・3・4・SK5・13および包含層からやや多く出土している。3～5条の平行沈線文および

平行沈線の一部に連続した刻目を有するⅩa類(第38図28)・Ⅹa類の体部に直線的な雲形文(第38図29)ないし沈線文(第41図31)を有するものは大洞C式に比定される。後述のⅩ群土器は大洞C式のうち新しい様相をもつものであり、その意味でⅩ群土器は大洞C式の古い様相をもつものといえる。

[第Ⅹ群土器] 磨消繩文をもつ工字文を主とする土器群でST3・4からもっとも多く出土している。Ⅹa-Ⅹc類までを含めた土器の量は各土器群の中でもっとも多い。磨消繩文と伴う工字文を体部に有する鉢および壺形土器(第16図1)のⅩa類と口唇部に刻目をもち顎部に平行沈線が施されているⅩc類の一部は從来大洞C式として一括されてきた。しかし岩手県九年橋遺跡ではⅩ群土器を主としてⅩ、Ⅺ群土器を伴なう良好な資料が発見されており、ST3の時期とも関連してこの土器群は再検討を要する。

東北地方南半における大洞C式期のまとまった報告は少ないので、宮城県老ヶ崎遺跡では当該期の比較的良好な資料が出土している。老ヶ崎遺跡で主体を占めるのはⅩ群土器で、これにⅩ群土器が少量併存している。Ⅹ群土器の内でもⅩb類はみられず、Ⅹa・Ⅹc類のみである。また新潟県朝日遺跡では大洞C・C式期のまとまった遺物が出土しているが、Ⅹa類がみられず、Ⅹb・Ⅹc類が少量存在する。限られた資料であるが大洞C式期のうちⅩ群土器とⅩ群土器が分離できる可能性を示しているといえよう。ただⅩ群土器はまだ新しい土器型式の設定までは至らず、大洞C式期の中で比較的新しい様相をもったまとまりの段階である。

[第Ⅺ群土器] 浮縫手法による直線的な工字文を有する土器群で、出土量はⅩ群土器について多い。浮縫による直線的な工字文を体部に有するⅩa類(第7図4、第17図2)、浮縫による直線的な工字文ないし平行沈線文をb縫部に有するⅩb類(第7図5)は大洞A式に比定できる。口唇部が幅広く研磨され、体部に結節回転繩文を有する壺形土器Ⅺc類も大洞A式を中心にする。

[第Ⅻ群土器] 変形工字文を有するものを主とする土器群で、ST1と包含層中から少量出土している。抉り手法による2個の瘤を有する変形工字文の瘤a類(第9図22)、瘤を持たない変形工字文を有する瘤b類(第8図23)は大洞A'式に比定できる。第22図33はさらに時期が下る可能性を持つ。Ⅺc類とした口唇部に繩文を有する壺形土器も大洞A'式期に属する。

#### b. 土製品

本遺跡出土の土製品は耳柱、土鍤、土版、土偶等で多種にわたる。それぞれの個数は多くないが、耳柱の出土数が多く目立つ。

耳柱は、包含層出土のものと造構出土のものを一括して分析すると、形態的に6類に分

類することができる。a類(第7図8、第17図7、第36図2・3)は、所謂環状耳栓の類で今回の出土例中ではもっとも多い。断面は偏平で、うすく中央部で「く」の字状に弯曲するものである。黒色処理をしたものも散見され、表面は研磨されている。b類(第17図6、第7図6・7)は環状耳栓の類で、径7cm程の大形のものである。断面は、上縁が平坦で厚く、下縁で薄くなり、側縁でゆるく外側に弯曲する。表面は研磨されている。文様装飾をもたない素環のものと、この時期特有の玉抱き三叉文を上縁の平坦部に陰刻したものがある。四單位の文様が全周するものとみられる。c類(第17図7)は環状耳栓である。ゆるく外側に弯曲する上縁部に三叉文を施し、上縁内側に縁をもつものである。d類(第30図7、第43図2)は滑車形の耳栓である。上縁に平坦面をもたず断面は比較的薄い。側縁がゆるく外側に弯曲し、上・下縁が丸くふくれて縁をなすものである。e類(第30図6)は上・下縁とも平底で、上縁に文様が施されている。断面は厚く、側縁は直線的である。f類(第30図2)は唯一の完形品である。断面中央部で囬んだ滑車形を呈する耳栓で、表面の外縁に4個の玉抱き三叉文が陰刻されている。以上の6類のうちc類およびe類は晚期初頭大洞B式期のものと想定され、他は後期末葉-晚期初頭のものと想定される。

土偶は6点のみの出土で、すべて破片である。胴部1点の他は肩部・腕部である。そのため全体をうかがうに不充分である。偏平な断面のものが多く、肩部より直角的に短かい腕部がつくものが多い。資料的に断片的であるため、時期を明確にし難い。

#### C 石器

本遺跡出土の石器群は、繩文時代後期中葉から晚期までの長い期間にわたって製作・使用・遺棄・廃棄されたもので、特定時期の特定集団によって遺された一括遺物ではない。また、おののの所の所縄時期を明確にし得るものはほとんどなく、土器型式に見合う器種構成や、その量的割合、そして各器種の形態的変遷等については、明らかにできなかった。このように資料の限界性をもつ石器は、個々の内包的属性(機能・形態・製作技法等)の追及による分類をすめざるを得ない。本來、石器の分類はその内包的属性を総合的に把握したうえでなされるべきであるが、すでに研究者の間で共有されている慣例的な器種名をもつ石器と、その分類基準はきわめて不十分である。このような状況のなかで、それらの器種名を安易に適用することは問題であろう。しかし、本書では、出土石器の各器種の形態・製作技法・機能について個別に検討し再編することは、時間的制約により不可能であるため、それらの器種名を踏襲した。その結果、分類基準について精粗が生じたことも否めない。この点については今後の課題としたい。

打製石器338点を分類した結果と所見を以下に述べる。石錐(I)と石錐(II)は各類の間で、とくに量的に多いということはない。石錐(III)は各類とも他の繩文晩期の遺跡

と同様、縄文前期のものに比較してラフなつくりのものが多い。SK8出土のa類の石匙は、後期後半の土器を伴うとはいっても特異な印象をうける。元来、「つまみ」のある石器を総称して「石匙」と呼んでいるが、その「つまみ」以外の部位に注目すると、刃部の加工方法や刃角に大きな差異がある。刃角の急斜なもの（第44図28等）、刃角の緩斜なもの（第24図13・14等）、一次削離面の深い刃部をもつもの（第10図4第）などである。このようなあらかたは、a~e類に共通しており、機能はそれぞれ異なるものであることがうかがえる。したがってこれらは、将来的には、数器種に分割されるべきものと思われる。

石鉈（IV）は、先端部のつくりだしで、a~eの5類に分類した。このなかでもd類としたものは、「トランシェ様石器」（富樫：1976）や「直刃式片刃打製石斧」（鈴木：1977）としてすでに独立した器種として扱われているものに類似するが、やや小振りで刃角が小さい。本類に類似するものとして、北海道札幌遺跡（野村他：1974）の鉈状石器b類と分類されたものの一例（p89n&9）がある。縄文時代の後晩期には両面とも見事に仕上げられた石槍はなくなるが、ラフなつくりの尖頭状の石器がある。本遺跡も例外ではなく側面鏡がジグザグした尖頭状の石器（V）がある。この器種には折損する例が多い。

両面加工石器（VI）の中には、両面加工石器である石鉈等の製作段階のものもあると思われるが、それを分離することは困難である。したがって、他遺跡での類例の探索や、使用痕の観察等今後検討すべき点が多く、それらの作業を経た後で適切な名前をつける必要がある。このような意味で「両面加工石器」は仮称である。スクレーパー（Ⅶ）のなかでは、剥片の一部に挟りを入れるノッチドスクレーパーが多い。この種の石器は、量的には多いにもかかわらず、検討されることが少なかったものである。打製石斧（Ⅸ）、使用痕ある剥片（X）は、器種としての分類からははずされるべきものかもしれない。

磨製石斧は、SK6出土の1点以外はすべて包含層出土である。形態的にa~d類の4類に分類された。多くが破損品であるが、d類とした小形石斧は、機能的にもa~c類とは異質のもので、材質は碧玉で、斧としての使用痕らしき形跡は認められず、一種の装身具として用いられた可能性があると思われる。

磨石はa類~e類まで5類に分類された。特にa類、c類に著しい磨擦痕をもつものが多く凹石へ転用したものもある。とくにc類では、磨石一凹石といったパターンが認められる。また磨石の縁辺に朱の付着したものがおり、今回の調査では、1点のみの出土であったが、石皿の表面にも朱の付着が認められた、両者をセッティングして朱の粉末処理を行ったものと考えられる。

石冠は、ST3より3点出土している。形態的には3例とも異なるが、いずれも底面に

研磨、敲打痕を残している。とくに第27図8は、円錐に凹刻して握りを作り出しただけのもので、底面に著しい敲打痕が認められる。所謂広義の石冠の中で、本例は、利器としての磨石、石杵的な機能を有したものと推測される。

これら磨製石器の時期は包含層出土のものが多く不明である。ST3F4（床面近く）から出土した石冠3例はX群土器縄文時代晩期大洞C式の新しいほうの時期と考えられる。

#### d. 石製品

本調査で得られた石製品は、種類、量とも多く、石棒、石刀、独結石、岩偶、岩版、石製装身具、円盤状石製品などがある。石棒、石刀には異った地点より出土しているものが接合する例があり、石刀の多くは、片刃でそりを持ち、刃こぼれ状の使用痕は認められない。すべて破損品で石棒も小形化の傾向にある。即ち、実用の利器としてではなく、意図的に破損、投棄されたような形跡を示している。円盤状石製品は、包含層、土塗、住居跡などから出土しているが、1点はST3のE1U1内より出土している。縄文後晩期にみられる石製円盤と同一のものである。岩版は断面が偏平で、上縁は平坦である。上縁近くに両面穿孔による一孔を有するもので、文様的には三叉状の陰刻があり、その陰刻で画された凸部に浅い円形の陰刻を持つものである。時期的には、晩期初頭、大洞B式に含まれるものと考えられる。今回の調査で得られた石製品は、包含層出土のものが多く時期的に判然としないが、いずれも縄文後晩期~晩期に位置付けられるものと考えられる。

#### 遺構

約186m<sup>2</sup>の精査区域より検出された遺構は、竪穴式住居跡3棟、土塗14基である。今回の精査区域は、舌状に張り出した遺物包含層分布地域の南端に位置しており、遺跡の範囲は、さらに北側の農業構造改善事業区域外にも広がるものとみられる。

これらの遺構は、出土遺物により表4のような時期的なあり方を示す。I~Ⅳまでの土器群は、前節の分析により他遺跡との比較において、表5のようなあり方を示す。全体として時期的には、縄文時代後期中葉から晩期末葉までにわたる。

3棟の住居跡は、すべて縄文時代晩期後半に位置し、ST1は大洞A~A'式期、ST3は大洞C式期後半、ST4は大洞C式期に比定できる。土塗群は、縄文後期後半より晩期後半までの多様な時期幅をもつ。SK13は縄文後期安孫子論文の第Ⅱ段階、SK3・8・10は第Ⅱ段階、SK2・6は第Ⅲ段階、SK4・9・10は晩期大洞B式期、SK1は大洞C式期、SK5は大洞C式期頃に、それぞれ比定できる。したがって土塗群は、主として後期中葉より晩期初頭にかけて存在し、それを切って各住居跡が晩期後半に営まれたこと

がわかる。

住居跡の平面形は、ST1が長径8.2mの楕円形、ST3が最大径10.2mの略円形、ST4が径6.9mの円形を呈する。いづれも绳文時代の住居跡としては規模の大きい方である。周溝は、ST1が幅30~50cm・深さ（床面からの一以下略）18cm、ST3が幅35~53cm・深さ45~50cm、ST4が幅25~43cm・深さ20cmを測る。とくにST3の周溝は、南西部で2つに分れ、外側のものには竪柱穴とみられる小穴群がみとめられた。炉跡は、ST3のほぼ中央に長径1.6mの楕円形石組炉、北側に径60cmの円形石組炉が検出されている。ST1・4にはみとめられなかった。ST1東側で検出された焼土は、炉とは断定し難い。

3棟の住居跡は、重複関係・出土遺物の検討から、ST4→ST3→ST1の順に構築されたものとみられる。各々の時期は、大洞C式期→大洞C式期後半→大洞A-A'式期に比定される。

ST3北西部で検出した3基の埋設土器は、各々の土器に炭化物が付着していることから、煮沸用の土器を二次的に転用し、体部下半を欠いた上で數個くみ合わせたものとみられる。EU1・2は、ST3の床面を10cm程度掘りくぼめた振り方をもち、EU1は下半を河原石で囲っている。EU3は、周溝内にたてかけられている。検出状況からは、土器全體を土中に埋置したものではなく、大半を表面に露出させていたものとみられる。類例が少なく性格が明らかでないが、すべて体部下半を欠いていること、二~三重に土器をくみ合わせていることから、貯蔵用というよりは穀物庫の一種とみるほうが妥当である。

ST1・3・4出土遺物の中に2例の接合資料がみられた。ST1の西壁直下より出土した石棒（RQ69）とST3北壁寄りのF：出土の石棒（RQ48）、SK5内出土の石刀（RQ99）とST4北壁寄りF：出土の石刀（RQ53）である（第一図）。これらはST1やSK5に埋置する際に、完成品の一部を櫛してすでに崩壊されたST3・4の窪地の覆土1層に人為的に投棄したか、あるいは自然的に流れ込んだものと考えられる。遺構の時期関係もこれに矛盾しない。

的場遺跡は、寒河江川流域における绳文後・晚期の遺跡の中心的位置を占めてきている。

この時期の遺跡は、寒河江川流域では全部で4遺跡確認されている。川沿いの見晴らしのよい段丘上の舌状微高地に位地にするが、本遺跡の位は、遺跡の範囲・時期はごく小さく限られるようである。他の遺跡が未調査とはいえ、本遺跡の今回の調査における遺構・遺物のあり方は、それをうかがわせるに充分であろう。

本調査における最大の成果は、绳文晚期後半の3棟の住居跡を検出したことである。3棟とも一部分欠けているにしても明瞭に検出された。本県における绳文晚期の住居跡は、

遊佐町神矢田遺跡、羽黒町玉川遺跡、天童市矢口遺跡、高島町上平柳遺跡、小国町朝幕遺跡など（表7）で発見されている。が、いずれも壁や周溝が明瞭でなく、平地式住居として理解されているものもあるほどである。しかし、東北地方においても青森県大森勝山遺跡や青森県源平遺跡などのように、竪穴式住居跡の検出例もある。このことは、绳文時代晩期の各時期にわたって竪穴式住居跡が存在したことを裏付けている。この意味において本遺跡の3棟の住居跡は、貴重な資料を追加したことになる。

本調査で得られた埋設土器は、一種の麥稈墓とみられる。本県では、羽黒町玉川遺跡の20数個体の麥稈（大洞C式期）、天童市矢口遺跡の合口麥稈（大洞C式期）が発見されている。体部下半を欠いた例は、玉川遺跡の数個がみとめられている。これもまた数少ない資料に類例を加えたことになる。

土壤群、接合資料など、以上の他にも遺構・遺物の点で得られた成果は貴重であるが、本書で充分に表わせなかつた点も多い。それらについては今後の課題としたい。

## 約場遺跡の土器群別と土器型式編年対比表

表 5

約場遺跡	関東地方	東北一般	東 北 地 方 南 部			東北地方北部
			山内清男③	伊東信雄④	後藤勝彦⑤	
I群土器 加曾利BⅡ 加曾利BⅢ	岡本・戸沢① 安孫子昭二②	宝ヶ崎 新地	宮戸Ⅱb	十腰内Ⅲ		
			西ノ浜	十腰内Ⅳ		
II群土器 曾 谷	第Ⅰ段階		宮戸Ⅲa	十腰内Ⅴ		
			金剛寺	宮戸Ⅲb		
III群土器 安 行 I	第Ⅱ段階					
IV群土器 安 行 II	第Ⅲ段階					
V群土器 安 行 III	第Ⅳ段階					
VI群土器 安 行 IIIa		大洞B <sub>1</sub> 大洞B <sub>2</sub>		十腰内Ⅵ		
VII群土器 姥 山 台		大洞B-C <sub>1</sub> 大洞B-C <sub>2</sub>				
VIII群土器 安 行 IIIc		大洞C <sub>1</sub>				
IX群土器 杉 田 II		大洞 C <sub>2</sub>				
X群土器 千 綱		大洞 A <sub>1</sub>				
XI群土器 荒 海		大洞 A <sub>2</sub>				
XII群土器 荒 海		大洞 A <sub>1</sub>				

表5 文献註

- ① 岡本勇・戸沢光則「縄文時代の発展と地域性 関東」日本の考古学Ⅱ 昭和40年
- ② 安孫子昭二「東北地方における縄文後期段の土器様式」石器時代 9 昭和44年
- ③ 山内 清男「縄文土器」日本原始美術 昭和39年
- ④ 伊東 信雄「宮城県史Ⅰ 古代」宮城県 昭和31年
- ⑤ 後藤 勝彦「陸前宮戸島里浜貝塚出土の土器について」考古学雑誌48-1 昭和37年
- ⑥ 破堀 正彦「十腰内遺跡」岩木山所収 昭和43年

## 東北地方晩期住居跡発見例

表 6

住居跡名称・所在地	平面形	柱 <sup>柱</sup> 基盤	長径×短径	周溝	柱穴 <sup>柱穴</sup>	壁高 <sup>壁高</sup> (半周)	炉	住居跡所屬期
1 大森勝山(青森・弘前)	不整円形	豎穴	13.7×13.2m	有	(4) 56cm	有(中央)	大洞B～BC	
2 清常平57住(○・浪岡)	?	豎穴	?	無	96(?)	?	?	?
3 ○ 70住(○・○)	円	形	9.84×9.60	無	97	20	有(中央)	大洞B
4 ○ 71住(○・○)	円	形	6.84×6.80	無	50	16	?	?
5 ○ 74住(○・○)	?	豎穴	?	無	186	6	有(北寄)	大洞A
6 深 郡 田(○・中里)	円	形	6.0×5.3	有	38(5)	有	大洞B	
7 松 元(○・浪岡)	?	豎穴	?	無	?	?	有(?)	大洞C
8 どじの洞口住(着手・岩手)	円	形	豎穴	?	無	4(?)	?	有
9 ○ 2住(○・○)	?	豎穴	?	無	?	?	有	大洞B
10 ○ 3住(○・○)	円	形	豎穴	?	無	7(?)	?	有
11 ○ 4住(○・○)	?	豎穴	?	無	?	?	有	大洞C
12 二 月 田(宮城・七ヶ浜)	?	平地?	?	無	32(?)	?	有	大洞A(?)
13 の場1住(山形・西川)	楕	円	形	豎穴	8.5×4.4(?)	有	7	15
14 ○ 3住(○・○)	円	形	豎穴	10.2×9.4	有	20(6)	20	有(中央)
15 ○ 4住(○・○)	円	形	豎穴	6.9×6.9	有	3	4	?
16 王川1住(山形・羽黒)	楕	円	形(?)	平地?	5×4(?)	無	9(?)	?
17 ○ 2住(○・○)	円	形(?)	平地?	4.5	(?)	無	23(?)	?
18 矢口1住(○・天童)	隅丸方形(?)	?	平地?	4.5×4(?)	無	7(?)	?	有(北寄)
19 ○ 2住(○・○)	隅丸方形(?)	?	平地?	5×4(?)	無	8(?)	?	有(西寄)
20 ○ 3住(○・○)	隅丸方形(?)	?	平地?	5.2×4.3(?)	無	6(?)	?	有(北寄)
21 朝霧1住(○・小国)	楕	円	形(?)	平地?	5×4(?)	無	7(?)	?
22 ○ 2住(○・○)	楕	円	形(?)	平地?	4.5~5(?)	無	12(?)	?
23 神矢田住(○・遊佐)	円	形(?)	平地?	6~7(?)	無	17(?)	?	有(中央)
24 ○ 2住(○・○)	円	形(?)	平地?	6.2~7(?)	無	10(?)	?	有(西寄)
25 上平柳住(○・高島)	?	豎穴	?	?	?	?	?	?
26 ○ 2住(○・○)	?	豎穴	?	?	?	?	?	?
27 A棚系341住(○・米沢)	不整円形	豎穴	3.4×3.2	無	13(6)	20cm	無	大洞B

出土土器遺構・層分類表

表 7

		1 層	2 層	3 層	4 層層	周溝	床面	小計
S T I	覆土	953	256	93	156	138	138	1,596
	E P 1	58	—	—	—	—	—	58
	E P 2	56	—	—	—	—	—	56
	E P 2	9	—	—	—	—	—	9
S T 3	E P 4	16	1	—	—	—	—	17
	覆土	4,019	1,485	743	1,690	866	223	9,026
	E L	73	43	—	—	—	—	116
	E P 1	42	—	—	—	—	—	42
	E P 2	23	14	—	—	—	—	37
	E P 3	69	24	—	—	—	—	93
	E P 4	7	13	—	—	—	—	20
	E P 5	11	32	—	—	—	—	43
S T 4	E P 6	6	9	—	—	—	—	15
	E P 7	72	68	—	—	—	—	140
	E P 8	—	5	—	—	—	—	5
S T 4	覆土	819	109	—	—	114	—	1,042
	E P 1	16	—	—	—	—	—	16
	E P 2	5	—	—	—	—	—	5
		SK 1	66	—	—	—	—	66
		SK 2	16	—	—	—	—	16
		SK 3	35	—	—	—	—	35
		SK 4	45	—	—	—	—	45
		SK 5	105	—	—	—	—	105
		SK 6	67	456	—	—	—	523
		SK 8	106	453	67	148	—	774
		SK 9	16	—	—	—	—	16
		SK10	38	—	—	—	—	38
		SK11	132	12	0	—	—	144
		SK12	27	—	—	—	—	27
		SK13	39	48	—	—	—	87
		SK14	5	—	—	—	—	5
包 壈 層		1,187	4,316	1,009	198	—	—	6,710
合 計		8,138	7,344	1,912	2,036	1,136	361	20,927

出土土製品・石製品・磨製石器計測表(1)

60

出土土製品・石製品・唐製石器計測表(2)

出土土製品・石製品・唐製石器計測表(3)

石質圖									
番号		地名		出土位置		層位		遺物名	
		市町	区町	地名	標高(m)	全長(cm)	幅(cm)	厚(cm)	重量(g)
48	3	包含層	Ⅱ	四	石				490
48	10	包含層	Ⅱ	四	石				350
48	13	包含層	Ⅰ	四	石				260
49		包含層	Ⅱ	四	石				300
47	7	包含層	Ⅰ	石	棒	2.9			42
47	12	包含層	Ⅱ	石	刀	2.5	1.3		
47	12	包含層	Ⅱ	石	刀	2.8	1.0		
47	13	包含層	Ⅱ	石	劍	2.5			
47	14	包含層	Ⅱ	石	劍	2.6	2.5		
45	6	包含層	Ⅰ	粘	圓	2.5	1.8		
30	5	包含層	Ⅱ	粘	圓				
11	3	包含層	Ⅱ	石	圓	5.4	2.2		
43	4	包含層	Ⅱ	石	圓				
30	8	包含層	Ⅱ	石	圓	3.3	0.6		
48	12	包含層	Ⅱ	圓盤狀	圓盤狀	6.1	2.1		
43	2	包含層	Ⅱ	土	圓	約7.0			
43	5	包含層	Ⅰ	土	圓				
43	8	包含層	Ⅰ	土	圓				

出土石器一覽表(1)

一一

出土石器一覽表(2)

出土石器計測表(1)

表 13

編 號	出 處	地 區	出 土 層 位	石 器 名 稱	全 長 (mm)	基 底 寬 (mm)	基 底 厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
44-1			II-15T	II	I a	43.4	11.2	4.5	1.4	頁岩
24-1	41	ST3	F 1	I a	33.0	14.6	5.4	1.6	頁岩	
		II-10T	I	I a	(25.3)	(15.9)	(4.9)	(1.3)	頁岩	
44-2	不 明			I a	27.4	11.1	5.4	1.2	頁岩	アスファルト付着
44-4	12	V-5T	III	I b	(25.6)	(15.2)	(5.7)	(1.7)	鐵石英	
44-3		II-15T	I	I b	27.8	13.7	4.7	1.3	頁岩	
44-5	80	II-16R	I	I c	36.7	11.5	6.6	2.1	頁岩	
44-6	27	不 明		I e	36.6	15.1	8.5	3.6	頁岩	
9		II-20T	III	I d	23.7	10.8	4.3	0.8	頁岩	
44-8	4	II-15T	III	I d	19.3	12.2	4.5	0.7	頁岩	
44-7		II-20T	I	I d	18.6	10.7	3.6	0.7	頁岩	
56	不 明			I d	21.8	13.8	4.5	0.8	玉髓	
44-9	10	V-10T	II	I e	34.3	9.0	5.6	1.4	頁岩	
24-2		ST3	F 1	I e	39.8	11.0	4.8	1.6	頁岩	
36-7	36	SK11	F 2	I f	(33.4)	(15.3)	(5.8)	(2.2)	頁岩	
44-10	14	E-20T	III	I f	(36.8)	(20.8)	(4.1)	(3.0)	頁岩	
44-11	65	II-12N	III	I g	29.2	16.9	4.2	1.6	玉髓	
44-12	40	II-12O	III	I g	23.2	14.2	3.5	0.6	鐵石英	
44-13	82	II-16R	I	I x	35.3	12.7	4.8	2.1	頁岩	
		II-20T	III	I x	34.0	17.6	7.4	4.2	頁岩	
36-6	SX13	F 1	I x	31.7	14.7	6.3	2.7	頁岩		
44-14		II-10L	II	I x	31.2	15.3	5.6	1.6	頁岩	
10-8	ST4	F 1	I x	35.9	24.7	12.2	7.3	頁岩		
		II-14P	I	I x	28.6	15.2	8.6	3.2	瑪瑙	
		II-14O	II	I x	33.2	21.9	9.0	5.4	頁岩	
36-5	55	SX 6	F 2	II a	39.9	7.7	6.4	1.5	頁岩	
44-16	29	II-16O	II	II b	24.3	9.7	5.6	1.0	頁岩	
44-15	93	II-15S	V	II b	(26.8)	(10.7)	(5.8)	(1.3)	頁岩	
44-17	32	不 明		II b	18.9	8.6	5.1	0.7	頁岩	
10-9	64	ST4	F 1	II c	(21.0)	(27.7)	(7.9)	(2.4)	頁岩	
44-19	84	II-16Q	I	II c	35.0	39.5	10.3	8.3	頁岩	

出土石器計測表(2)

表 14

編 號	出 處	地 區	出 土 層 位	石 器 名 稱	全 長 (mm)	基 底 寬 (mm)	基 底 厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
44-18	15	II-20L	III	II c	(30.9)	(6.5)	(4.4)	(0.8)	頁岩	
		II-20T	I	II d	35.7	10.1	3.9	1.8	頁岩	
44-20	72	II-15P	II	II d	38.0	11.6	6.5	2.8	頁岩	
44-21		II-20T	I	II d	36.5	9.9	5.5	2.0	頁岩	
44-22		II-15T	I	II e	53.8	39.0	13.8	19.5	頁岩	
44-23		不 明		II e	21.8	16.0	5.8	1.0	頁岩	
36-8	31	K10	F 2	II f	49.5	21.7	8.8	6.3	頁岩	
		II-20T	I	II f	40.3	20.7	7.4	5.4	頁岩	
44-24		II-5M	III	II x	38.6	34.3	15.0	13.5	頁岩	
		II-10T	II	II x	23.1	19.6	6.5	2.2	頁岩	
25-7		ST 3	F 2	II x	34.7	19.9	5.2	3.4	頁岩	
10-1		ST 1	F 2	II x	48.0	50.4	19.3	22.5	頁岩	
44-26		II-15R	II	III a	78.3	41.7	17.3	41.8	頁岩	
24-13	51	ST 3	F 1	III a	95.0	38.4	10.5	34.2	頁岩	
10-2		ST 1	F 1	III a	61.1	26.8	7.0	9.4	頁岩	
24-15		ST 3	F 1	III a	68.4	27.3	8.4	10.8	頁岩	
10-10		ST 4	D	III a	78.1	32.4	11.7	23.1	頁岩	
		II-9M	I	III a	37.7	26.0	6.2	4.3	頁岩	
		II-17N	II	III a	34.8	14.9	5.3	2.4	頁岩	
44-27	75	II-15R	I	III a	80.1	40.0	12.4	41.5	頁岩	
44-25	3	II-15T	II	III a	39.9	24.5	3.4	3.2	頁岩	
36-9		SK 8	F 2	III a	73.6	27.5	7.4	12.4	頁岩	
		V-5O	II	III b	30.6	60.3	10.1	13.0	頁岩	
44-28		II-14O	II	III b	32.2	47.4	7.6	8.2	頁岩	
24-14	66	ST 3	F 1	III b	39.4	58.6	7.7	12.3	頁岩	
83		II-16R	I	III b	33.7	34.0	10.0	8.4	頁岩	
24-12		ST3 EP1	F 1	III c	55.4	63.8	10.0	25.8	頁岩	
		II-10T	I	III c	47.8	43.1	6.0	9.8	頁岩	
44-30	73	II-14P	II	III c	51.5	66.7	10.9	28.1	頁岩	
		II-20T	I	III c	45.8	52.7	9.8	17.3	頁岩	

出土石器計測表(3)

表 15

標 記 番 号	台 西 番 号	出土地區	出土位 置	石器名稱	全 (mm)	長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 (g)	石 質	備 考
	33	II-12M	II	IV e	45.2	58.4	10.6	24.3	玉	鈎	
10-14	43	S T 3	F 1	IV e	50.3	70.1	8.5	17.8	頁	岩	
	77	不 明		IV e	42.7	52.6	8.0	15.0	頁	岩	
44-29		II-17M	II	IV e	41.0	41.8	11.3	15.5	頁	岩	
	68	II-12M	II	IV x	73.2	43.3	9.8	32.4	頁	岩	
45-2	13	II-20T	III	IV a	55.7	23.6	11.4	16.0	頁	岩	
45-1		II-17S	II	IV a	60.0	24.1	14.9	20.8	頁	岩	
10-3	S T 1	F 1	IV a	72.0	31.7	14.4	30.5	頁	岩		
25-2	S T 3	F 3	IV a	85.9	26.2	15.8	30.4	頁	岩		
24-4	47	S T 3	F 1	IV a	77.6	27.6	13.7	28.2	頁	岩	
25-11		S T 3	D	IV a	80.3	26.0	16.7	32.6	頁	岩	
45-9	17	II-10K	I	IV b	50.1	28.0	10.8	20.8	頁	岩	
45-4	7	II-20T	III	IV b	80.3	24.8	14.9	28.4	頁	岩	
45-6	30	II-12M	II	IV b	70.8	26.9	15.7	31.2	頁	岩	
45-3	16	II-20L	III	IV b	59.7	23.4	11.1	15.0	頁	岩	
45-7		II-11L	II	IV b	61.3	28.4	8.7	18.3	頁	岩	
25-1	S T 3	F 23	IV b	46.7	25.3	12.6	15.2	頁	岩		
		II-14S	II	IV b	58.5	29.9	10.7	18.1	頁	岩	
45-8		II-15O	II	IV b	48.2	28.5	11.5	11.7	頁	岩	
45-5	不 明			IV b	87.8	50.0	15.8	53.0	頁	岩	
45-14		II-9L	I	IV e	(70.0)	(39.2)	(20.0)	(48.1)	頁	岩	
24-3	S T 3	F 1	IV e	68.0	48.0	15.1	42.2	頁	岩		
24-5	S T 3	F 1	IV e	66.5	40.0	16.4	37.0	頁	岩		
45-12	2	II-15T	II	IV e	77.9	35.3	20.7	55.4	頁	岩	
	S T 1	F 1	IV e	48.3	20.5	10.1	16.5	頁	岩		
45-11		II-15S	II	IV d	52.0	29.5	10.4	9.0	頁	岩	
45-10		II-11O	III	IV d	53.4	27.9	14.4	18.7	頁	岩	
45-13		II-12N	II	IV d	66.9	28.1	16.8	27.8	頁	岩	
10-11	S T 4	F 1	IV d	68.0	38.4	16.9	30.3	頁	岩		
		II-15O	II	IV d	61.7	27.1	12.8	19.8	頁	岩	
		II-13L	II	IV d	48.8	19.5	11.8	10.6	頁	岩	

出土石器計測表(4)

表 16

標 記 番 号	台 西 番 号	出土地區	出土位 置	石器名稱	全 (mm)	長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 (g)	石 質	備 考
36-10		S K 8	F 4	IV e	49.4	29.4	11.5	12.0	頁	岩	
		V-5O	III	IV x	55.0	25.8	12.5	20.2	頁	岩	
		II-15P	II	IV x	68.0	32.6	15.1	24.6	頁	岩	
24-6		S T 3 EP3	F 1	V a	54.1	29.0	8.7	14.4	頁	岩	
46-3	1	II-5M	II	V a	62.2	30.9	11.3	17.6	頁	岩	
		II-17O	II	V a	56.1	23.7	9.3	13.8	頁	岩	
46-1		II-20T	I	V a	64.3	20.8	10.7	13.5	頁	岩	
		II-5T	I	V a	65.6	30.2	19.1	21.5	頁	岩	
		S T 1	F 1	V b	66.1	32.2	8.6	16.0	頁	岩	
		S T 1	F 1	V b	60.3	47.5	15.4	33.1	頁	岩	
		S T 3	F 1	V b	55.5	39.2	12.4	20.8	頁	岩	
46-4		II-13L	II	V x	60.2	28.0	7.3	13.1	頁	岩	
24-7		S T 3	F 1	V x	(32.5)	(23.3)	(7.7)	(4.8)	頁	岩	
25-4		S T 3	F 23	V x	(32.8)	(21.7)	(6.2)	(4.3)	頁	岩	
25-3		S T 3	F 23	V x	66.4	28.3	11.8	19.9	頁	岩	
46-2		II-20T	I	V x	71.6	23.5	11.4	16.0	頁	岩	
		V-10J	II	V x	48.5	26.1	13.9	17.4	頁	岩	
		II-14L	III	V x	(24.4)	(23.5)	(7.7)	(4.1)	頁	岩	
		II-14L	III	V x	(29.1)	(27.0)	(9.8)	(9.8)	頁	岩	
		II-13O	II	V x	(35.4)	(22.9)	(6.1)	(4.1)	頁	岩	
		II-15Q	II	V x	67.4	24.4	15.0	20.6	頁	岩	
		S T 3	F 23	V x	50.2	21.3	15.7	14.7	頁	岩	
		II-10K	I	V x	(38.6)	(31.2)	(18.0)	(18.6)	頁	岩	
		S T 3	F 3	V x	36.3	22.3	7.8	5.6	頁	岩	
		II-12N	I	V x	(39.1)	(23.1)	(7.6)	(5.3)	頁	岩	
		S T 3	F 1	V x	(58.5)	(52.4)	(20.0)	(46.6)	頁	岩	
46-6		II-13O	I	V a	62.6	44.2	12.1	32.7	頁	岩	
		II-11O	II	V a	67.5	40.2	13.3	37.1	頁	岩	
46-5		II-15O	II	V a	56.6	41.0	16.3	29.0	頁	岩	
45-8		II-14O	I	V a	47.0	34.1	15.3	18.5	頁	岩	

出土石器計測表(5)

表 17

所 在 地 名 称	石器 種類	出土地區	山 手 號	石器名稱	全 長 (mm)	始大體 (mm)	始大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
		S T 1	F 1	V I a	52.4	31.2	13.7	19.0	頁 岩	
46 - 7	II-15T	I	V I a	45.3	34.0	7.9	10.7	頁 岩		
36 - 13	S K 13	F 1	V I a	43.8	29.9	10.5	11.3	頁 岩		
36 - 12	S K 8	F 2	V I a	40.5	29.3	8.0	10.7	頁 岩		
	II-14L	III	V I a	(53.8) (29.6)	(8.3)	13.1	頁 岩			
	II-12O	II	V I a	43.0	28.7	8.9	9.9	頁 岩		
10 - 5	S T 1	F 1	V I a	49.2	35.7	13.5	25.1	頁 岩		
	II-13L	II	V I a	45.4	34.0	7.9	10.9	頁 岩		
	S T 1	F 1	V I a	65.1	46.4	19.8	48.7	頁 岩		
	II-16R	I	V I a	50.8	41.7	15.7	33.2	頁 岩		
24 - 8	S T 3	F 1	V I a	58.6	34.0	8.8	16.4	頁 岩		
24 - 9	S T 3	F 1	V I a	54.6	33.7	9.0	13.8	頁 岩	アスハマルト付着	
	S T 3	F 1	V I a	36.0	23.5	10.2	8.7	頁 岩		
	II-16M	I	V I a	39.2	29.2	9.0	11.8	頁 岩		
	S T 3	F 2B	V I a	(37.7) (27.9)	10.2	8.5	頁 岩			
	II-10M	I	V I b	68.6	42.5	22.0	66.0	頁 岩		
	II-16P	I	V I b	48.0	36.0	9.5	14.7	頁 岩		
	II-15F	I	V I b	72.4	58.1	21.3	69.9	頁 岩		
	III-5K	II	V I b	78.0	59.4	19.1	84.4	頁 岩		
	II-20L	II	V I b	86.0	64.2	16.3	61.3	頁 岩		
	II-15L	I	V I b	86.7	53.8	17.7	88.0	頁 岩		
	S T 1	F 1	V I b	77.3	42.6	21.7	67.9	頁 岩		
	II-17R	II	V I b	64.8	53.4	20.4	71.3	頁 岩		
	II-13L	II	V I b	62.3	43.4	15.6	48.4	頁 岩		
26 - 7	S T 3	F 2B	V I b	71.4	44.5	11.1	32.3	頁 岩		
	II-14O	I	V I b	65.4	31.4	16.8	37.6	頁 岩		
	S T 3 EP9	F 1	V I b	50.0	45.2	17.1	34.7	頁 岩		
	S T 3	F 3	V I b	48.6	44.8	20.2	44.7	頁 岩		
	S T 1	F 1	V I b	39.9	40.3	15.1	24.3	頁 岩		
	S T 3	F 1	V I b	46.9	42.4	17.8	27.0	頁 岩		

出土石器計測表(6)

表 18

所 在 地 名 称	石器 種類	出土地區	山 手 號	石器名稱	全 長 (mm)	始大體 (mm)	始大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
	II-12O	II	V I b	56.4	24.7	11.6	13.3	頁 岩		
	S T 3	F 1	V I c	50.3	26.9	11.8	12.6	頁 岩		
36 - 14	S K 9	F 1	V I c	39.7	34.1	12.8	25.3	頁 岩		
	V-15O	IV	V I c	50.1	49.7	15.9	57.0	頁 岩		
	S T 3	F 1	V I c	48.3	51.0	16.5	50.4	頁 岩		
	S T 1	F 1	V I c	61.7	31.2	25.0	39.9	頁 岩		
	S T 3	F 1	V I c	76.4	49.7	15.4	46.8	頁 岩		
	S T 4	F 1	V I c	38.1	35.8	12.4	19.6	頁 岩		
	S T 3	F 1	V I c	45.4	25.5	18.0	10.1	頁 岩		
	S T 3	F 1	V I c	34.9	31.0	12.4	14.0	頁 岩		
	S T 3	D	V I a	39.0	37.1	9.0	12.8	頁 岩		
10 - 6	S T 1 EP1	F 1	V I a	31.9	24.4	17.9	9.5	玉 細		
24 - 10	S T 3	F 1	V I a	46.2	34.1	13.4	22.8	頁 岩		
10 - 12	S T 4	F 1	V I a	26.2	30.2	6.3	5.1	頁 岩		
46 - 10	II-14R	I	V I a	37.8	31.5	6.8	6.7	頁 岩		
	S T 1	F 1	V I a	30.0	31.2	10.0	10.4	頁 岩		
46 - 11	IV-5T	II	V I a	34.2	36.5	11.1	13.8	頁 岩		
46 - 9	II-20T	I	V I a	39.5	25.0	7.3	7.0	頁 岩		
	S T 1	F 1	V I b	64.6	94.8	19.0	94.4	頁 岩		
	II-9M	II	V I b	65.8	40.3	19.2	54.6	頁 岩		
	S T 3	F 2B	V I b	44.2	75.0	18.7	56.2	頁 岩		
25 - 5	S T 3	F 2B	V I b	82.0	40.5	15.4	38.6	頁 岩		
25 - 6	S T 3	F 3	V I b	23.0	49.8	18.7	19.0	頁 岩		
10 - 13	S T 4	F 1	V I b	58.3	20.0	10.0	13.4	頁 岩		
	S T 1	F 1	V I b	54.2	25.0	12.8	18.8	頁 岩		
	S T 3	Y	V I b	50.2	47.8	15.4	41.7	頁 岩		
25 - 8	S T 3	F 1	V I b	56.6	47.4	16.0	47.1	頁 岩		
	II-14L	II	V I c	123.6	90.2	31.2	215.0	頁 岩		
	II-13R	I	V I c	98.6	69.6	25.0	182.2	頁 岩		
46 - 13	II-12L	II	V I c	87.8	51.0	15.0	78.6	頁 岩		

出土石器計測表(7)

表 19

排 序	石器 番号	出土地区	出土 層位	石器名稱	全 長 (mm)	最 大 幅 (mm)	最 大 厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
	20	S T 3	F2.3	■ e	78.1	73.4	18.6	99.3	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	101.0	63.8	18.5	88.0	頁岩	
		II-13N	II	■ e	98.4	43.3	20.0	67.4	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	66.2	51.8	16.4	54.0	頁岩	
		II-10T	I	■ e	61.8	40.0	14.0	38.3	頁岩	
		II-10L	II	■ e	70.9	39.0	15.0	26.1	頁岩	
		II-15S	I	■ e	70.0	39.8	8.6	23.0	頁岩	
		IV-15T	II	■ e	55.2	26.0	14.6	12.3	頁岩	
50		II-15O	II	■ e	63.0	32.0	11.3	17.5	頁岩	
25-9		S T 3	Y	■ e	43.0	42.1	14.4	17.0	頁岩	
		II-160	II	■ e	65.1	36.3	13.6	22.4	頁岩	
10-7		S T 1 E P 4	F 2	■ e	36.0	31.6	6.2	6.3	頁岩	
36-11		S K 8	F 4	■ d	68.4	31.3	7.9	19.4	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ d	65.2	32.4	12.0	23.0	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ d	69.0	36.9	16.2	35.0	頁岩	
		II-16M	II	■ d	38.9	31.8	8.8	11.4	頁岩	
		III-10J	II	■ d	43.6	21.6	8.4	6.1	頁岩	
24-11	55	S T 3	F 1	■ d	37.0	19.7	6.3	4.2	頁岩	
		II-12N	I	■ d	61.8	73.6	12.6	55.2	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ d	23.0	46.7	10.2	10.4	頁岩	
		不 明		■ d	41.8	55.5	12.6	33.2	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	41.2	52.5	16.2	30.5	頁岩	
		II-120	II	■ e	28.3	46.4	9.2	11.7	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	67.3	65.6	26.1	121.0	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	61.4	84.4	32.6	125.2	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	73.4	58.9	18.6	79.8	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	60.5	63.1	13.0	50.0	頁岩	
		II-5M	II	■ e	60.3	56.8	17.0	60.3	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	65.3	63.6	23.8	89.0	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	49.4	65.7	27.8	49.0	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	54.0	53.9	16.4	30.3	頁岩	

出土石器計測表(8)

表 20

排 序	石器 番号	出土地区	出土 層位	石器名稱	全 長 (mm)	最 大 幅 (mm)	最 大 厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
46-15		II-170	II	■ e	46.8	39.4	11.5	21.9	頁岩	
		II-160	II	■ e	43.3	47.7	16.1	27.8	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	37.2	58.9	11.3	23.3	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	61.7	32.3	8.1	13.0	頁岩	
		II-17R	II	■ e	42.7	62.4	7.4	21.8	頁岩	
		II-15F	II	■ e	36.8	46.3	12.2	22.9	頁岩	
		II-14L	II	■ e	29.1	42.2	6.3	6.0	頁岩	
		S T 1	F 1	■ e	29.4	39.5	15.2	15.8	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	38.0	52.4	9.4	13.8	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	38.8	36.1	9.6	11.0	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	20.3	33.4	10.1	3.3	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	24.3	22.6	5.1	2.3	頁岩	
		II-15T	II	■ e	31.7	29.8	9.3	5.6	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	36.1	35.5	18.6	15.2	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	25.2	40.3	15.4	9.0	頁岩	
		II-15N	I	■ e	27.1	41.1	9.8	8.4	頁岩	
46-14		II-120	II	■ e	25.1	41.6	8.6	6.7	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	43.8	38.4	20.7	24.2	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	36.8	46.6	12.3	18.3	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	56.5	42.0	19.6	36.0	頁岩	
		II-11M	II	■ e	25.1	54.8	20.0	15.8	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	63.9	40.8	15.8	31.0	頁岩	
		II-12O	II	■ e	24.9	39.5	13.7	6.8	頁岩	
		II-11N	II	■ e	32.5	45.0	18.0	11.8	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	51.9	35.0	14.9	26.3	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	47.1	41.4	12.6	26.7	頁岩	
		不 明		■ e	34.5	57.6	13.0	28.6	頁岩	
		不 明		■ e	26.5	35.5	6.9	4.4	頁岩	
25-12		S T 3	Y	■ e	86.2	70.5	21.0	128.7	頁岩	
		S T 3	F2.3	■ e	81.3	56.9	18.2	71.0	頁岩	
		S T 3	F 1	■ e	57.2	79.3	11.9	56.5	頁岩	

出土石器計測表 (9)

表 21

標 番 号	石器 番 号	出土地區	出土 層位	石器名稱	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
	S T 3	F 2	IX	50.8	63.0	13.8	44.0	頁 岩		
	S T 3	F 3	IX	39.6	55.7	18.1	35.0	頁 岩		
	H - 10 L	II	IX	41.0	32.2	14.2	25.5	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	55.5	64.7	19.2	68.1	頁 岩		
	S T 4	F 1	IX	35.8	61.2	10.8	28.2	頁 岩		
	S T 3 EP7	F 1	IX	50.1	45.3	19.8	49.3	頁 岩		
	S T 1	F 1	IX	64.3	40.3	18.5	38.6	頁 岩		
	S T 4	F 1	IX	46.8	39.4	16.5	31.8	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	40.2	68.6	17.4	48.0	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	57.0	36.7	21.0	54.9	頁 岩		
	H - 13 L	I	IX	(53.4)	(61.2)	(12.2)	(43.6)	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	(40.0)	(67.4)	(22.3)	(56.4)	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	65.9	57.4	15.3	44.5	頁 岩		
	S T 3 EP2	F 1	IX	56.3	49.8	23.3	66.4	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	(51.0)	(47.6)	(16.8)	(41.4)	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	(67.4)	(32.6)	(15.6)	(43.0)	頁 岩		
	H - 13 L	II	IX	(56.5)	(36.8)	(12.8)	(32.4)	頁 岩		
	H - 11 O	III	IX	67.7	52.7	19.4	49.9	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	71.9	51.2	21.3	41.0	頁 岩		
	H - 15 T	II	IX	77.2	35.7	11.3	25.7	頁 岩		
	S T 1	F 1	IX	64.0	38.8	13.6	29.5	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	54.6	49.2	17.8	54.2	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	61.0	39.3	11.9	35.1	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	53.6	49.8	16.4	48.6	頁 岩		
	H - 5 K	II	IX	67.0	34.9	15.5	31.3	頁 岩		
	H - 11 O	III	IX	53.9	38.4	14.7	28.1	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	31.9	57.8	13.7	38.6	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	(34.8)	(70.5)	(15.0)	(26.5)	頁 岩		
	H - 15 T	II	IX	54.4	32.4	12.4	14.1	頁 岩		
	H - 12 M	II	IX	41.9	32.5	13.9	18.9	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	36.7	36.1	15.3	24.7	頁 岩		

出土石器計測表 (10)

表 22

標 番 号	石器 番 号	出土地區	出土 層位	石器名稱	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
	H - 10 L	II	IX	47.1	48.7	8.4	16.0	頁 岩		
	H - 15 T	I	IX	41.0	60.6	7.4	19.1	頁 岩		
	S T 1	F 1	IX	59.0	36.1	11.5	22.2	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	(25.5)	(59.6)	(12.4)	(18.6)	頁 岩		
	H - 15 S	II	IX	(36.9)	(47.3)	(11.6)	(16.8)	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	48.4	42.3	17.1	33.9	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	67.6	31.2	12.6	27.0	頁 岩		
	H - 17 N	II	IX	37.0	32.9	12.2	18.8	頁 岩		
	S T 3	F 2	IX	35.3	46.6	12.3	15.4	頁 岩		
	S T 4	F 1	IX	52.0	30.8	15.0	19.7	頁 岩		
	H - 5 T	I	IX	36.6	25.9	6.0	5.2	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	43.1	35.4	8.6	14.4	頁 岩		
	S T 4	F 1	IX	45.8	33.1	13.6	22.2	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	53.7	23.4	13.8	15.4	頁 岩		
	S T 1 EP4	F 1	IX	39.0	33.2	10.3	12.7	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	49.9	37.7	16.5	24.9	頁 岩		
	S T 1	F 1	IX	41.8	30.3	14.3	15.6	頁 岩		
	S T 3 EP3	F 2	IX	30.6	27.7	9.4	9.8	頁 岩		
	S T 1 EP4	F 1	IX	44.6	26.2	12.9	13.1	頁 岩		
	S T 1 EP4	F 1	IX	26.0	51.0	17.6	17.8	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	20.5	27.7	13.4	13.4	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	18.5	30.0	6.6	4.0	頁 岩		
	S T 3	F 2.3	IX	34.6	44.8	10.4	12.1	頁 岩		
	S T 3	F 1	IX	23.3	32.8	13.0	11.8	頁 岩		
	S T 1	F 1	IX	34.1	25.2	12.4	7.9	頁 岩		
	S T 4	F 1	IX	32.7	41.5	13.8	20.4	頁 岩		
	S T 1	F 1	IX	31.4	21.2	6.8	4.8	頁 岩		
	H - 17 O	I	IX	42.6	22.2	9.7	9.7	頁 岩		
	H - 12 O	II	IX	22.2	40.0	10.5	11.4	頁 岩		
	H - 10 N	I	IX	33.7	18.9	12.2	7.2	頁 岩		
	S T 3 EP1	F 1	IX	33.2	22.9	9.3	8.1	頁 岩		

## 出土石器計測表 (11)

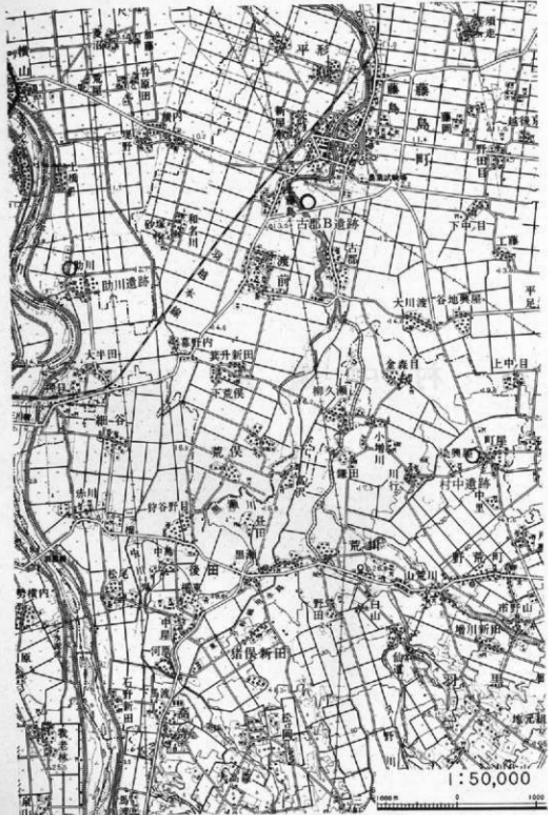
表 23

番 号	石器 番号	出土地区	出土 層位	石器名	全 長 (mm)	最大幅 (mm)	最大厚 (mm)	重 量 (g)	石 質	備 考
	S T 3	F 3	II		32.4	25.6	10.2	6.5	頁 岩	
	S T 3	F 1	II		32.7	19.5	8.3	5.1	頁 岩	
	S T 3	F 2.3	II		31.1	21.0	10.0	5.9	頁 岩	
	S T 3	F 2.3	II		32.7	19.3	12.4	6.1	頁 岩	
III-5 K	II	II			27.7	19.0	6.6	3.0	頁 岩	
S T 3	F 1	II			32.5	19.6	8.7	3.7	頁 岩	
S T 3	F 2.3	II			22.0	19.0	8.1	4.8	頁 岩	
II-13L	II	II			22.9	24.0	5.7	3.2	頁 岩	
II-15M	II	II			21.5	10.4	3.2	0.4	頁 岩	
S T 4	F 1	II			40.1	28.5	9.0	11.4	頁 岩	
不 明		II			(45.7)	(43.8)	(16.3)	(36.3)	頁 岩	
II-16Q	II	X			52.5	73.2	18.3	49.0	頁 岩	
II-17M	II	X			26.8	41.6	11.0	11.9	頁 岩	
II-12M	II	X			47.5	57.7	17.2	36.9	頁 岩	
S T 3	F 1	X			25.0	57.2	9.4	10.8	頁 岩	
S T 3	F 2.3	X			(32.0)	(65.8)	(12.4)	(19.4)	頁 岩	
S T 3	F 1	X			64.7	28.6	9.3	19.8	頁 岩	
S T 3	F 2.3	X			112.9	72.8	29.7	23.0	頁 岩	
S T 3	F 2.3	X			36.9	51.0	4.2	8.2	頁 岩	
S T 3	F 2.3	X			56.6	41.0	12.0	26.0	頁 岩	
S T 4	D	X			34.0	23.3	.7.4	8.8	頁 岩	
S T 3	F 2.3	X			(58.0)	(21.0)	( 5.5)	( 5.0)	頁 岩	
S T 3	F 1	X			53.8	56.7	14.1	38.6	頁 岩	
S T 4	F 1	X			(27.3)	(27.0)	( 7.9)	( 7.8)	頁 岩	
S T 3	F 1	X			(27.1)	(40.9)	( 7.2)	( 7.4)	頁 岩	
S T 3	F 1	X			37.3	48.8	8.7	11.5	頁 岩	
S T 1	F 1	X			49.7	50.4	10.9	33.1	頁 岩	

## 主要参考文献

- 安孫子昭二『東北地方における繩文後期後半の土器様式』石器時代9 昭和44年
- 磯崎正彦『十勝内浦』『岩木山』所収 昭和43年
- 伊藤 信雄『宮城県史』古代』宮城県 昭和31年
- 岡本勇・戸沢光則『繩文時代の祭祀と地域性』南東』日本の考古学II 昭和40年
- 後藤 順彦『陸前宮戸島遺跡浜台匂貝塚出土の土器について』考古学雑誌48-1 昭和37年
- 佐藤誠志・佐藤誠雄『神矢田遺跡』山形県鶴岡町教育委員会 昭和47年
- 志向 泰治『宮城県角田市老が崎遺跡の調査』考古学雑誌49-4 昭和38年
- 鎌木 次郎『繩文時代の直刃式片打製石斧について』一神奈川県尾崎遺跡の出土例を中心として』神奈川考古叢書2号 昭和52年
- 高瀬 泰時『トランシュー様石器について』東北考古学の諸問題 昭和51年
- 中村季三郎・小林道雄『明日遺跡調査報告書』新潟県越路町教育委員会 昭和40年
- 野村栄治『札引遺跡-北海道上磯郡木古内町札引の国道拵張に伴う緊急発掘調査報告書』昭和49年
- 藤村東男他『九年縄跡第3次調査報告書』岩手県北上市教育委員会 昭和52年
- 馬日順一郎『寺脇貝塚』福島県磐城市教育委員会 昭和41年
- 山内 清男『繩文土器』日本原始美術 昭和39年
- 柏倉亮吉他『玉川遺跡』山形県羽黒町教育委員会 昭和48年

村中遺跡



第50図 位置図

## I 調査の経緯 (第50、51図 図版47・48)

村内遺跡は山形県東田川郡羽黒町大字町屋字村中に所在する。<sup>1</sup>昭和48年度に山形県教育委員会が実施した庄内広域農地農道整備事業関係遺跡分布調査(註1)により新たに発見された遺跡である。町屋部落の立地する微高地の西端にあり、地目は畠地である。標高23.6mを測る。

昭和49年、遺跡の西側に上述の農道工事施工計画が具体化したため、山形県農林部と山形県教育委員会の協議の結果、昭和50年度に山形県教育委員会が事前の緊急発掘調査を実施することになった。

調査は昭和50年6月9日より6月14日までの延6日間実施した。調査担当者は山形県教育局文化課佐藤庄一・尾形與典・名和達朗の三名である。調査の実施にあたっては羽黒町教育委員会および町屋部落の方々より多大なる協力を得た。

調査は調査区の設定により開始した。遺跡内の農道工事区域に、路線の中心線を基準として $2 \times 2\text{m}$ のグリッドを単位とする調査区を設定した。南北基線(磁北にほぼ平行)をy軸、東西基線をx軸とする、第1象限の座標を用いた。x軸をA~K、y軸を0~30までとし、例え「B-10」のように呼称した。調査区の大きさは、 $10 \times 60\text{m}$ で、延136m<sup>2</sup>を発掘した。

調査方法は、B-I-4~21にグリッドを基準にする $2 \times 6\text{m}$ のトレンチをいちまつ状に入れて発掘し、遺構・遺物の検出に応じて随時拡張する方法を用いた。

第1日目は発掘器材を現場へ運び、調査の打合せを行う。

第2日目は現場にテントを設営し、調査区域にグリッド杭を打つ。その後上述の方法で粗掘りを実施する。B-17~18区で礫群、I-10~12区でpit群を検出し、10列以南で砂層が深くなることを確認した。

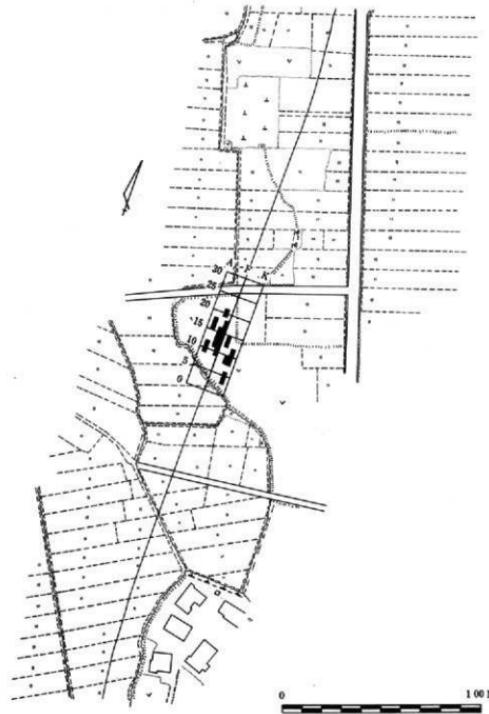
第3日目は第2日目の結果によりD-12~16・G-9~10・I-9区を拡張した。

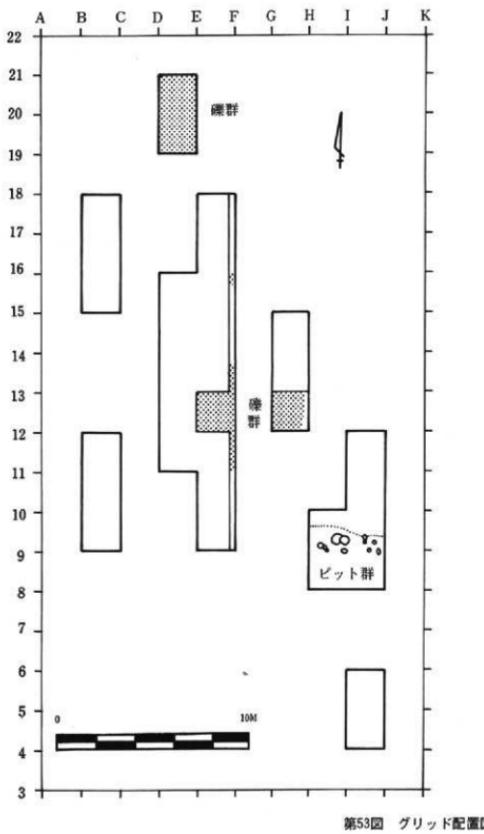
第4日目は各区の精査を行う。D-12~16区では礫群の広がりが検出されたが、検討の結果自然堆積によるものと判断された。H-9~10・I-9区のpit群は耕作土よりの混入物があり、擾乱によるものとそうでないものとに分類される。遺跡全体の通しセクションを記録する。

第5日目は遺跡の北側の状況をみるためにD-20~21区を拡張した。H-9~10・I-9~10区は精査後平面実測を行う。さらに、各区および遺跡全体の最終状況の撮影、調査区のレベルを記録する。

最終日はテント・発掘器材の撤収を行う。これで調査を終了した。

註1 山形県教育委員会「庄内広域農地農道整備事業関係遺跡分布調査報告書」  
山形県埋蔵文化財調査報告書第1集 昭和49年 -121-





## II 遺跡の概観

月山の噴火によって流出した火山泥流のうち、手向（とうげ）部落がのる篠川泥流と、川代（かわだい）部落がのる泥流性台地、月山北麓台地とがあり、この2つの泥流地帯にはさまれて、篠川が北流している。

篠川は、月山朝日連峰のうち、雨告山（あまもりやま、標高1360m）の北麓に源を発し、下流で藤島川、京田川と名を変え、最上川河口にそそぐ。

篠川は、さきの2つの泥流地帯にはさまれて、扇状地性氾濫原を形成し、さらに北の方では、篠川扇状地を形成する。

この扇状地は、扇頂から扇端までの5~6km間で、比高差約100mという、きわめて急な傾斜をもつが、村中遺跡は、その扇端部に位置し、標高は23.6mを測る。

さて、付近の略同時期の遺跡を概観してみると、すぐ北方の土口遺跡をはじめとして、大川渡遺跡、大川渡宮の前遺跡などの集落跡があり、東方、羽黒山神社への登り口付近には大鳥居古墳跡、南西の荒川部落付近には漆畠古墳跡、などの墓葬遺跡がある。

## III 遺構と遺物（第52~54図 図版48）

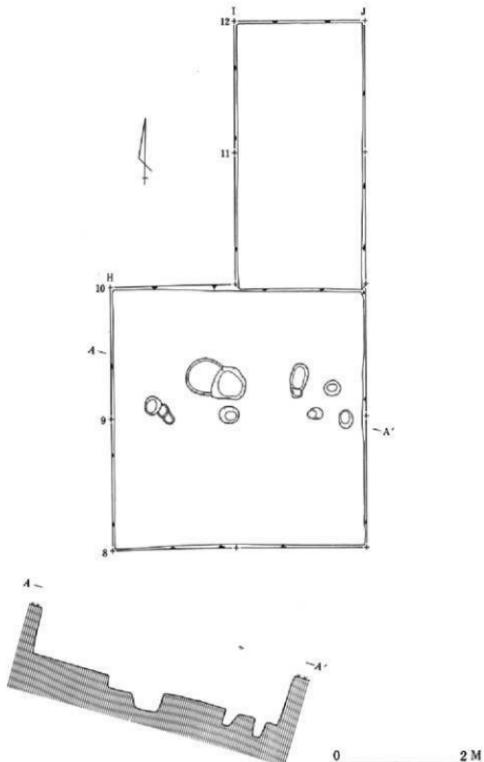
調査区の層序を見てみると、ここは畑地にあたっているため、厚さ20cm前後の耕作土が地表を覆っており、これを1層とした。その下には6層がある。これは、炭化物粒を含む黒褐色土と茶褐色粒土の混ったもので、25~50cmの厚さをもつ。この6層を2、3、4層が切っており、それぞれの土質は次の如くである。2層一灰褐色砂質土、3層一暗灰色粘土、4層一炭化物粒を含む暗褐色土。

6層の下には、北の方では、暗褐色土に砂利が混った5層があり、南の方では、4層（暗褐色土）や9層（砂利）、10層（乳灰色砂）、11層（暗褐色砂）などがある。また、特に南の方、E-10~12区にかけて、6層の下に7層、8層という、後世の搅乱層がみられる。

さて、遺物について言えば、遺物の種類は土器類のみである。

土器類は総計25片。うちわけは、須恵器が1片、土師器が7片、赤色土器が11片、近世以上と思われる陶磁器が5片、そして、時期は不明であるが、かなり時代が降るものと思われる器形不明の埴輪土器が1片ある。いづれも小片で、実測は不可能である。器形別では器形が最も多く、杯形のものがこれに次ぐ。

土器類は、18ラインを北限とし、9ラインを南限とする範囲に分布する。



第54図 H-9~I-12区遺構

調査区を、地表下40~45cm（土層観察のため、一部を55~70cmまで下げた）にわたって掘り下げ、精査を行なったが、遺構は殆んど見られなかった。わずかに、I-9杭を中心とする4グリッド、即ちH-9・10区、I-9・10区に、11個から成るピット群がみられただけである。このうちには山芋栽培時の穴が数個混っており、近世以降現代のものと、そうでないものとに分かれる。只、このピット群のうちのひとつから、赤色土器の破片が1片出土している。これらのピット群は、路線幅の関係で拡張できなかつたせいもあるが、検出した範囲内では、大きさ、深さなどの点からも、組み合わせられるもののがなく、建物跡であるか否か、さらには柱穴であるか否かの判別はできなかつた。

他に、土層断面図に見られる様に、地表下55~60cmのところで、疊群が観察されたが、これは、検討の結果、自然堆積によるものと判断された。

#### IV まとめ

村中遺跡は、月山北麓の篠川扇状地の略肩部に立地し、町屋部落の西端に位置する。標高23.6mを測る。昭和48年度に実施された庄内広域農業団体農道整備事業関係遺跡分布調査により発見された遺跡である。妻探資料により平安時代末~鎌倉時代の集落跡とみられた。

調査は、昭和50年6月9日~6月14日までの延6日間実施された。グリッド方式で農道施行区域内を136m<sup>2</sup>を発掘した。その結果、遺構では調査区域の南東側、すなわちH-9・10区、I-9・10区でpit群を検出した。しかし、畠地の作物による穴が混っており、遺物を含むものも1つだけ、建物跡等の想定ができなかつた。遺物は土器のみで、总数25片と少なく、いずれも小破片である。種別では、須恵器、土師器、赤色土器、陶磁器（近世以降）、時期不明の埴質土器がある。

以上であるが、本調査では遺跡の集落跡としての全貌を把握することができなかつた。その中心部は遺構・遺物の出土分布を考慮すると、今回の調査地点よりもっと東側の方に、位置することも考えられる。時期に関しても、明確な事は言えないが、平安時代末（12世紀）頃に中心をおくと推察される。

古郡B遺跡

## I 調査の経緯 (第50図 図版49)

古都B遺跡は東田川郡藤島町大字古都道橋にある。付近には藤島川が蛇行し、沖積地を形成している。昭和50年、県土木部河川課では藤島川の改修工事を計画し、県文化課に周辺遺跡の存在を問い合わせ、存在遺跡の調査を依頼した。これを受けた文化課では古都B遺跡の調査を計画し、50年10月20日～11月1日（延11日間）に実施した。

10月20日

器材の運搬、藤島町教育委員会より借用したテントの設営を行ない、明日からの調査作業計画の打ち合わせを行なう。また同時に遺跡の現状写真を撮影する。

10月21日

ローリングタワーを設置し、ポラロイドによる近景現状写真をとり、マウンド上の草刈りとその後の近景写真を撮影する。またマウンド上に東西18m・南北23mのトレーニングを南北に合わせて設置し、東・南トレーニングから掘り始める。

トレーニングの名称は北トレーニングより1T、東トレーニングを2T、南トレーニングを3T、西トレーニングを4Tと命名し、呼称する。

マウンド上に大きな榎木があり、以前に切りたおしたとのことであったが根が広がり、調査は難行した。

10月22日

2トレーニングを青砂層上面まで掘り下げる。トレーニング内からは遺物の出土がみられなかつた。3トレーニングにおいてマウンドの裾部より動物の白骨体が出土、以前地主がブタの死体を埋めたとの話である。

また調査と併行してマウンドの測量作業に取りかかる。縮尺は100分の1とし、レベルは三角点より標高レベルを移動し、海拔13Mの原点ポイントをマウンドの近くに打ち込み、測図を25cmコンタによる測図作業を開始する。

10月23日

3トレーニングを掘り終ったが、出土遺物は検出されず、4トレーニングの調査に取りかかる。2・3トレーニングを掘り終った段階で、マウンドを観察すると、マウンドは設営時の表土に付近の土砂を盛り上げただけの様相を示している。1・4トレーニング共に出土遺物の検出はみられず、マウンドの中心にある榎木の下を掘る必要が出た。一方昨日からのマウンドの測量作業が終了し、すでに掘り終った2・3トレーニングの土層測図作業を始め、夕方までに完了させた。又、遺跡の遠景を南方より撮影した。

10月24日  
マウンド中心に向って掘り始めたが、桜木根が作業を運らせている。2・3トレンチの土層観察写真を撮影する。

10月25日  
中心を掘り進めているが、出土遺物も埋設施設も発見出来ず、現在まで掘り進めた各トレンチ内を再度精査してみたが、これも何ら検出できなかった。1・4トレンチの土層図測図作業の準備に取りかかる。

10月27日  
桜木の下にも遺構・遺物の発見が出来ず、1・4トレンチの土層測図作業を進める。

10月28日  
強風を共う雨天のため作業を中止する。

10月29日  
27日に残った土層図の測図作業を行ない、完了後土層写真を撮影する。

10月30日  
再度各トレンチや、マウンド中心からの調査でも施設や出土遺物もなく、土層の状態から考えても掘り込まれた形跡がなく、調査は終了した。これらのことを見てみれば、この庄内地方には同様なマウンドが、点在している部落の入口部に在り、推測ではあるが、部落の存在を目印としたものと思われる。

11月1日  
すべての調査を終了し、調査機材を整備梱包のち山形に向ける。また藤島町教育委員会から借用したテント等を返した。

## II 遺跡の概観

古都遺跡は、庄内平野北西部、藤島川右岸に存在する。藤島川は、その源を羽黒山系に発し、庄内平野を蛇行しながら日本海へ注ぐ。庄内平野は最上川、赤川、京田川、大山川等、大小の河川の沖積により形成し、広大な沖積平野を作り、米所山形県をささえている。

遺跡は藤島町上藤島部落南東部、新設された国道345号線と藤島川が交差する北側に位置し、藤島川右岸の沖積地に存在する。遺跡は高さ1.5mをもつマウンドで、中世ないし近世の墳墓として昭和38年の山形県遺跡地名表（註一）に記載されている。

藤島町には古都B遺跡の他、古都A遺跡・渡前遺跡、平形遺跡等の遺跡が点存している。

これらの遺跡は赤川や藤島川が形成した平坦な沖積地に立地し、自然堤防ないし、付近の微高地に集中している。平形遺跡（註二）・渡前遺跡は奈良・平安時代の集落跡として登録されている。

註一 山形県教育委員会『山形県遺跡地名表』昭和38年

註二 柏倉亮吉・小野 忍『平形遺跡第1次・第2次発掘調査概要』昭和47年

山形県教育委員会『山形県文化財発掘調査報告書』第6集 昭和51年

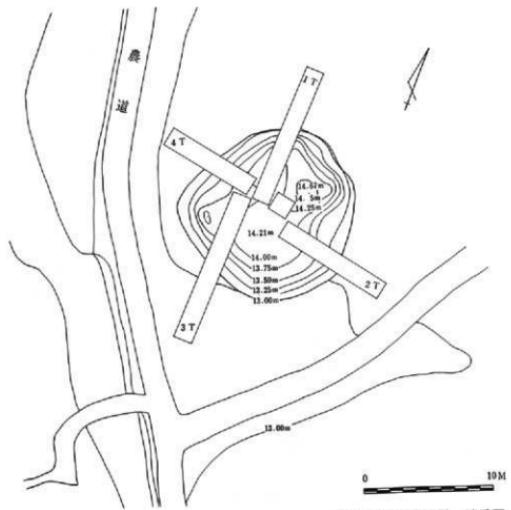
## III 遺構と遺物（第55、56図 図版50）

本遺跡では前述の通り、遺物の発見がなく、マウンドだけを記述する。

マウンドは現地表面より1.5mの高さにあり、径約27mを測る。最頂部をやや北寄りにもち、南部はゆるやかな傾斜を保つ。北側と西側は急傾斜となり、付近の畑地にマウンドを削ぎられたものと思われ、復元すれば径38mの大きさになるものと考えられる。

調査はこのマウンドの頂部よりやや西にずらし北に合わせたトレンチを4本設置し、②Tと③Tを掘る。層序は、第Ⅰ層約35~50cmと厚く覆われた表土、第Ⅱ層は填頂部下に約20cmの厚さで水平にある褐色砂層で、木根による擾乱が著しい。第Ⅲ層は約30~45cmの明褐色砂層である。第Ⅳ層は砂の粒子が細かく、粘着性がやや強く、構造面と考えられ、黒色砂層である。第Ⅴは粘着性があり、若干の白色粒子を含み、明褐色粘質砂層である。第VI層は粒子が粗い明褐色砂層で約20cmの厚さである。第VII層は青灰色砂層の地山である。

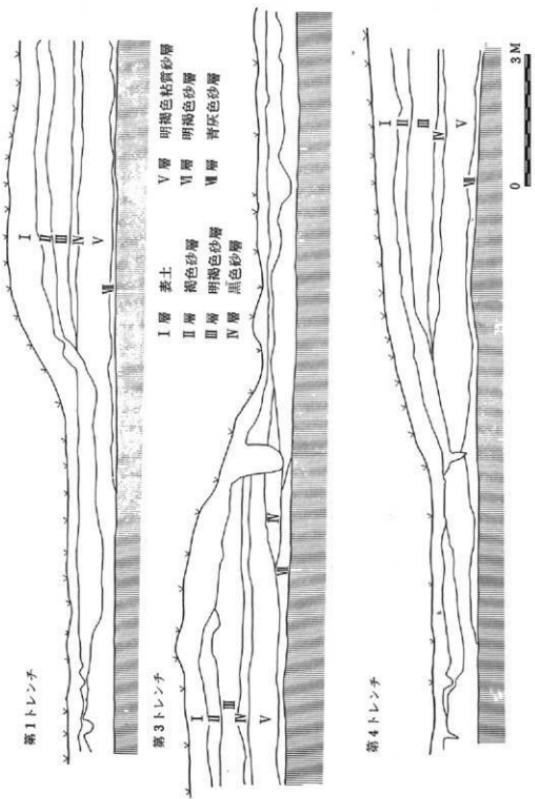
これらの層を観察すると、Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ層は厚さが一定し、水平にある。このことを考えると、V層上面に規則的に砂を盛り上げた遺構と考えられる。また各トレンチからは出土遺物が検出されず、断面を観察しても掘り込まれた形跡もない。頂部に桜木があり、その根下に向らの痕跡も認められなかった。



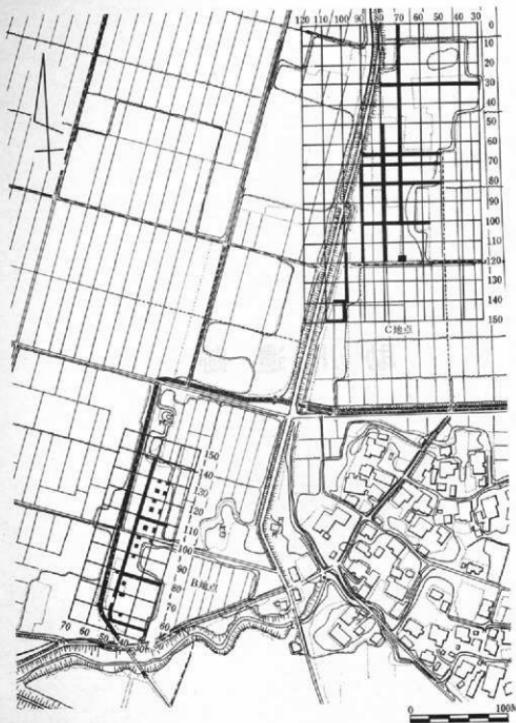
第55図古都B遺跡 墓丘図

#### IVまとめ

本遺跡は進跡地名表に平安時代の墳墓（No.1227）として登録されているが調査の結果、墳墓ではなく、近世期のマウンドと考えられ、調査ではトレーンチ内や横木の下にも向ら張跡が認められなかった。その造築目的としては、近世信仰対象としての島嶼山や出羽三跡が認められなかった。また庄内地方に山信仰としての塚（関東地方には山岳信仰としての富士見塚等がある）、または庄内地方に多くみられる点散した部屋の出入口にあたる道路に設けた目印としての塚、とも考えられ、いずれにしてもこのような塚は前述の通り、多くの数をなし、今後の資料の増加をまちたい。



助川遺跡



第57図 助川遺跡 全体図

## I 調査の経緯 (第50・57 図版51・52)

本遺跡は、山形県東田川郡三川町大字助川字北畠65・78番地に所在する。遺跡発見のきっかけは、昭和37年県遺跡分布調査にも「山形県遺跡地名表」には助川遺跡(No.1193)散布地(平安時代)となっており、助川部落の南西部の畠地一帯が遺跡の推定範囲となっている。この地区は、圃場整備事業に係るため昭和49年9月に第一次発掘調査を実施し、遺物は土器片(細片)が十数片出土したのみで、遺構は検出されなかった。この調査の際、本遺跡の範囲が助川部落の一帯と西部畠地および北西部の畠地一帯に、土師・須恵器片が散布することが判明した(註)。

今回の調査は、昭和49年度から続く県営赤川右岸圃場整備事業が本遺跡の西部・北西部一帯に係るため、山形県教育委員会と同農林部および関係機関との協議のうえ、また三川町教育委員会の協力を得て、昭和51年5月18日から5月27日と同年6月28日から7月3日までの2度にわたって緊急発掘調査を実施した。

調査は、遺跡が広範囲にわたるため昭和49年に調査した地区をA地点、助川部落の西側をB地点とし、さらに北西部一帯をC地点と仮称し、昭和51年5月18日から5月27日までC地点を6月28日から7月3日までB地点を調査した。

調査の方法は、推定遺跡範囲内に両地点ともグリッド法によるトレンチを井桁状に設定し、第1段階は $2 \times 4\text{m}$ の範囲で坪振りを行ない、第2段階は重機械(バックホ)を入れ、遺構を確認した部分を随時拡張する方法をとった。グリッドの基線は現存する地形を利用して、B地点では南隅に30-50グリッドを、C地点は北東隅を1-30グリッドの基点とし、東西方向をX軸・南北方向Y軸とするように設定し、X軸を1・2・3…150、Y軸も同様に呼称する。北からのY軸方向は、B地点でN-20° E・C地点でN-5° Eを測る。

### C地点

5月18~5月20日

80-120グリッドを基点に10mごとに井桁状にグリッドを設定する。X軸71-81列Y軸30-80-100列を20m間隔で $2 \times 4\text{m}$ の範囲でグリッド相掘作業を行う。71-119-120グリッド内において、小礫を組んだ $25 \times 30\text{cm}$ の方形を呈する礫石状の遺構を検出し、東・西・北にそれぞれ4m拡張する。層序を確認した後、X軸71・81・91列、Y軸30・66・70・80・100列を井桁状に重機械を使用し相掘作業を行う。

5月21・22・24日

重機械を使用した各トレンチの平面・断面精査の作業を行う。その結果遺構は確認され

ず、70~72~118~120グリッド内にわずか礎石状の建物が検出されたのみである。遺物の出土状態は第Ⅰ層から土器・須恵・須恵系土器の环・甕の破片が出土している。

5月25~5月27日

礎石建物跡のさらに精査追究を行う。25×30cmの方形の小礎群がほぼ南北の方向に70~80cmの間隔で直線的に並んでいるが、その他柱穴等の施設は検出されない。さらに南側100~115~150付近を拡張するが、遺構・遺物は検出されなかった。写真・測図を行ない第2次の調査を終了する。

B地点

6月28日~6月30日

草刈り作業終了のち、C地点と同様にグリッド設定を行う。遺物の散布状況及び層序の確定のため、50~120・120~100・90・35~80、40~110~130、50~56~139、35~50~51、40~50~110グリッドの粗掘り作業を行う。さらに、50~56~139・35~50~51・30~52~80・40~50~110グリッドの重機械による粗掘作業を行ない、平面・断面精査をする。第Ⅰ層より須恵系土器・須恵器の細片(环・甕)が数片出土し、遺構は検出されなかった。

7月1日~7月3日

前日に引き続き平面・断面の精査を行うが、遺構・遺物が検出されなかった。写真・測図を行なって調査を終了。

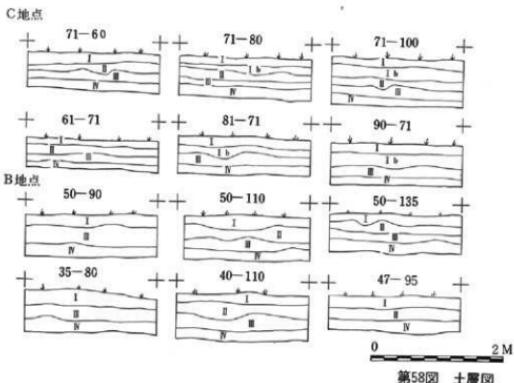
なお本地点の西側から南西側にかけては、墓地および畠地に作付がおこなわれているため調査を放棄する。

(註) 山形県教育委員会「山形県文化財発掘調査報告書」第6集 昭和51年3月

## II 遺跡の概観 (第58図 図版53)

本遺跡は庄内平野の南部を流れる赤川中流右岸の東に大きく蛇行する所に位置し、標高13~15mを計り平面に立地する。三川町助川部落のB地点では西方250m、C地点は北方150mの地点にある。

遺跡の現況は、昭和7・8年にかけて赤川堤防改修事業により大幅に土取・削平が行なわれ、堤防として築かれ現況を大きくかえた。また昭和45年には開田事業により削平され、さらに畠地として利用され、開田・畠地のくりえしがなされプライマリーな遺跡として存在せず、土器の破片が散在している程度である。現在、B地点では畠地・果樹園・荒地



となり、C地点では水田・果樹園となっている。

遺跡の層序は、両地点とも上記の関係でプライマリーな層序間は認められず、全体として微砂質土でサラサラし、40~60cmで黄褐色土の土層にたっし各層とも搅乱を受け、明確な遺物包含層は認められなかった。両地点とも差違はなく、同一層として下記に示すものである。

I層 褐色土 耕作土である。B地点は畠地でサラサラとして粘性がなく軟かい。

C地点は水田耕作のため堅く粘質である。10~25cm堆積している。

I b層 暗青灰色土 C地点のみ確認される。酸化鉄を含み粘性がある微砂質土で堅くしまっている。15~25cmでほぼ水平に堆積している。

II層 暗褐色土 微砂質土でやわらかく、木の根等の腐植物粒などが混る。15~35cmの堆積があり不整合である。

III層 褐色土 II層に近似しているが、色調も明るくやや堅くなっている。25~35cmの堆積がある。

IV層 黄褐色土 砂質性が強く部分的に堅くしまる所もある。地山である。

### III 遺構と遺物

#### 遺構

B地点においては、第IV層黄褐色土そのものが畑地によりかなり擾乱されているため、遺構を検出できなかった。

C地点では、70-72-118120グリッド内に礎石状建物跡のみ検出された。確認面は地表下10-15cmで浅く大部分は破壊されている。礎石の大きさは、約25×30cmの方形をなし5-10cmの小礎が偏在的に集り、若干の岸化粒子を含んで、その下部には掘り込みをもっていない。方向はほぼ磁北を向き、70-80cmの間隔で並んでいる。周辺部にはその他の施設は検出できず、出土遺物もなく時期は不明で、どのような施設であるかも明確ではない。

#### 遺物

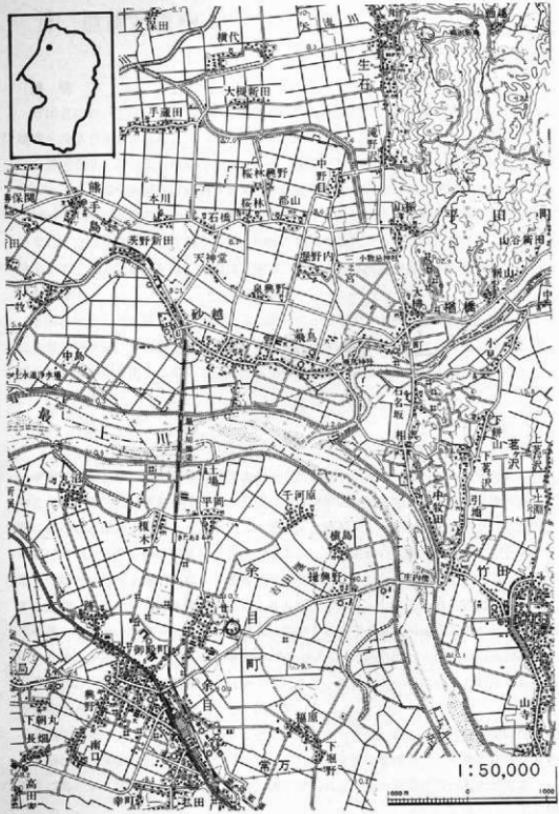
遺物のほとんどは第I層から出土し、両地点とも集中する所もなく散在的になっている。出土量は整理箱に少程度で破片ないし細片で、ほとんどが須恵系土器の环(甕)及び土師器(环)片がわずかに出土している。時代は平安時代末(12世紀前後)と推定される。

### IV まとめ

本遺跡の調査は、昭和49年の第1次調から始まり本年度の2度にわたり発調査が行なわれたが、結果的には遺跡の中心部が不明確で遺物散布地域を知るのみで、遺跡の内容が明瞭にすることは出来なかった。またこの地区は、昭和7・8年の堤防が築かれるまで、風害にあいかなりの影響を受け、堤防改修事業により遺跡の大部分が消壊し、近年では開田・畑地といった土地利用により遺跡は破壊度が大であり、遺構の検出をみることが出来ず、遺物(土器片)を採集するのに止まる程度である。しかし、地元住民によれば、助川部落の中心部の畑地から土器片が濃密に集中する地点が数ヶ所あるとのことで、本遺跡の中心部分が調査区の東側にあると推定される。またこの部落は、古くは出羽山三神社とくに羽黒山神社が強く、その開創した社が7ヶ所あり、近世においては部落の対岸に莊内藩の舟付場があり水上交通の要所としても開けていた。

今回の調査ではあまり成果が得ることができなかつたが、おしあはれば平安時代末期から出羽神社の関係が密接に結びつけられ、また水上交通の要所としても考えられ、遺物が濃密に集中する地点もあるところから、機会があれば今後の調査を待つものである。

### 上台遺跡



第59図 位置図

## I 調査の経緯 (第59、60図、図版54・55)

上台遺跡は、山形県東田川郡余目町大字甘六木字上台および下台に所在する。昭和48年度に山形県教育委員会が実施した庄内広域農業団地農道整備事業関係地形分布調査（註1）によって新たに発見された遺跡である。遺跡は最上川南岸の自然堤防上に細長く延びており、遺跡の西側が上述農道の敷地内に入る。上台遺跡の取扱いについては、県教育委員会と農林部が昭和45年以来數度にわたって協議しているが、昭和51年10月に農道施工計画が具体化になり、同年11月～12月にかけて県教育委員会が事前に緊急発掘調査を実施することになったものである。

調査期日は、昭和51年11月15日から12月3日までの延15日間で、調査には山形県教育庁文化課の佐藤一、名和達朗が主に従事した。なお調査の後半には、調査補助員として阿部明彦氏（当時山形大学教育学部専攻生）に応援を得ている。また調査にあたって各目録教育委員会および地元廿六戸部落の方々に多く懇意に協力を得た。感謝の意をこめて、以下に記す。

調査は、まず道路の範囲のうち路線工事区域に含まれる部分に、路線の中心線を基準に $2 \times 2\text{ m}$ のグリッドを単位とした調査区を設定する。南北の基線をy軸、東西の基線をx軸とし、y軸線を $N-26^{\circ}-W$ に設定した。座標は第4象限としx軸を $0\sim30$ 、y軸を $0\sim120$ までとし、各グリッドはたとえ「10-50」のように呼称する。調査区の大きさは、 $60 \times 240\text{ m}$ の大きさである。

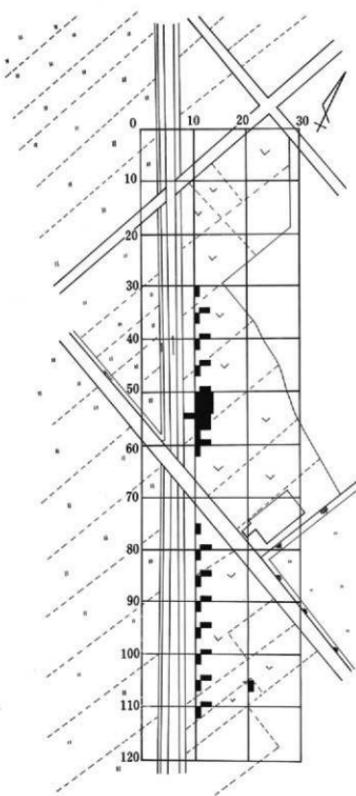
調査方法は、南北は10列、東西は34~109まで10mの間隔で $2 \times 4$ mのトレンチを基に発掘し、遺機・遺物検出に応じて随時拡張する方式である。

第1週は、前記の方式で粗掘りを行なう。包含層までは以外と浅くほぼ1週間で掘り終える。遺物は、全体に少ないがとりわけ10~50cm付近に集中するところが特徴である。

第2週は、遺物の出土傾向に合わせて10-52~62を追撃し、遺跡検査のための精査を行う。さらに遺物の出土範囲をとらえるために105・106-20を発掘、並びに遺跡全体のボーリングによる土層観察を行なう。11・12-54ではSX1・10-50~52では東壁より住居跡を想定させる土色変化を確認し、また8・9-54・10-57~61、10-85・86、10-90・91でSD6を検出する。

第3週は、11・12・50～56、13・50～53を拡張しST2のプランを検出し、SD6はセクション記録及び覆土を掘り上げる。また遺跡全体の通しセクションを記録する。最終的に検出遺構の平板実測、写真撮影、遺跡全体のレベル記録。木造跡の調査を終了する。

註1 山形県教育委員会「庄内広域農業団地農道整備事業開発実績分布調査報告書」  
山形県埋蔵文化財調査報告書第1集 昭和14年



第60図 上台遺跡 全体図

-146-

## II 遺跡の概観

最上川は、庄内平野に入ると東方に位置する出羽丘陵に沿いながら北流し、松嶺付近で大きく西方に蛇行して酒田に至り日本海に注いでいる。そのため平野の各所には自然堤防が形成され、また旧河川の跡を残す湿地帯もみとめられる。

本遺跡は、全目町の北1.5kmにある廿六木部落の東端にあり、最上川左岸の自然堤防上に立置する。標高は、11.7mを測る。下の水田との比高は、6m前後で一見河岸段丘を思わせる。この北端には、下台遺跡（註1）も立地しており、古来比較的安定した地形を示す。現在の地目は、畠地で一部南側が駄舎になっている。遺跡の保存状況は、長芋類の耕作及び西端を旧堰が通っているためその工事により一部破壊され、遺物包含層も大部搅乱が行なわれている。

遺跡の層序（第61図・図版56）は、3つに分けられる。調査区域が平坦な地形のためほぼ土層も水平に堆積している。I層からIII層までは平均して20~30cmの深さである。ただし、東側の斜面ではII層が傾斜変換線から急激に厚くなっている。

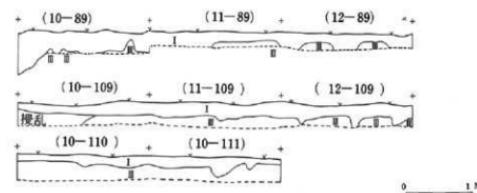
I層 耕 作 土 茶褐色微砂

II層 茶褐色シルト 部分的に褐色土を含む。遺物包含層である。耕作による搅乱が加えられ、特に遺跡の南側が顕著である。

III層 黄褐色砂 シルト質で粘性をもつ。

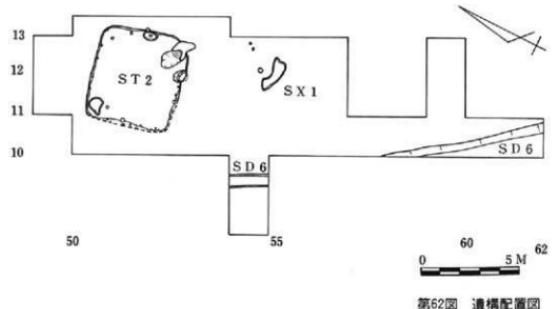
遺物は、II層とIII層との境界付近に多く。III層の上面は、遺構の確認面である。

遺構（第62図）は、10~13~50~55に集中して検出される。その北側は、未検出でまた長芋類によ搅乱が甚しく、未検出である。また南側の方は、10~85~86、10~90~91のS D6を除いて未検出である。調査区が継長なので20~105~106を拡張して東側の状況を観



第61図 土層図

-147-



第62図 遺構配置図

察したが、やはり遺構・遺物とも確認できなかった。そのため遺跡全体の遺構の分布は、前記のグリッドでSX1-SX2を検出したのみで他は、搅乱による破壊も考えられその分布形態は、不明である。

遺物は、遺構を検出したグリッドが多く南北の両端につれて減少していく。また出土総数も、395片と少ない。グリッド別にみると、北は10-40から南は10-100の範囲内に分布し、SX2よりも多く分布する傾向がある。なお東西の広がりは、西は壇に断ち切られ、東は路線の幅に制約されて不明である。おそらくは、地形の形状に沿って分布していることを考慮すると東西・南北50×100mの広がりを持つと推定される。

註1 山形県教育委員会『庄内広域管農田地農道整備事業開拓跡分布調査報告書』  
山形県埋蔵文化財調査報告書第1集 昭和49年

### III 遺構と遺物

#### 遺構

本遺跡で検出された遺構は、竪穴住居跡1棟、落ち込み遺構1基、溝状遺構1本の3ヶ所のみである。

#### 1号落ち込み遺構（図版57）

発掘区域のはば中央11-12-49-50区にある。平面プランは不整の長方形を呈し、長径1.8m、短径約0.7mを測る。遺構検出面から底面までの深さは5cm前後で、底面はほぼ平坦である。覆土は1層で、黄褐色砂層に褐色の砂質土を含んだものである。遺構内から赤色の磁化土器环・甕4片が出土した。性格は不明である。

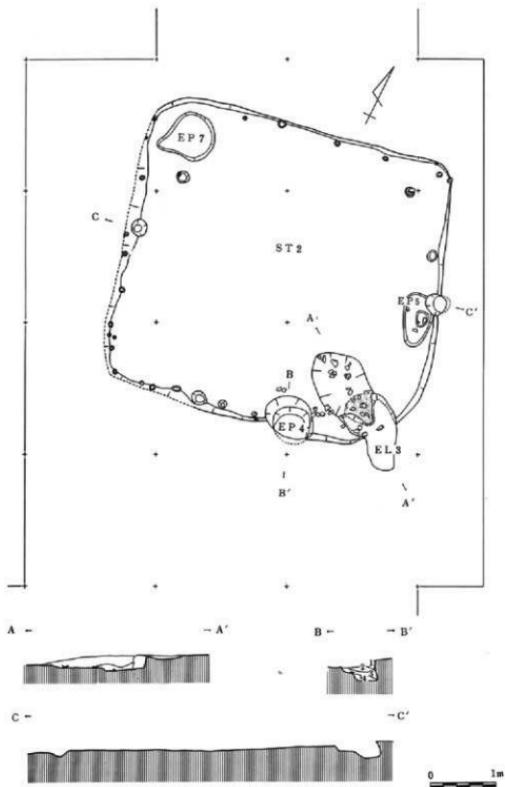
#### 2号住居跡（第63図 図版57・58）

発掘区域のはば中央10-12-15-52区で検出された竪穴住居跡である。平面プランは隅丸方形を呈し、南北4.5m、東西4.9mを測る。東南隅にカマドを有し、カマドの両脇および北西隅に不整形円形の落ち込みをもつ。床面から壁上面までの高さは5-14cmでゆるやかな立ち上りを示す。住居跡は畠層の黄褐色砂を掘り込んで作られ、遺構内の覆土は1層一炭化粒子を含む褐色質微砂、2層一炭化粒子・焼土を含む暗褐色砂質土にわかれる。両覆土ともカマド周辺を除いては、遺物が少量しか見られなかった。床面は畠層を軽く叩きしめただけである。壁添いの床面は叩きしきが弱い。

住居跡内から主柱穴ないし壁添穴を構成すると思われるピットが30個検出された。カマド（EL 3）は、基部の両袖下半が残存し、前庭部に長径約1m、深さ5cm前後の軽い落ち込みを有する。煙道は基部から約80cm程浅く伸びるだけで、煙出し穴等は認められなかった。カマドの袖部と前庭部から赤色の菱形土器（第図～）が個体散乱して発見された。住居内の3つの落ち込みのうち、EP 5・6に比較して掘り込みが深く、やや壁側に内傾する。いわゆるカマド脇の貯藏穴として理解されるものである。EP 5・6は床面から3-6cm程の深い落ち込みを持つもので、EP 5から赤色の菱形土器片が少量発見された。

#### 6号溝状遺構（図版56）

2号住居跡の南西部に16m程細長くのびる溝状遺構で、幅70cm・深さ30cm前後を測る。覆土は2層にわかれて、1層が済黄褐色砂質土、2層が暗褐色砂質土である。遺物は覆土1層から赤色土器および須恵器の菱形土器片が數片出土している。本溝状遺構は地層の観察



第63図 2号住居跡

などからかなり新しい時期のものと思われる。

#### 遺物

本遺跡から出土した遺物は、土器片が総数395片、石器が1点出土した。土器は、造構内特にST 2覆土内出土が大半を占め、そのほとんどが破片である。種別では、須恵器・赤色器(註1)土師器があり、量的には5%、70%、25%である。

#### 須恵器(第64図1・2・4 図版59)

ロクロないし叩きによる成形後、環元炎焼成を行なった土器群である。器形は、壺・壺・變形土器があるが、<sup>1</sup>以外は小破片で形態は不明である。

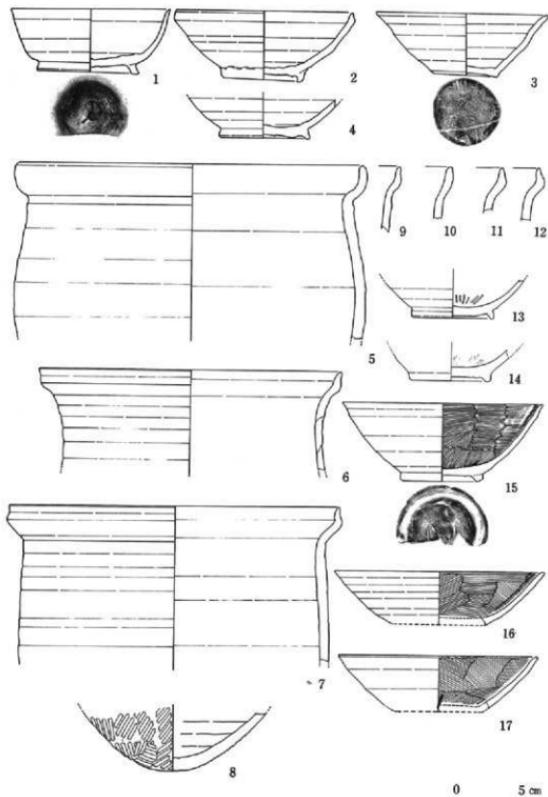
壺形土器は、ロクロ成形で糸切り(2・4)と窓切り(1)がある。高台付が多く、その内外周辺はナデ調整されている。器形の知れるものは3片でうち1片は下半部のみである。1は、口径12.1cm、底径7.7cm、器高4.7cm、器厚0.3cmを測る。底部と体部との境界は丸く、体部は急角度で直線的に開く。高台の高さは0.5cmで外側に張り出るように付けられている。2は、口径13.4cm、底径6.0cm、器高5.3cm、器厚0.4cmを測る。体部は緩かに立ち上り口縁下1cmの所で外側に肥厚し、内寄するように開く。また、内部底面に巻上げ痕が観察される。高台は高さ0.4cmを測り、端部が内寄している。4は、底径6.9cm、器厚0.5cmを測る。高台は高さ0.3cmと低く、やや上げ底の底面外周に斜面に付けられている。色調は各個体とも褐色氣味で、青灰色を呈するのが全体に少ないようである。なお2・4はST 2内EP 4-F 2より出土している。

#### 赤色土器(第64図3・5~12 図版59・60)

ロクロないし叩きによる成形後、酸化炎焼成を行なった土器群である。本遺跡で最も出土量が多く、器形は、壺・變形土器がある。

壺形土器(3)は、ロクロ成形で糸切り離しである。回転方向は、右回りである。口径13.1cm、底径4.8cm、器高4.6cm、器厚0.5cmを測る。口径に比して底径が小さく、体部は少しいうねりを持ちながらやや外反氣味に開く。底部は、少し上げ底である。明赤褐色の色調で胎土に粗砂を含む。EP 4-F 4より出土。

變形土器(5~12)は、器全形を知れるものが少ないが口径23~26cm、器厚0.5cm前後の大型壺である。体部は膨み(5)あるいは直線的(6・7)に立ち上り、頸部でくびれて大きく外反し、さらに口縁部で内寄するもの(5・10・11)、口縁上端にかけて少し外反するもの(6・7・9・12)がある。底部は、丸底(8)と平底がみられる。器体部は巻上げ後ロクロ成形され、下部は叩きしめを行なうのを特徴とする。8の器面には平行叩き



第64図 遺跡出土土器

目が認められる。しかし、裏面にあて痕は認められず平滑に仕上げられている。色調は白燈色、明赤褐色を呈し、胎土に粗砂を含む。なお本遺跡では ST 2-E L 3 前部よりまとまって出土している(6~8)

#### 土器類(第65図13~21 図版59)

环、蝶形土器の器形がある。器全形を知れるものは、环形土器2個体(15・18)のみで全て破片である。本遺跡では、特に ST 2-E L 3 と E P 4 よりまとめて出土している。

环形土器は、内面が丁寧なヘラミガキのら黒色化処理されている。口径が約19cm前後で器高が比較的高いもの(18・19)と、口径約15cm前後と少し小形のもの(13~17)がある。体部はロクロ成形の痕がみられ、内窓気味に立ち上がり、底部の切り離しは糸切りで回転方向は右回りである。また高台が付けられ、その内外周はナデ調整されている。底面との高さは、0.2cmという低いもの(13・18)と0.4cm前後のもの(14・15)とに分けられる。底径は、6~7cm前後、器厚は、0.3~0.6cmにまとめられる。胎土に粗砂を含む。

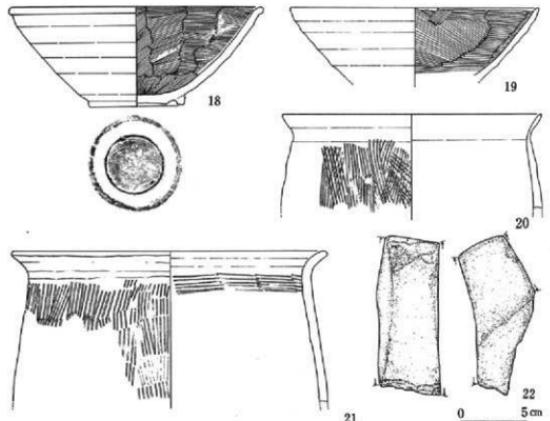
蝶形土器は、全て口縁部破片のみで E L 3 より出土している。器形は、やや胴張りの体部から頸部でくびれ、そのまま反して聞く土器である。さらに頸部は、横方向にナデ調整され、体部には継ぎない斜位方向にハケ目が施され、21は頸部内面にも横方面に認められる。ハケ目の1単位幅は、約2.5cm内外である。

20は口径19.6cm、器厚0.3~0.7cm、21は口径23.8cm、器厚0.8cmを測る。色調は黄褐色ないし赤褐色で、胎土に粗砂を含む。器下部を欠いているので器全形、器高その他は不明である。

#### 石器(第65図22 図版59)

石器は、10-52-IIより砥石が1点出土している。不整な角柱形を呈する砂岩を用いている。各面をそれぞれ使用しており、そのため一部磨り減ってくぼんでいる所も認められる。長さ11.5cm、厚さ4.5cm、重量320gを測る。

註1 ロクロ成形で糸切り無調整の环形土器及び、器体上部は巻上げ後ロクロ成形、下部は叩きしめを施す蝶形土器で鍛化焼成によるものをそれぞれ赤色土器として分類する。技術的には須恵器の範疇に入ると思われるが、器形的に一定のまとまりを持つことと、鍛化焼成を目的としていることに着目して類別を行なった。



第65図 遺跡出土土器・石器

## IV まとめ

今回調査した上台遺跡は、庄内広域農地農道整備事業関係遺跡分布調査によって発見され、同事業にかかる緊急調査として昭和51年11月15日から12月3日まで延15日間調査が行なわれ、新道路総幅員 328m<sup>2</sup>を発掘した。

本遺跡は、余目町廿六木部落の東端の畑にあり、最上川左岸の自然堤防による台地上に立地することから、調査当初から遺構の保存状況が良好で、その検出が注目された遺跡である。今回の調査は、部分発掘なので遺跡の全貌を明らかにすることはできなかったが、一応の成果を得ることができた。

土層は、3層に分けられる。上から耕作土、茶褐色シルト、黄褐色砂の順で、遺物包含層はII層であるが、主としてIII層との境界付近に多く出土をみた。遺物は、調査区の中央

とりわけST2付近に多く出土している。土器は、耕作による搅乱を受けたため全体的に遺存状況が良く、一括土器、完形土器が少ない。住居跡内では、覆土内よりもEL3前庭部とEP4覆土内に多く出土している。種別では、須恵器、赤色土器、土師器に分けられ量的に5%、70%、25%の順である。須恵器は、一般に青灰色よりも褐色味の色調で、高台付の环形土器が多く、内部底面に巻上げ痕を残すものみられる。赤色土器は、环と環形土器があり、ロクロないし叩きによる成形を行ない。醸成炎焼成された土器である。环形土器は、口径に比して底径が小さくや外反気味に開く器形である。斐形土器は、体部が少し膨むか直線的に立ち上り、頸部でくびれて大きく外反しきらに内寄する器形で、器体上部を巻上げロクロ成形、下部は平底か丸底で叩きしみが施される。このような特徴を持つ斐形土器は、新潟県蛇山遺跡（註1）に類例があり、県内では山形市西蔵王三本木沼周辺に出土例（註2）がある。土師器は、内面にヘラミガキと黒色化処理を施された高台付の环形土器と、胴張りの体部で頸部から大きく外反する斐形で、体部器面にはけ目を施す斐形土器とがある。両方ともST2内にまとまっており、前者はEP4、後者はEL3と出土位置が分けられる。以上の土器群は、時期的には平安時代末頃（12世紀）に中心を置くものと考えられる。

遺構は、住居跡（ST2）、性格不明の落ち込み（SX1）、満状遺構（SD6）が検出された。ST2は南北4.5m、東西4.9mの隅丸方形プランで、東南隅にカマド（EL3）を配している。確認面はⅢ層上面である。柱穴は、壁柱穴を主体に30個めぐる。床面には3つの落ち込みがあり、貯蔵穴の機能が考えられる。床面は、軽く叩きしめただけである。時期は、本遺跡出土遺物の88%が住居内より出土しており、その検討から平安末頃に位置づけられよう。庄内平野では、遺物の出土地点は各所にみられるが遺構、とりわけ住居跡を検出し得たのは他に1例（註3）あるのみで、今回の検出は同平野の開発及び集落の変遷を考える上での貴重な資料といえよう。SX1は、不整脩円形の浅い落ち込みでST2との関連、その性格も不明である。SD6は、遺跡西側を走る旧堀跡の工事による土採り跡と考えられる。

註1 新潟県教育委員会『北陸高速自動車道埋蔵文化財調査報告書蛇山遺跡』新潟県埋蔵文化財調査報告書第6  
昭和51年

註2 山形大学講師 加藤 稔氏の御好意により、出土遺物を筆者らが、実見した。

註3 山形県教育委員会『岡山』山形県埋蔵文化財調査報告書第18集 昭和47年

図 版



的場遺跡 II 区近景



的場遺跡 III-V 区近景



的場道路 3號住居跡旁掘風景



的場道路 3號住居跡旁掘風景



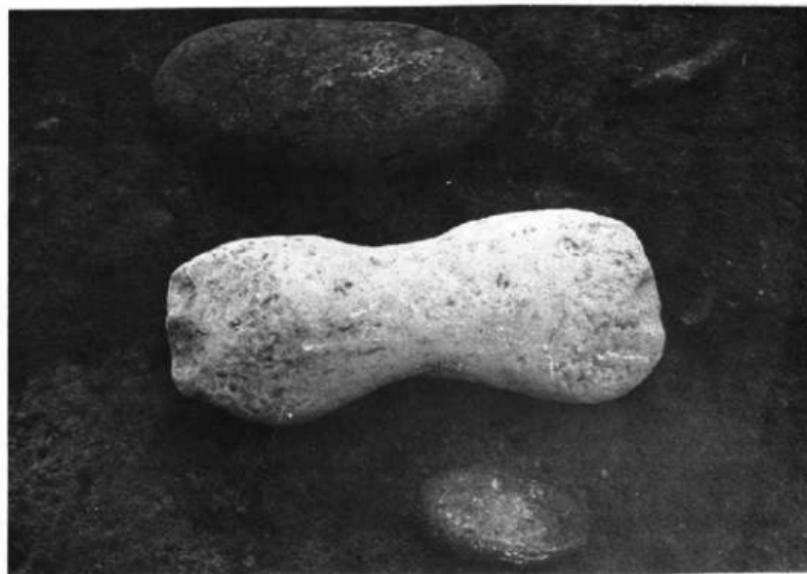
的場遺跡 1號住居跡全景



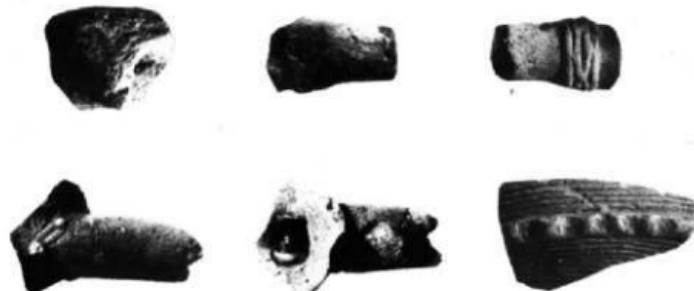
的場遺跡 1號住居跡壁・周溝



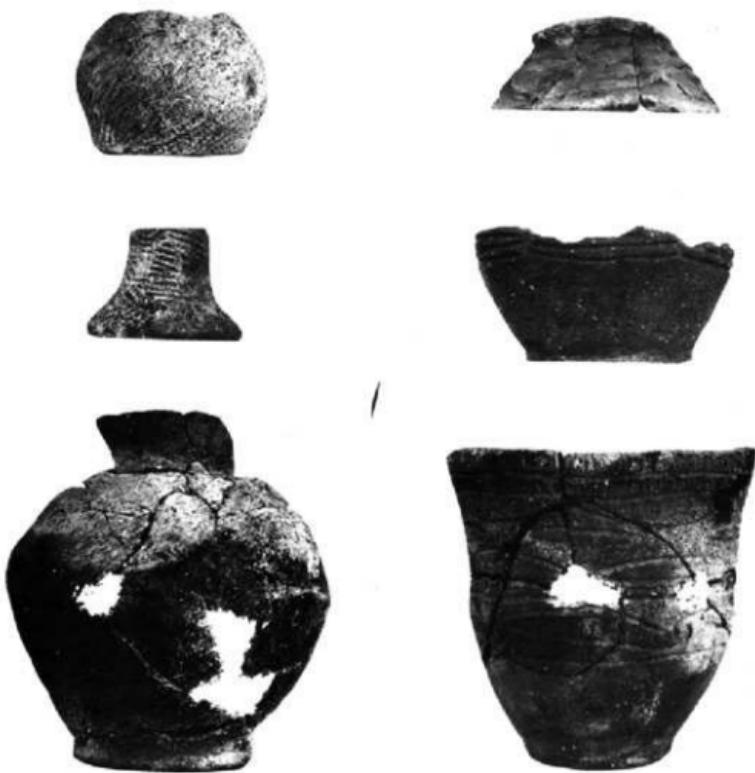
的場遺跡 1号住居跡土器出土状況



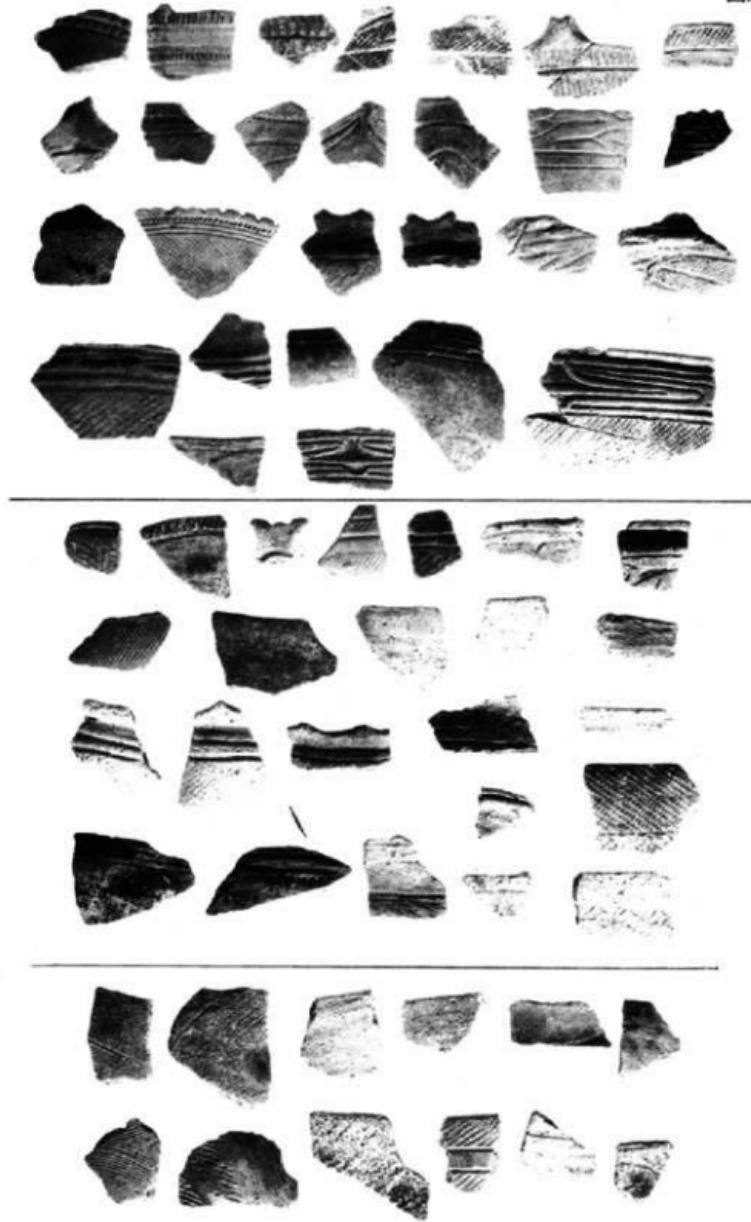
的場遺跡 1号住居跡石器出土状況



的場遺跡 土偶・注入土器



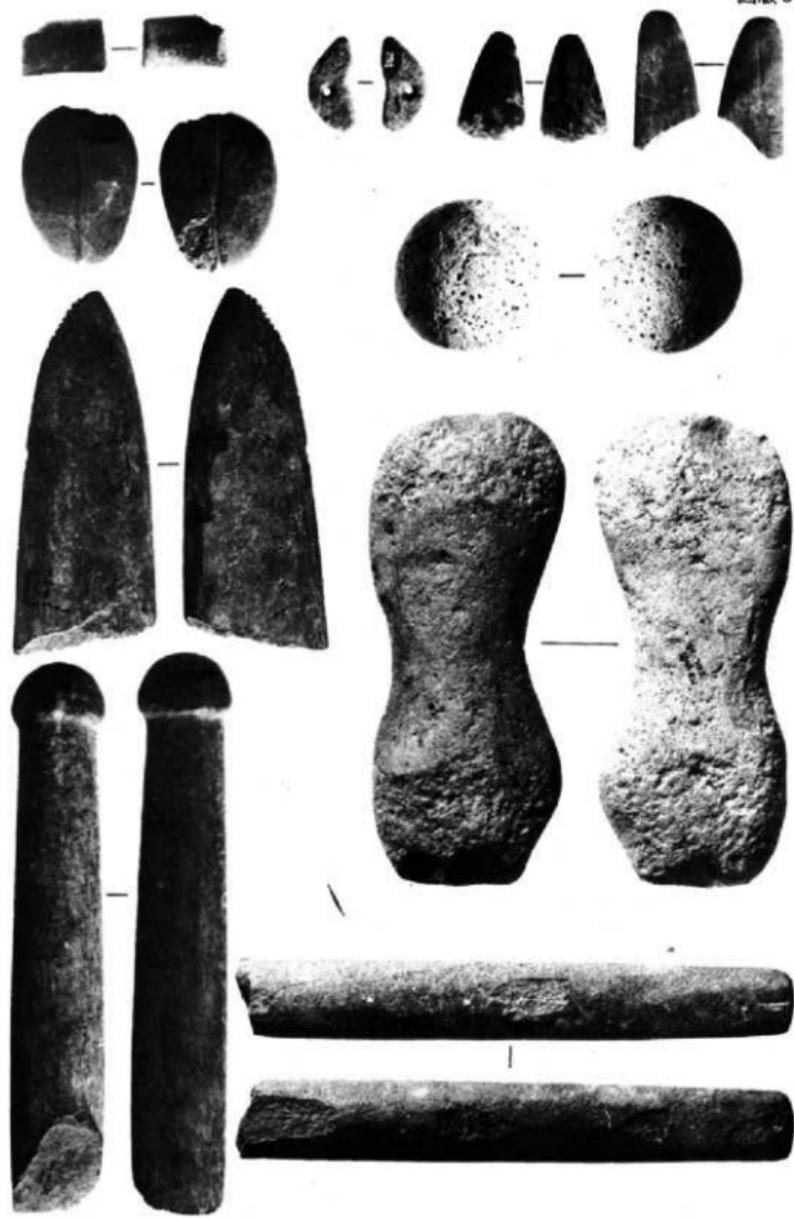
的場遺跡 1号住居跡・6号土壇出土土器



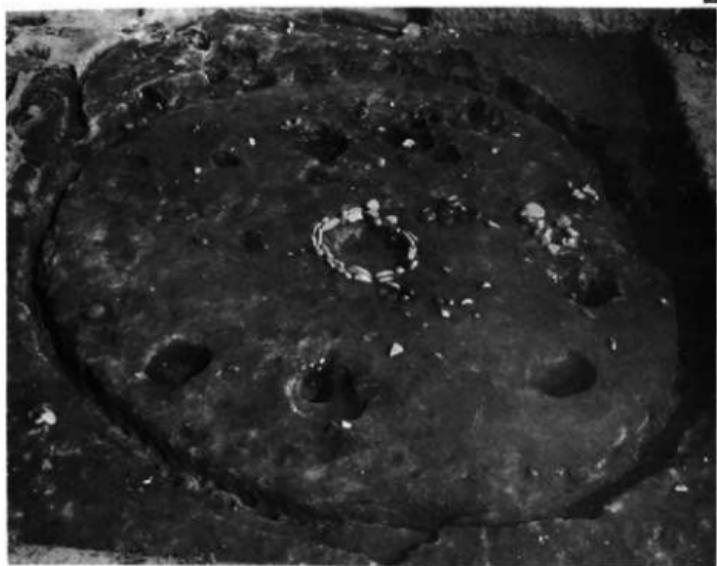
的場遺跡 1号住居跡覆土層・周溝・ピット出土土器



的場遺跡 1号住居跡出土打製石器



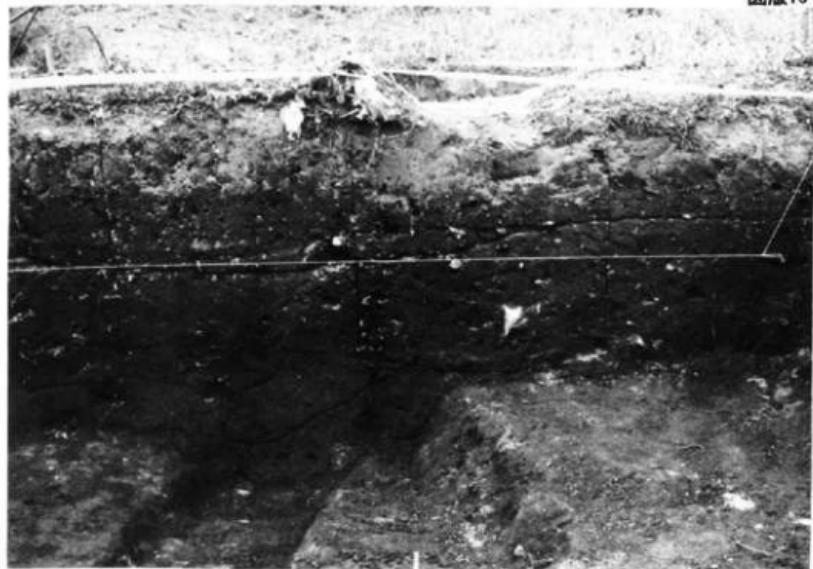
的場遺跡 1号住居跡出土石製品



的場遺跡 3号住居跡全景 (1)



的場遺跡 3号住居跡全景 (2)



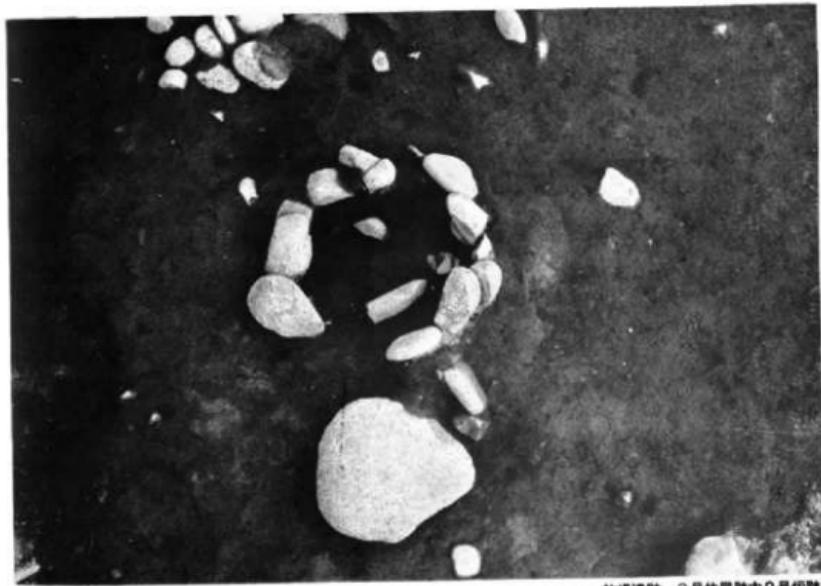
的場遺跡 3號住居跡土層 (1)



的場遺跡 3號住居跡土層 (2)



的場遺跡 3号住居跡内1号炉跡



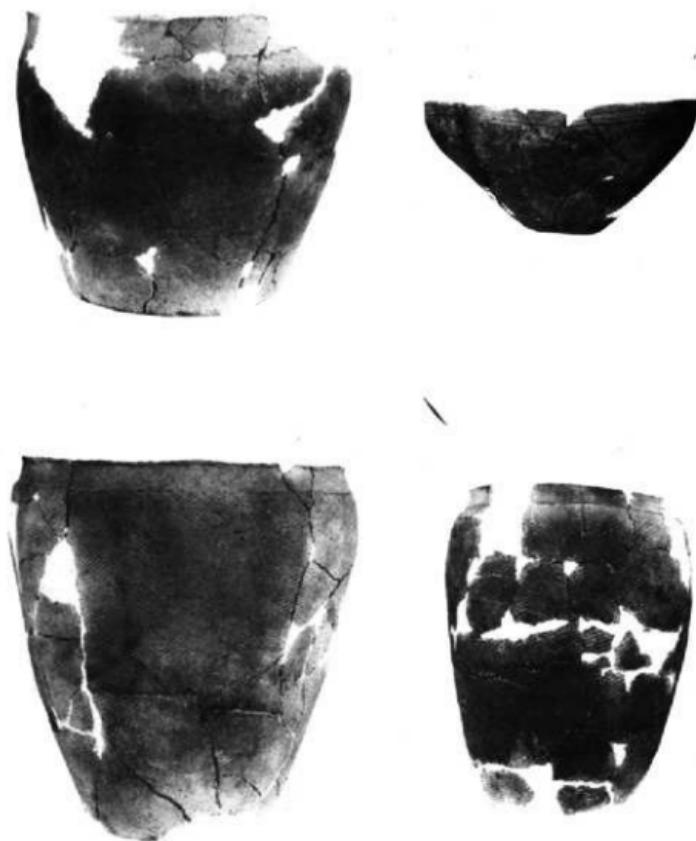
的場遺跡 3号住居跡内2号炉跡



的場遺跡 3号住居跡埋設土器出土状況 (E U 1・2)



的場遺跡 3号住居跡2号埋設土器



的場遺跡 3号住居跡1・2号埋設土器



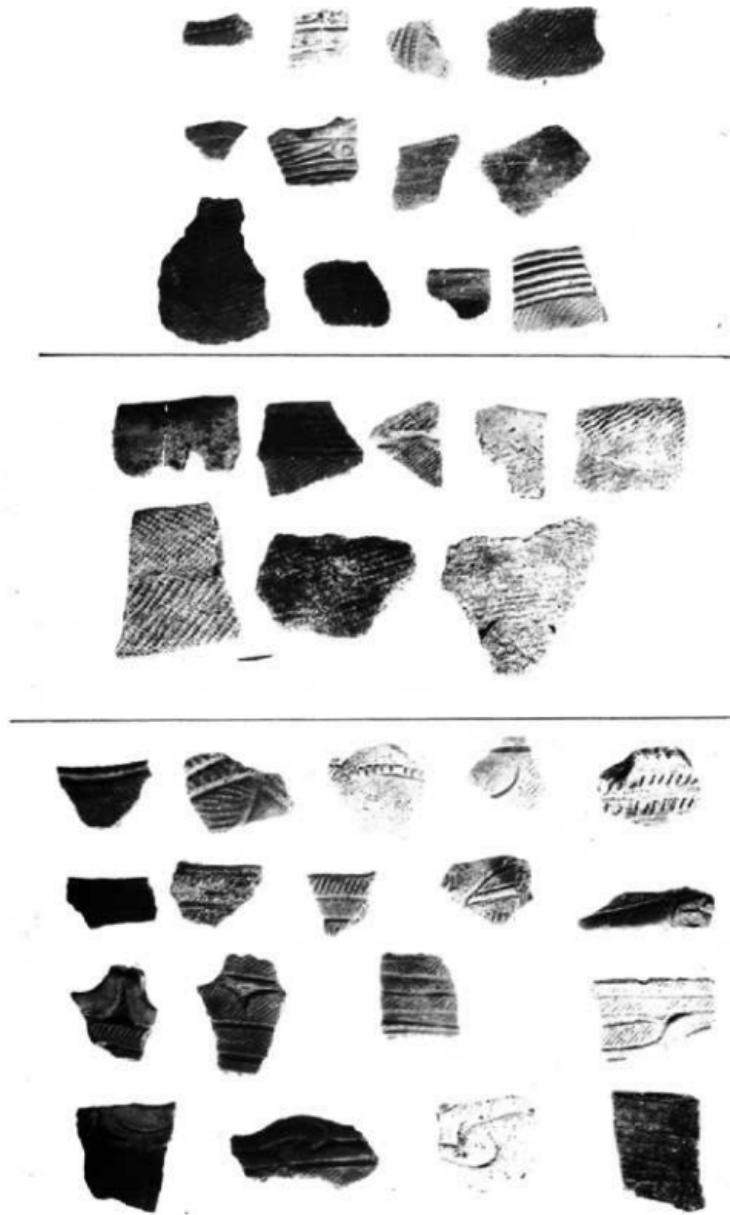
的堪遺跡 3号住居跡土器出土状況



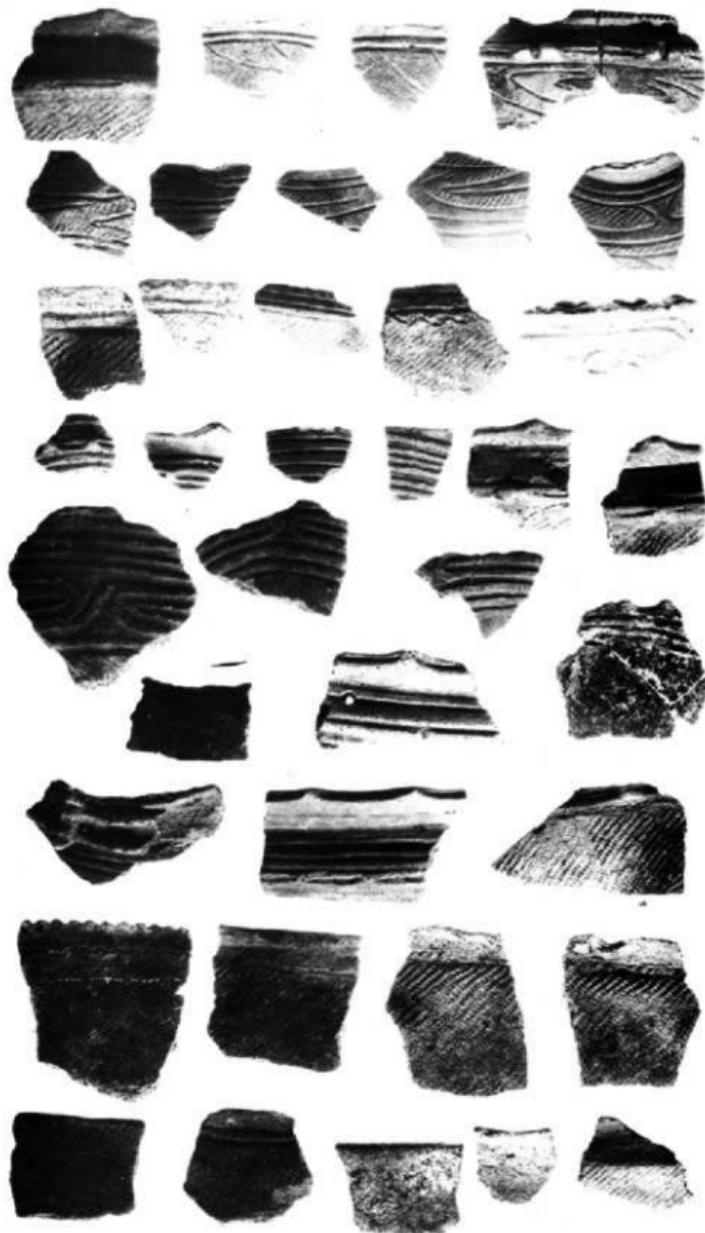
的堪遺跡 3号住居跡石器出土状況



的場遺跡 3号住居跡出土土器



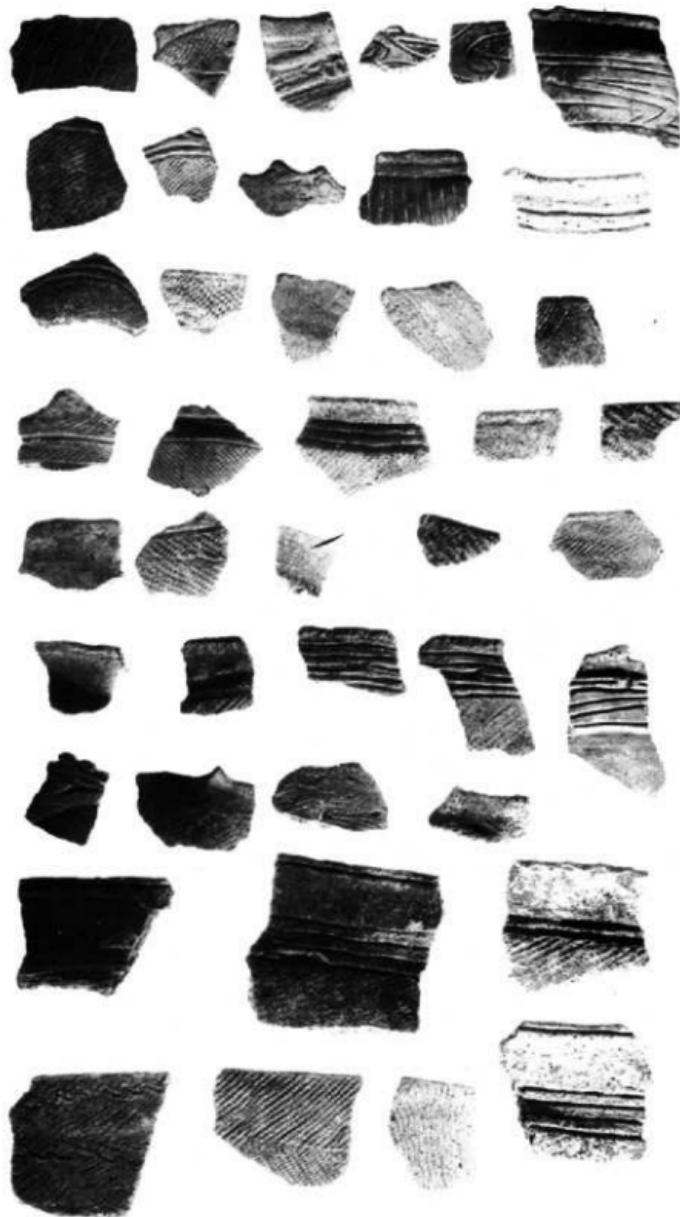
的塔遺跡 3號住居跡覆土1層出土土器 (1)



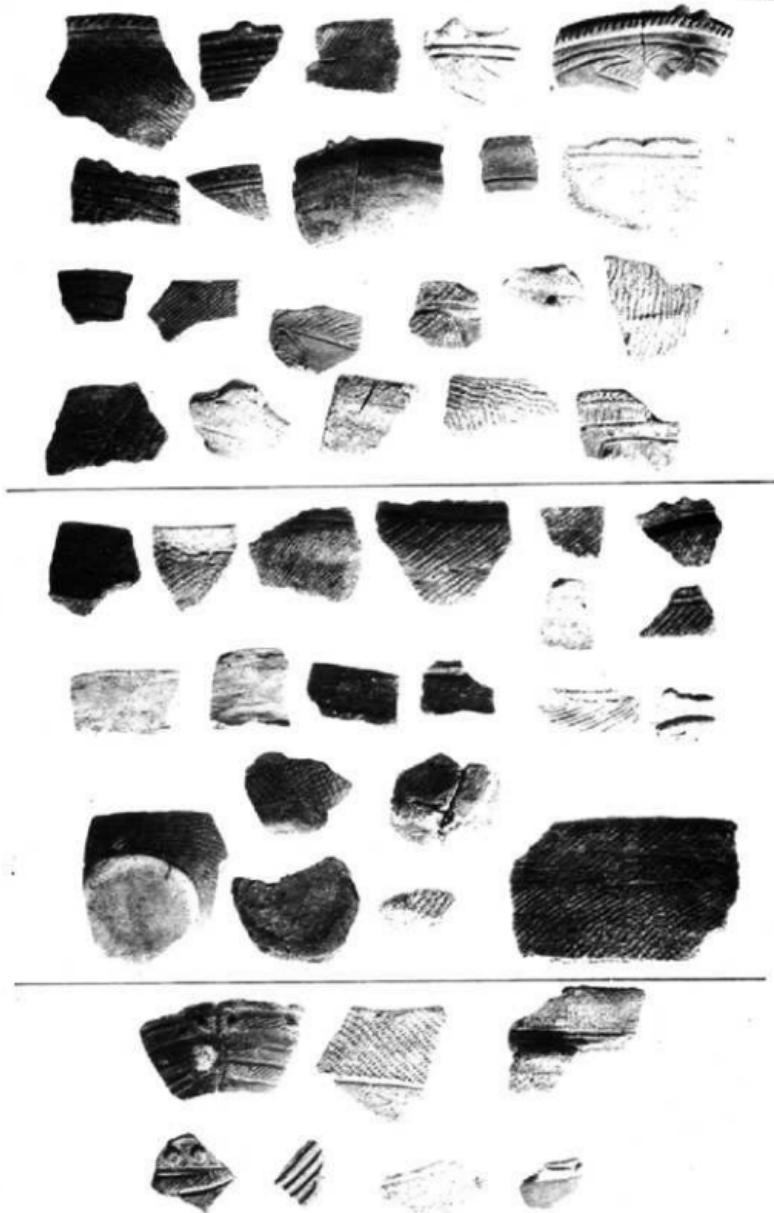
的場遺跡 3号住居跡覆土1層出土土器 (2)



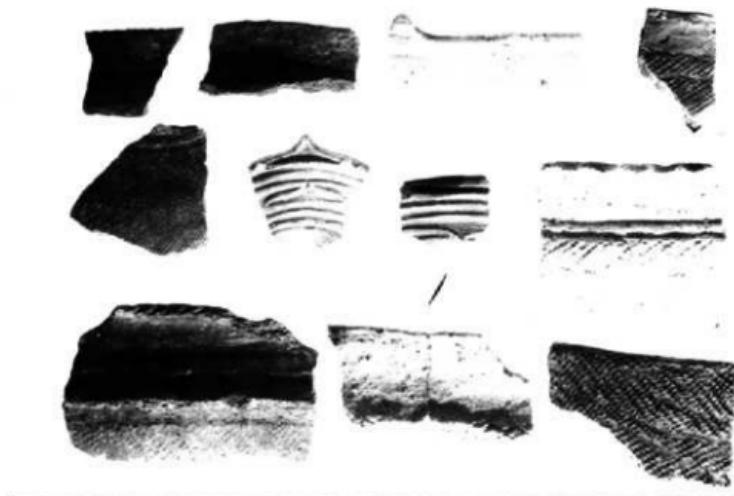
的場遺跡 3号住居跡覆土2・3・4層出土土器



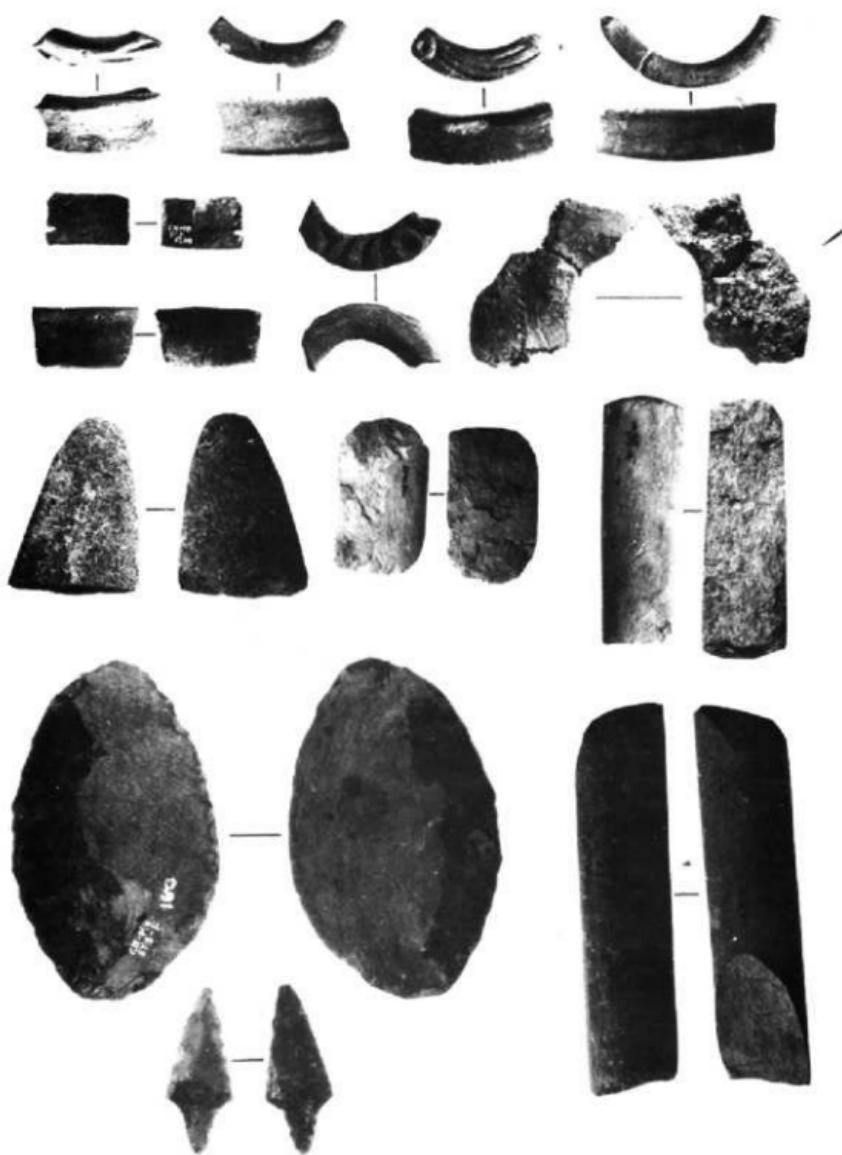
的場遺跡 3號住居跡周溝出土土器



的場遺跡 3號住居跡覆土4層・床面・1號爐跡出土土器



的塔遺跡 3号住居跡E P 1～3・5・7～10出土土器



的場遺跡 3號住居跡出土遺物



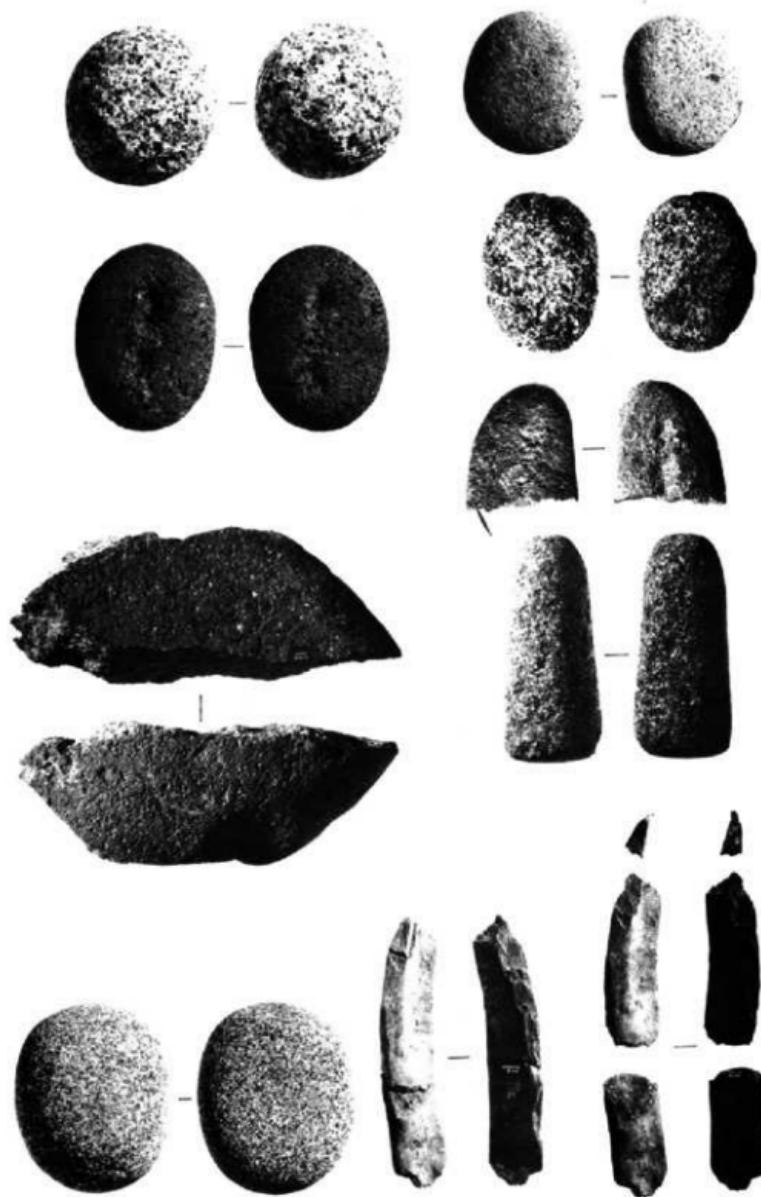
的場遺跡 3号住居跡出土打製石器 (1)



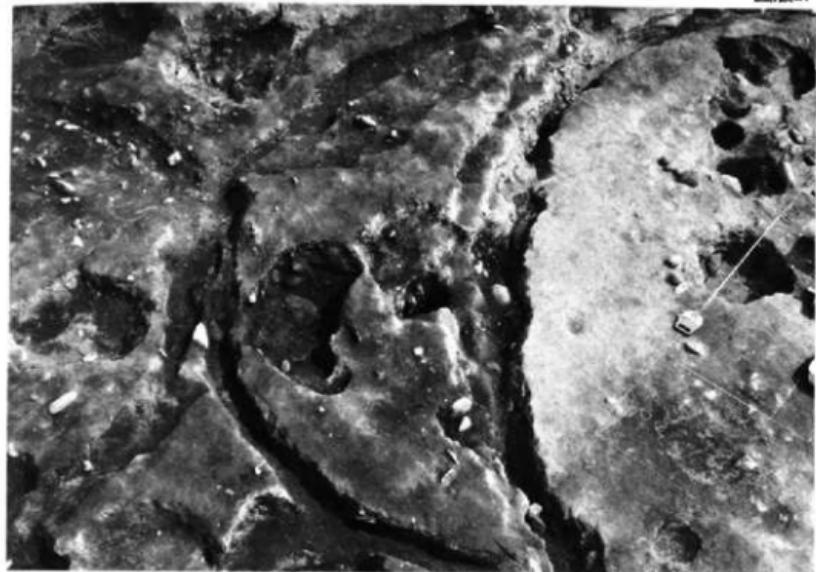
的場遺跡 3号住居跡出土打製石器 (2)



的場遺跡 3号住居跡出土磨製石器（1）



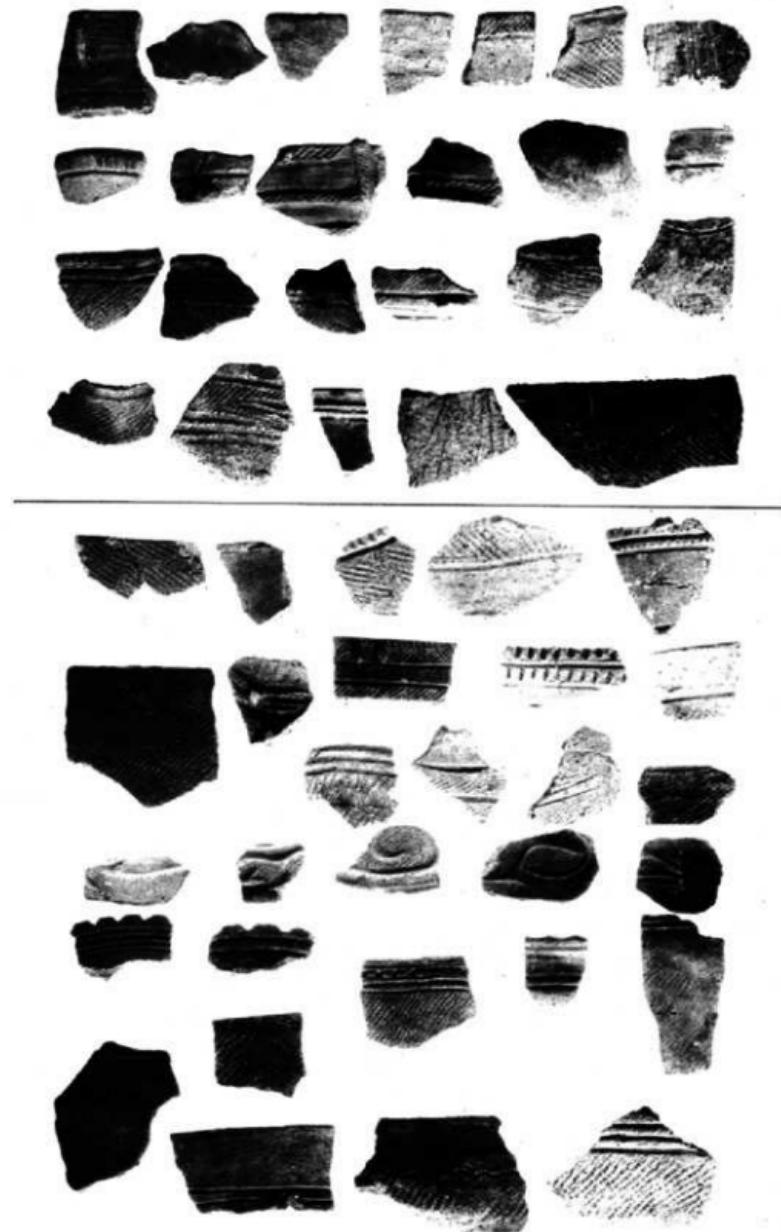
的場遺跡 3号住居跡出土磨製石器 (2)



的墙遗址 4号住居跡全景



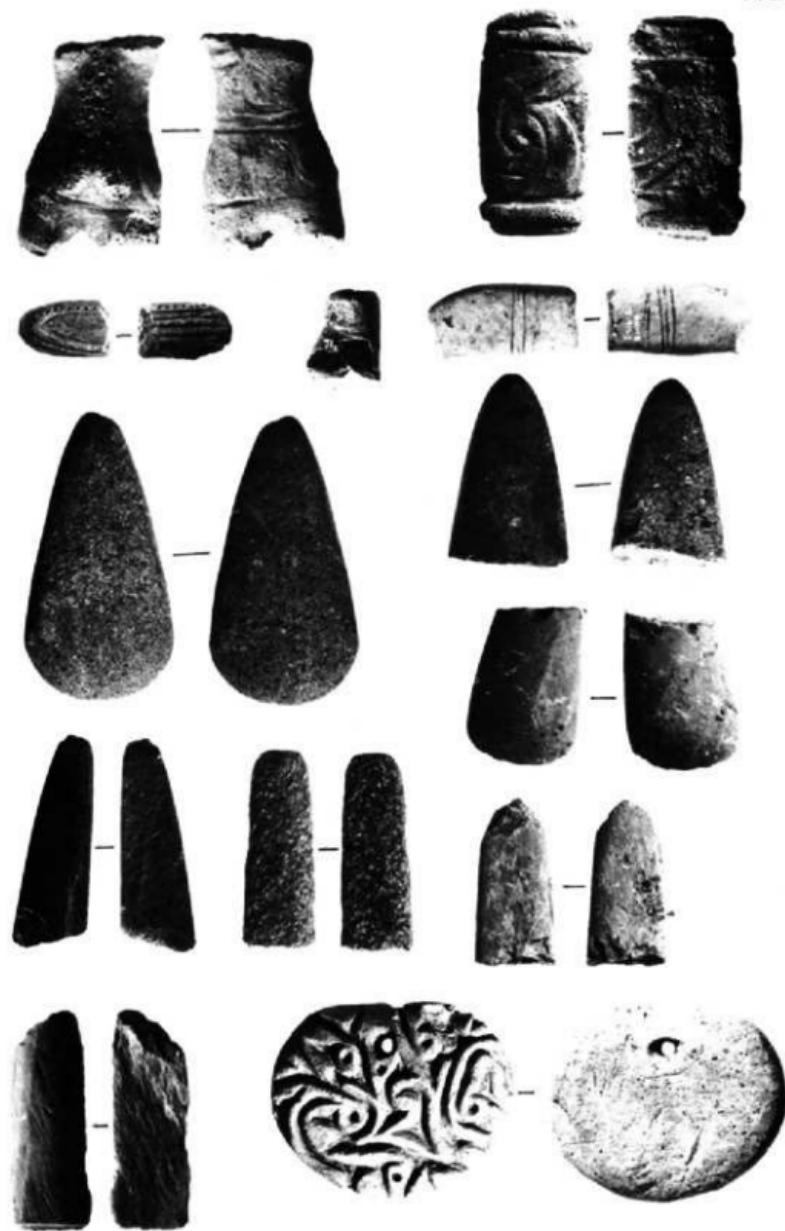
的墙遗址 岩版出土状况



的場遺跡 4號住居跡覆土2層・包含層I層出土土器



的墙遗址 4号住居出土打制石器



的埋藏跡 4号住居跡・包含層出土土製品・石製品



的場遺跡 4号土壤近景



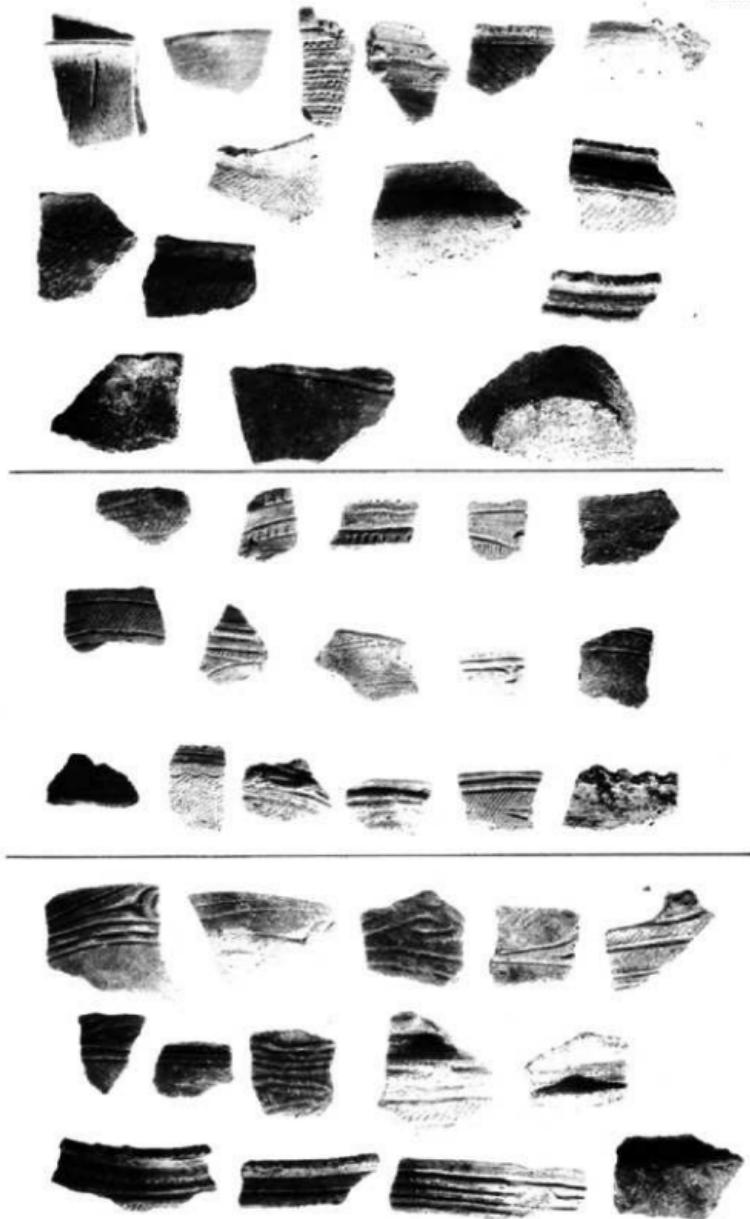
的場遺跡 8a号土壤遺物出土狀況



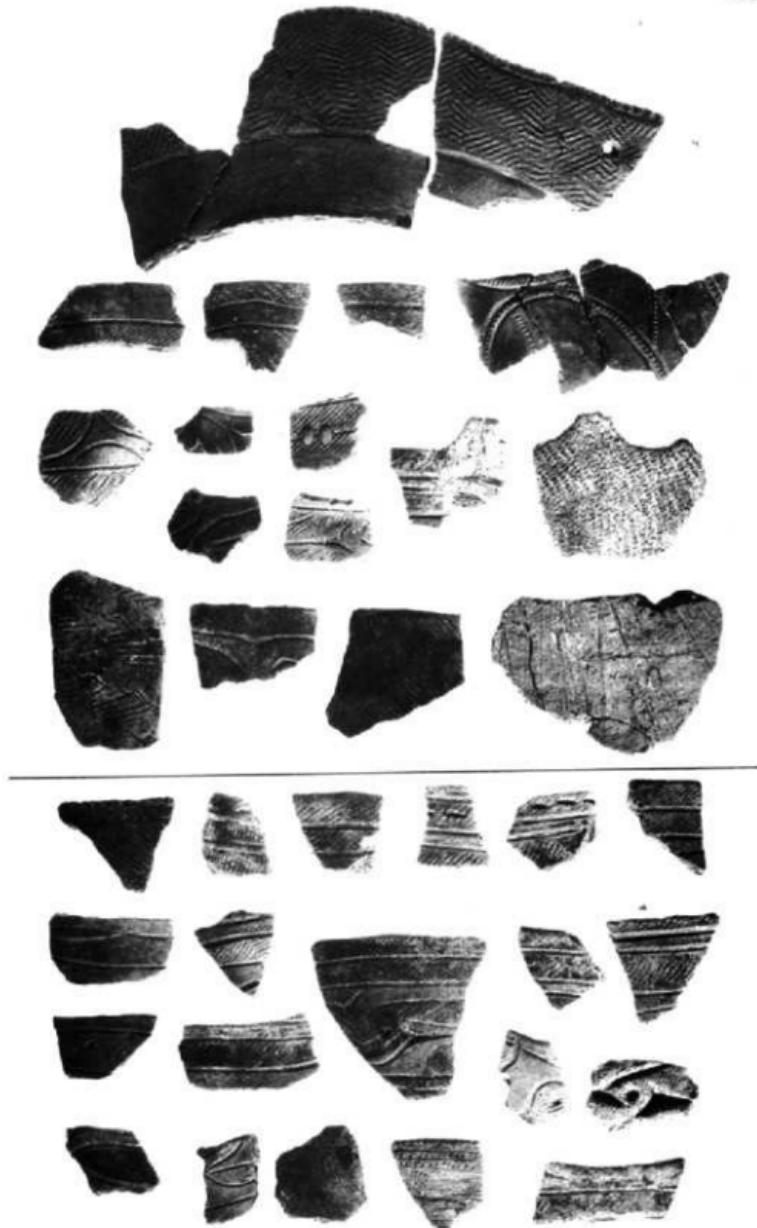
的場遺跡 8號土壤土偶出土狀況



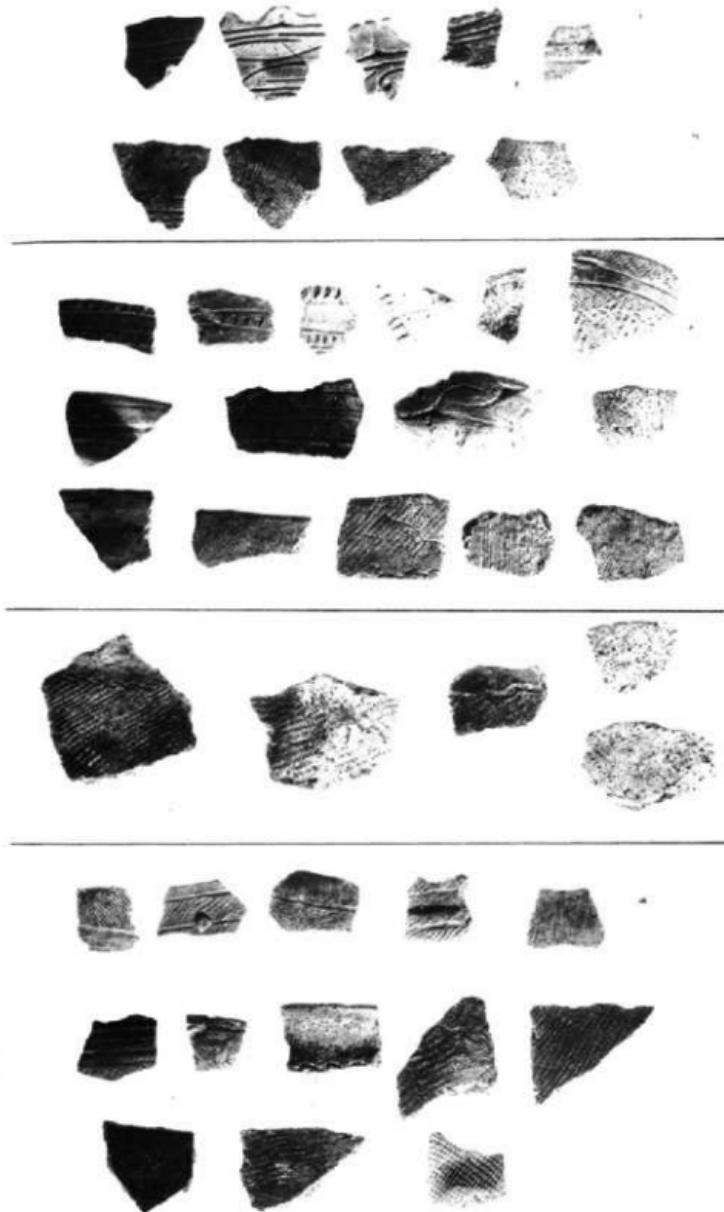
的場遺跡 11號土壤全景



的場遺跡 1·2号·3·4号·5号土壤出土土器



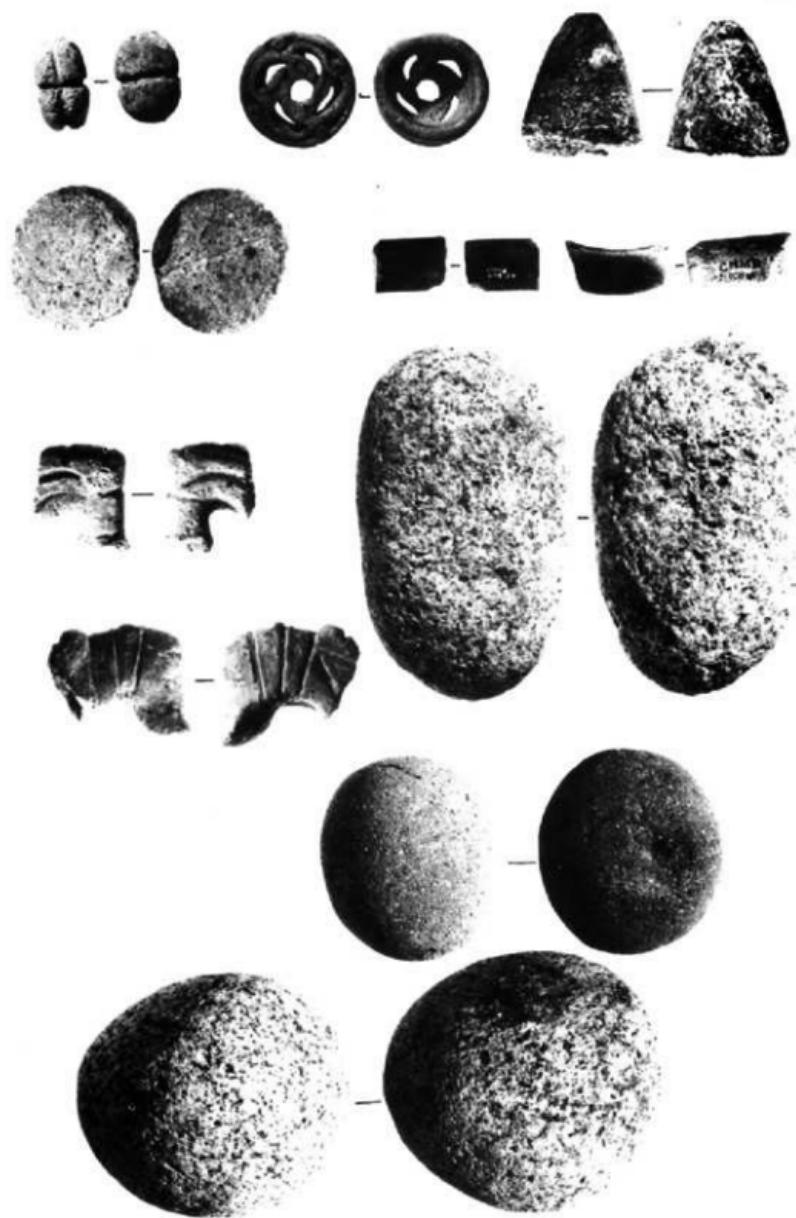
的场遗址 6号·8号土壤出土器



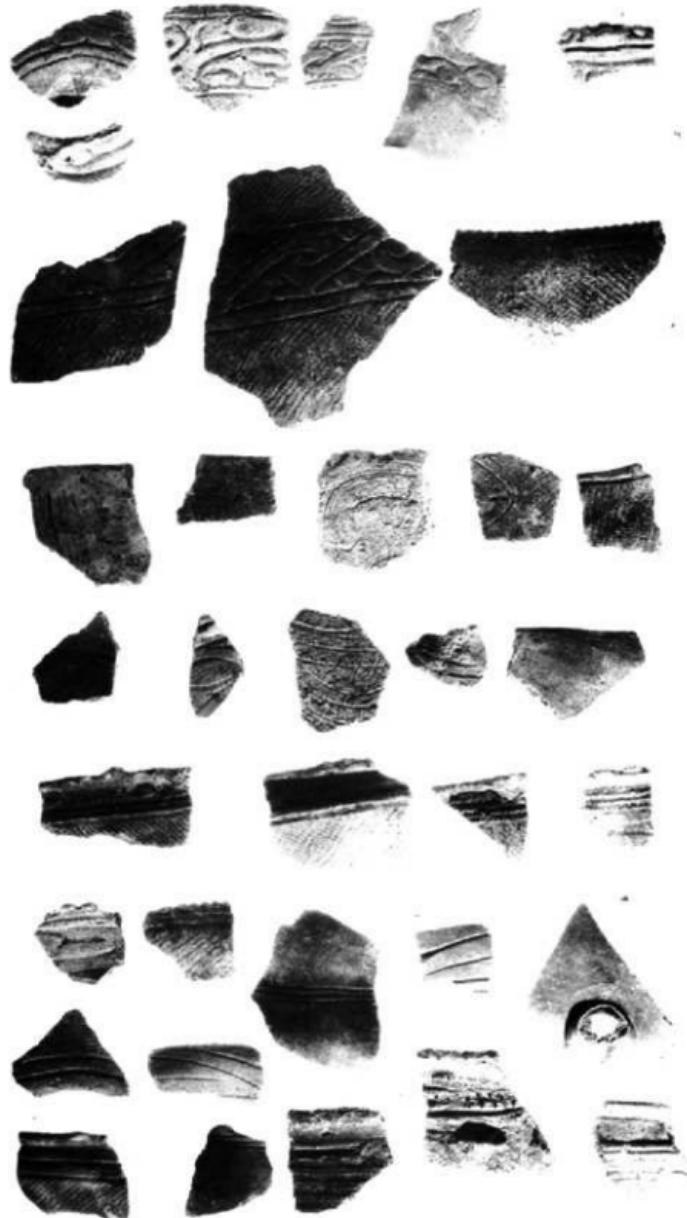
的墙道路 10号·11号·12号·14号·13号土壤出土土器



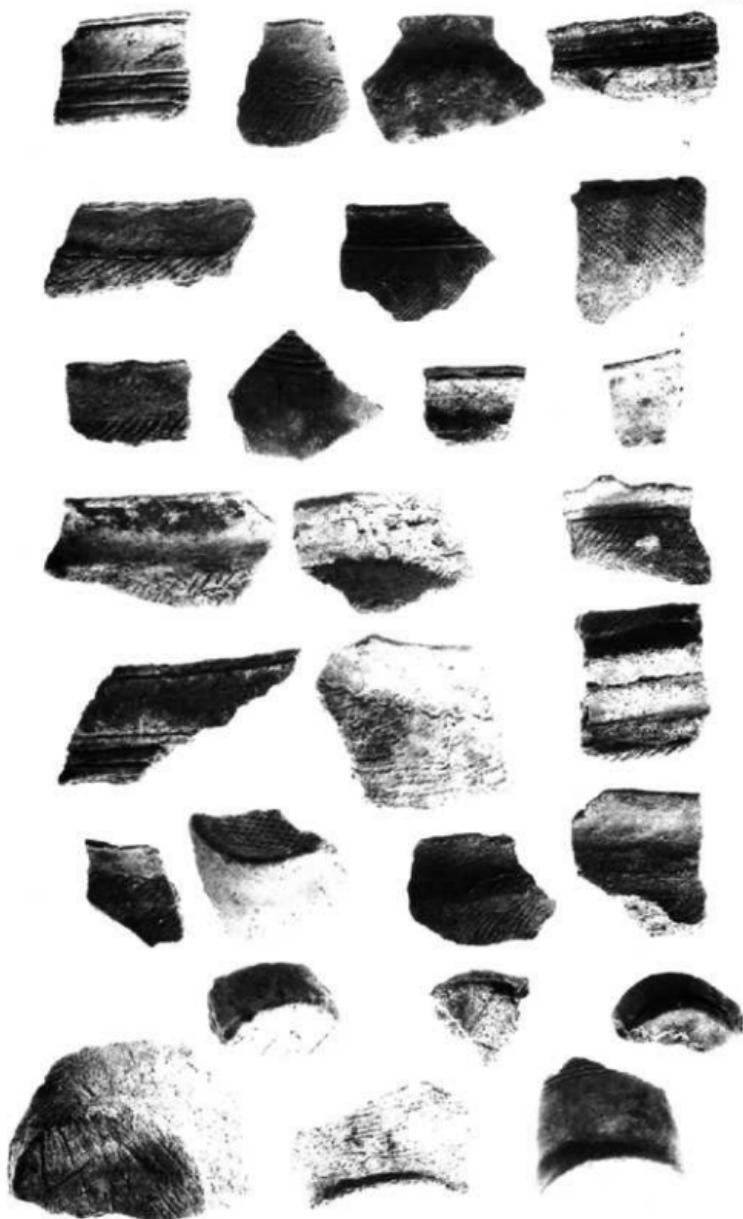
的場遺跡 土壤群出土打製石器



的場遺跡 6号・8号土塹出土遺物



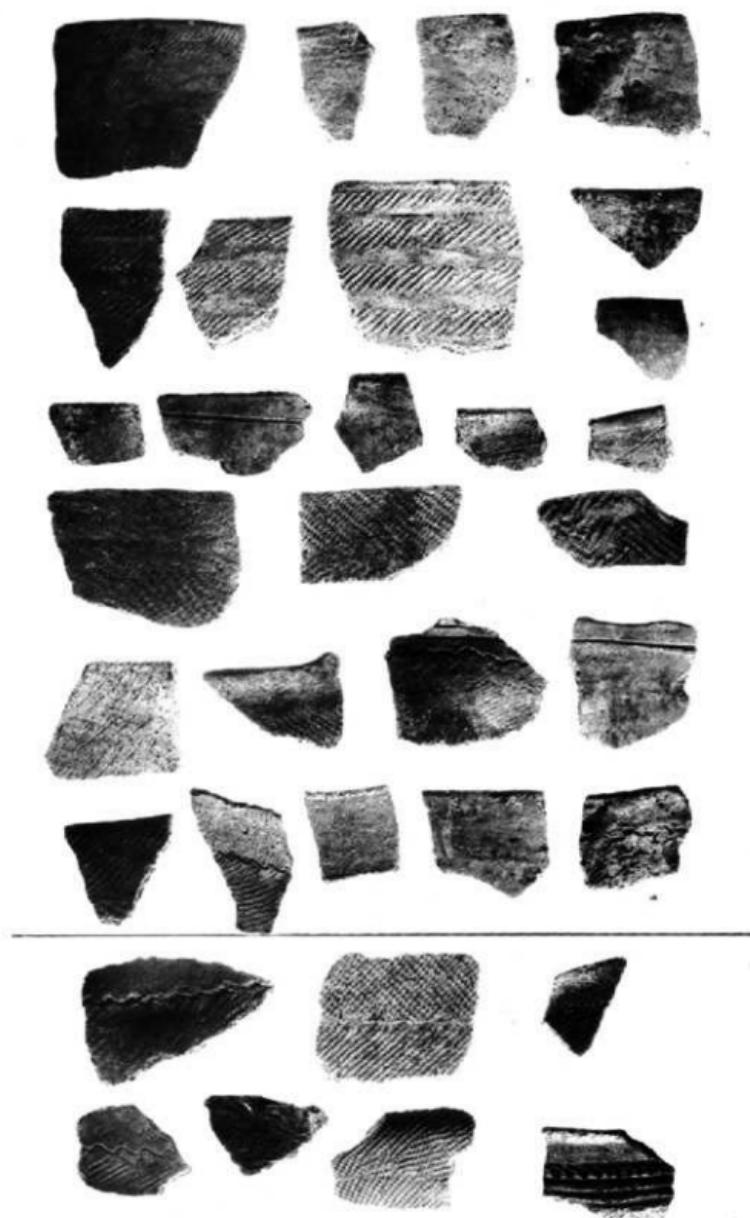
的場遺跡 包含屢Ⅱ層出土土器（1）



的塔遺跡 包含層Ⅱ層出土土器（2）



的場遺跡 包含層Ⅱ層・四田層出土土器（1）

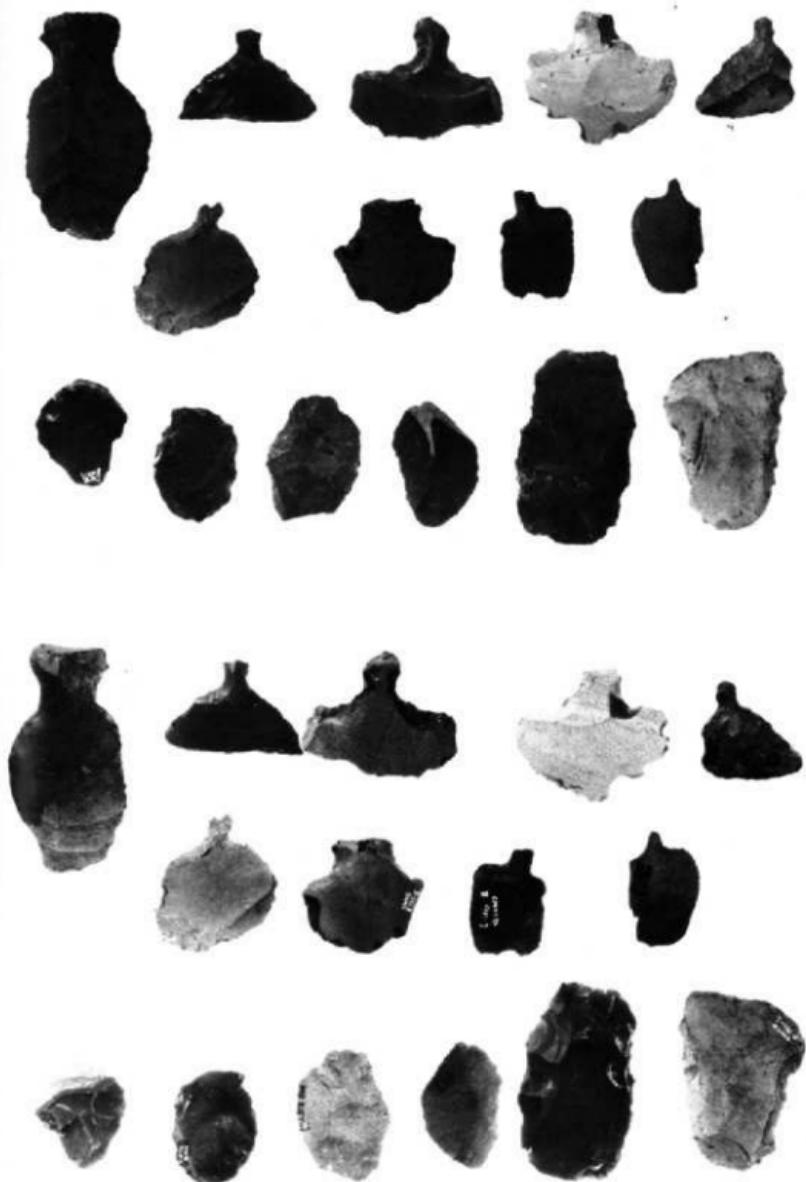


的場遺跡 包含層 II 層・同Ⅲ層出土土器 (2)





的場遺跡 無含層出土打製石器 (2)



的場遺跡 包含層出土打製石器（3）



的場遺跡 包含層出土磨製石器 (1)



的場遺跡・包含層出土磨製石器(2)



村中遺跡 遠景



村中遺跡 調査状況



村中遺跡 発掘風景



村中遺跡 PIT群



古都B 進跡 造景



古都B 進跡 近景



古都B遺跡 トレンチ配置



古都B遺跡 3トレンチ土層



助川遺跡 近景



助川遺跡 B 地点50・110G 付近発掘全景



助川遺跡 発掘区状況



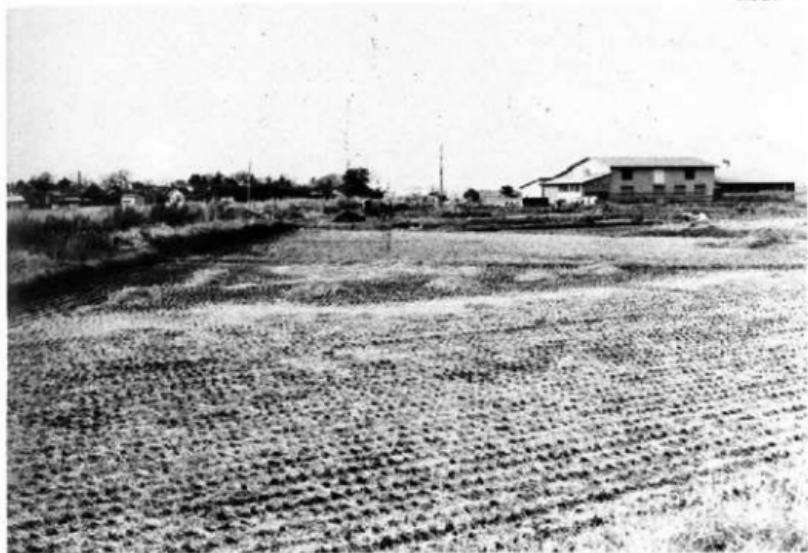
助川遺跡 発掘区状況



助川遺跡 B 地点50-120G 発掘区付近



助川遺跡 土層セクション



上台遺跡 遠景



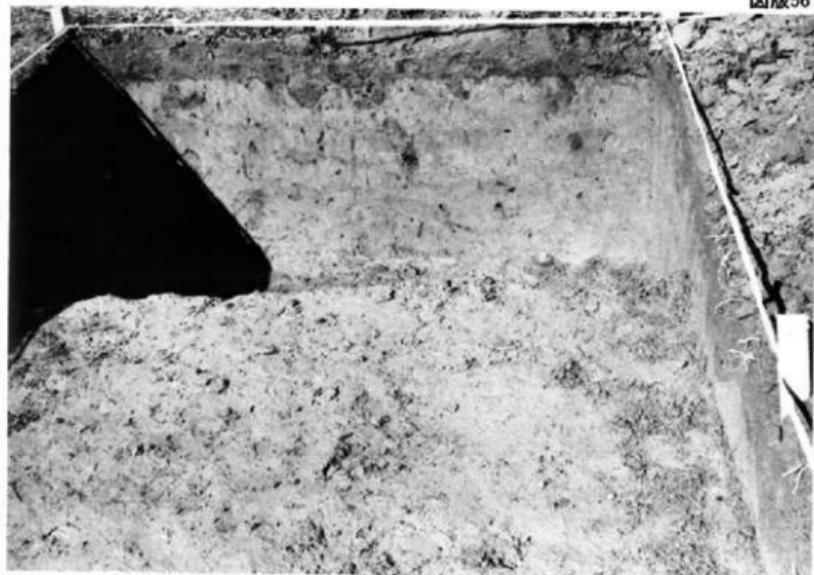
上台遺跡 調査状況



上台遺跡 発掘風景 (1)



上台遺跡 発掘風景 (2)



上台道路 土層 (10—40北壁)



上台道路 6号溝底過積土層



上台道路 1号落ち込み遺構全景



上台道路 2号住居跡全景



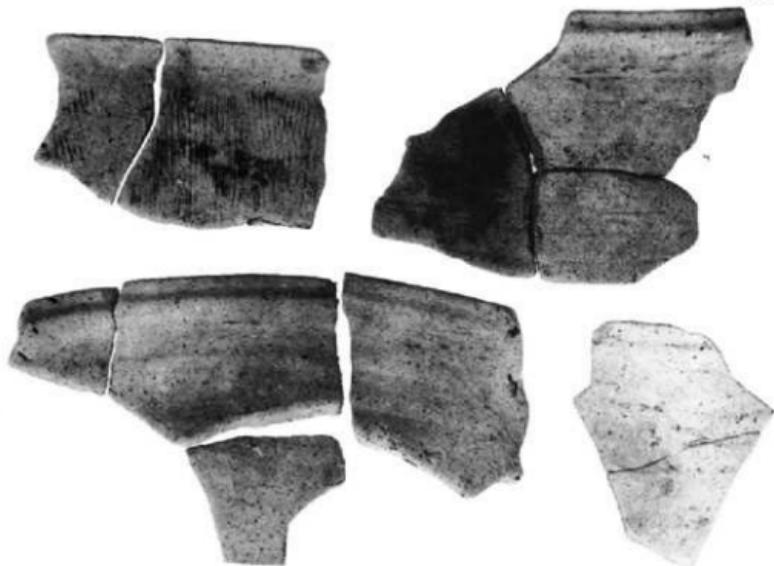
上台遺跡 2号住居跡内土器出土状況 (1)



上台遺跡 2号住居跡内土器出土状況 (2)



上台遺跡 出土土器・石器



上台遺跡 出土土器 (1)



上台遺跡 出土土器 (2)

山形県埋蔵文化財調査報告書第14集  
**昭和50・51年度山形県営農林  
事業関係遺跡調査報告書**

昭和53年3月31日 印刷

昭和53年3月31日 発行

発行 山形県教育委員会

印刷 株式会社大風印刷

この調査報告書は山形県教育府文化課  
の承認を受けて、山形県文化財保護協  
会が増刷頒布するものである。

山形市松波二丁目8-1  
**山形県文化財保護協会**